

『千載佳句』と唐代の文学

劉, 潔

<https://doi.org/10.15017/1560372>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

『千載佳句』と唐代の文学

劉

潔

『千載佳句』と唐代の文学

目次

序論	1
一 唐詩の書写時代の姿を持つ旧鈔本について	1
二 『千載佳句』に関する先行研究の概要	5
三 本論文の目的と構成	9
上篇 奈良・平安朝に伝来した盛唐の詩歌	14
第一章 「王維集廿卷」考―『千載佳句』所収王維詩句を中心として―	14
一 問題提起	14
二 「王維集廿卷」について	15
三 『千載佳句』所収の王維の詩	19
四 「廿卷」王維集と唐代の小集	26

第二章	唐岐王李範の中国逸詩考……………	36
一	問題提起……………	36
二	『千載佳句』所収の李範逸詩句について……………	37
三	「恵文太子」と開元時代の音楽文化……………	41
四	李範と盛唐の文壇……………	43
五	『恵文太子集』は何故日本に残されたのか……………	51
	まとめ……………	54
第三章	『千載佳句』所収盛唐詩人及び詩歌補考……………	63
一	僧貞幹について……………	63
二	張諤についての考証……………	71
三	丁仙芝「陪岐王宅宴」詩について……………	77
四	劉長卿の『千載佳句』収録詩句について……………	80

下篇 奈良・平安朝に伝来した中晩唐の詩歌……………88

第四章 「旧卷常に抄されて外国に将く」―『千載佳句』所収の楊巨源詩を中心として……………88

一 問題提起……………88

二 『千載佳句』所収の楊巨源詩について……………89

三 楊巨源作品の流传状況……………100

四 大江家と楊巨源の作品との関係……………105

まとめ……………107

第五章 『千載佳句』所収の中晩唐詩人について……………112

一 賀蘭遂について……………112

二 李伯良について……………120

三 王魯復について……………122

四 『千載佳句』所収の中晩唐詩人と唐詩の流传との関係について……………127

結論 『千載佳句』所収作品より見えて来る唐代文学研究の新しい地平	137
一 七～十世紀の東アジアにおける『千載佳句』の文化史的意義	137
二 唐代文学における『千載佳句』の研究意義	138
三 『千載佳句』と唐代の文学に関する今後の展望と課題	142
附録 『千載佳句』所収詩人間における交遊を示す詩の数の一覧	147
引用及び参考文献一覧	153
初出一覧	162

序論

一 唐詩の書写時代の姿を持つ旧鈔本について

(一) 日本の旧鈔本について

旧鈔本の定義について、神鷹徳治氏は次のように述べる。

旧鈔本とは、手書きの古い写本で、その書写の時期は、奈良期より室町期にいたるものであり、その直接の本文は、唐以前の遣唐使等によって将来された唐鈔本に由来する、日本で書写された漢籍資料である。

(「序論―旧鈔本と唐鈔本」、『旧鈔本の世界』⁽¹⁾)

また静永健氏は、神鷹氏の論を踏まえ、旧鈔本の特徴と価値について次のように説く。

①判断是否爲舊鈔本の標準、并不在於其是否爲筆寫之鈔卷或鈔本、更爲重要的是其本文所屬系統之底本是否曾被刊刻。這是因爲刊刻之時一般會對底本進行文字校勘、而經過文字校勘被出版的文本則永遠無法再回歸到舊鈔原貌。②舊鈔本之價值并不在於其所鈔寫的年代、而在於其本文所屬的系譜。即使近代的重鈔本、只要其本文被證實爲宋前系統、則應認定其爲舊鈔本。③舊鈔本之價值、與其作爲文物或美術品之價值沒有必然之關聯。

(①旧鈔本であるかを判断する指標は、それが筆写された鈔巻または鈔本であるかどうかではなく、より重要な点はその本文が帰属する系統の底本が刊刻されたものかどうかである。この原因は、刊刻する際には一般的にその底本に対する文字校勘がなされ、文字校勘を経て出版された本文は永遠に旧鈔本のもとの姿には戻らないことにある。②旧鈔本の価値は、その書写年代によるのではなく、その本文が属する系譜による。近代の重鈔本であっても、その本文が宋代以前の系統であることが証明できさえすれば、旧鈔本として認められるべきである。③旧鈔本の価値は、文物または美術品としての価値と必ずしも関係しなくてもよい。)

(「鎌倉与京都—以日藏旧鈔本之文本異同为中心—」、『日本古鈔本与五山版漢籍論叢』⁽²⁾)

以上のことから、刊本以前のテキストである旧鈔本の本文は、幾つかの欠点はあるものの、刊本のように編集者による改変を免れ、原本の形態・文字を留めた従来の姿を忠実に伝えるものといえるだろう。即ち、現在中国で行する唐人の作品は基本的に宋代以降の刊本に拠っており、中でも宋代(北宋・南宋)に作られた宋版は、しばしば宋人による校訂が加えられ、高い評価を得るために原本を一定程度改めたものもあるため、唐代の作品の原形態を完全に反映しているとは言い難い。従って、唐代の詩人と詩歌の原初の形態や、伝播と、流伝の過程、また日本における受容状況などの問題を客観的に検討すれば、日本に現存する唐鈔本や日本人の手による旧鈔本は、敦煌写本と同様に貴重で、非常に注目に値するものである。

例えば、白居易の名作「長恨歌」の本文第七十一、七十二句に、⁽³⁾

鴛鴦瓦冷霜華重

鴛鴦の瓦冷たく 霜華重し^{しげ}

翡翠衾寒 誰與共

翡翠の衾寒くして 誰と与に共にせん^{ともとも}

とある。一方、この部分について日本残存の旧鈔本である金沢文庫本『白氏文集』⁽⁴⁾では、

鴛鴦瓦冷霜 花重

鴛鴦の瓦冷たく 霜花重し

舊枕故衾 誰與共

旧き枕 故き衾^{ふるふる} 誰と与に共にせん^{しとね}

とある。そして内閣文庫本『管見抄』⁽⁵⁾（国立公文書館内閣文庫蔵）、東大寺図書館蔵『白氏文集要文抄』⁽⁶⁾、正宗敦夫文庫本『長恨歌伝・長恨歌序・長恨歌』⁽⁷⁾、また『源氏物語』の葵の巻の引用などでは、⁽⁸⁾

鴛鴦瓦冷霜 華重

鴛鴦の瓦冷たく 霜花重し

舊枕故衾 誰與共

旧き枕 故き衾 誰と与に共にせん

とある。第七十一目において、中国の通行本が「華」、金沢文庫本が「花」に作るのは、同音同義語なので問題ないが、第七十二目の異同は、単なる伝写の際の書き誤りではない。実は、この旧鈔本『白氏文集』の本文こそが本来の詩句であることが、太田次男・平岡武夫・神鷹徳治氏らの研究によつて近年明らかとなったのである。このように資料的価値を大いに秘めた旧鈔本であるが、日本に残存する旧鈔本は何もこの『白氏文集』ただ一つではない。

(二) 旧鈔本としての『千載佳句』について

『千載佳句』は、平安時代の文人大江維時が編集した唐詩の名句集で、中国では既に散佚した作品が多く残され、また中国の文献には記録の見えない唐代詩人の情報も多数保存された貴重な資料である。この書物は日本人の編纂したものであるが、その詩句は唐から伝来した状態をよく保存しており、さきあげた二氏の定義どおりの旧鈔本の一つであると考えてよいだろう。よって、『千載佳句』は、鈔本形式の唐代詩歌とは如何なるものであつたかを理解するのに役立つもので、その本文が通行する刊本と大きく異なる点に文献的な価値がある。また、中国文学史の観点からも史料的价值が非常に高く、唐代書籍の伝播や詩人に関する補逸事項の考察をおこなう場合にも極めて有用な情報を提供する。この書物は日本漢文学研究においても、また唐代文学研究においても極めて貴重な研究資料なのである。

ここで、再び「長恨歌」の例を挙げよう。その第六十九、七十句目に、

遲遲鐘鼓初長夜

遲遲たる鐘鼓 初めて長き夜

耿耿星河欲曙天

耿耿たる星河 曙あけんと欲する天

とある。これを『千載佳句』卷上秋夜第一八六聯に引用する本文は、

遅遅鍾漏初長夜

遅遅たる鐘漏 初めて長き夜

耿耿星河欲曙天

耿耿たる星河 曙けんと欲する天

とあり、「漏」字に異同が見られる。実は、先に挙げた金沢文庫本をはじめとする各旧鈔本も同じく「漏」字に作っており、『千載佳句』に引用されている唐詩の本文が、いかに良質のものであるかが、これによって察せられるであろう。

さて、現在日本に保存される『千載佳句』の写本は、鎌倉時代の一本（現在国立歴史民俗博物館所蔵）、そしてこれを江戸初中期に抄写したものが島原市図書館の松平文庫に一本、さらに国立公文書館に二本（林家旧蔵の内閣文庫甲本と内閣文庫乙本）、国立国会図書館に一本存在する。⁽⁹⁾（以下、それぞれ歴博本、松平本、内閣甲本、内閣乙本、国会本と略称）。このうち歴博本は該書の原型を伝える最古の写本であり（残念ながら一部欠落丁あり）、松平本は歴博本の落丁を補うのみならず、文字校勘にも優れた写本である。そこで本論文では、歴博本⁽¹⁰⁾を底本とし、適宜松平本などを参照することとした。但し歴博本は第三十九聯から第六十六聯までの詩句が散佚しているため、該当箇所については松平本を底本とした。

二 『千載佳句』に関する先行研究の概要

『千載佳句』に関する先行研究については、以下の六つに分類して紹介する。

（一）『千載佳句』本体に関する研究

①川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究（上）』の第十六章（明治書院、一九五九年）

大江維時の生涯とその学問と当時の文化的背景を関連づけ、『千載佳句』を体系的にまとめる。

②金原理『千載佳句』（辞典解説）『日本古典文学大辞典』第三卷、岩波書店、一九八四年）

③宋再新『千年唐詩縁…唐詩在日本』（寧夏人民出版社、二〇〇五年）
いずれも『千載佳句』を簡単に紹介したもの。

④妹尾昌典『千載佳句』の資料的価値について」（成城大学『成城国文学』一三三号、成城国文学会、一九九七年）

『千載佳句』の資料価値をまとめ、論じた。

(二)『千載佳句』の写本に関する研究

①金原理「肥前島原松平文庫本『千載佳句』について」（『語文研究』一七号、九州大学国語国文学会、一九六四年）

②後藤昭雄「研究ノート…国立歴史民俗博物館本『千載佳句』について」（二松学舎大学『日本漢文学研究』一号、二松学舎大学二十一世紀COEプログラム、二〇〇六年）

(三)『千載佳句』を用いて『全唐詩』の逸詩を補う研究

①市河寛斎『全唐詩逸』文化元年（一八〇四）（清の鮑廷博『知不足齋叢書』に収録、一八二三年）

②陳尚君『全唐詩補編』（中華書局、一九九二年）

(四)『千載佳句』の索引・校勘に関する研究

①当山日出夫『千載佳句漢字索引』（勉誠社、一九八八年）

②金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集（千載佳句篇）』（培風社、一九四三年）

③宋紅校訂『千載佳句』（上海古籍出版社、二〇〇三年）

いずれも校勘書で、国立国会図書館（前帝国図書館）本を底本とし、基本的に『千載佳句』と『全唐詩』所収の本文とを校勘したものである。しかしこの底本と校勘の結果は、今日から見るとすでに最善なものではないと思われる。

④妹尾昌典『千載佳句』の校勘（『成城国文学』七号、成城国文学会、一九九一年）

⑤妹尾昌典『千載佳句』出典攷正（『成城国文学』九号、成城国文学会、一九九三年）

（五）『千載佳句』と中国、朝鮮の文献との比較研究

A 中国の類書との比較研究

①清田伸一「古今六帖と千載佳句」（『語文研究』二十一号、九州大学国語国文学会、一九六六年）

②三木雅博「中国晚唐期の唐代詩受容と平安中期の佳句選——顧陶撰『唐詩類選』と『千載佳句』『和漢朗詠集』——」（『国語と国文学』八二号、東京大学国語国文学会、二〇〇五年）

三木氏は「今後の平安中期漢文学の表現の出処を研究するに当たっては、白居易の詩文だけを検討するのではなく、元稹、劉禹錫の詩文にも目を向け、さらに彼ら以外の、すなわち「白詩圈」の『千載佳句』に採られた詩人たちの作品にも注意を払っていく必要があるだろう」と述べる。但し氏の研究は中晩唐の『唐詩類選』と『千載佳句』中の詩人を比較したもので、詩人や作品に関する具体的な研究ではない。

B 朝鮮の文献との比較研究

③芳村弘道「唐詩の新資料・朝鮮本『夾注名賢十抄本』をめぐる——『千載佳句』との関連性——」（『和漢比

較文学』四〇号、二〇〇八年)

(六)『千載佳句』所収詩人の個別の詩句に関する研究

A 白居易の詩句

① 巖紹盪「日本『千載佳句』白居易詩佚句輯稿」(『文史』二三輯、中華書局、一九八四年)

② 太田次男『千載佳句』から『和漢朗詠集』へ―白詩を中心として―(和漢比較文学叢書第四卷『中古文学と漢文学Ⅱ』、汲古書院、一九八七年)

③ 植木久行『千載佳句』所収白居易詩逸詩句考(上・下)、『白居易研究年報』第二・四号、勉誠出版、二〇〇一・二〇〇三年)

④ 謝思焯『千載佳句』所載の白居易佚詩に関する考察―中唐時代の歌伝協同体創作論を兼ねて―(高松寿夫・雋雪艶編『日本古代文学と白居易』、王朝文学の生成と東アジア文化交流』、勉誠出版、二〇一〇年)

B 許渾の詩作

⑤ 森岡ゆかり『千載佳句』・『和漢朗詠集』所収許渾詩本文をめぐって(古典研究会編『汲古』三七号、汲古書院、二〇〇〇年)

⑥ 森岡ゆかり「伝小野道風筆許渾詩本文について」(『和漢比較文学』二六号、二〇〇一年)

C 耿漳の詩作

⑦ 静永健『千載佳句』所引耿漳詩異文考(『中唐文学学会報』一三号、二〇〇六年)

D 崔致遠の詩作

⑧ 静永健『千載佳句』所収崔致遠逸詩句初探(『唐詩推敲 唐詩研究のための四つの視点』、研文出版、二〇〇九年)

〇一二年)

森岡ゆかり氏と静永健氏は、『千載佳句』に関する優れた学術的見識により、従来白居易のみであったの対象を新たに他の詩人の作品に拡大した。

以上を参照した結果として、次のようなことが言えるだろう。

従来『千載佳句』に関する研究は、主に白居易の詩歌が注目されてきた。近年森岡ゆかりと静永健両氏によって許渾、耿漳、崔致遠等の研究がようやく進められることとなったが、『千載佳句』所収の詩人は百五十三人（該書の奥書に拠る）にもものぼり、この方面の研究はまだ始まったばかりであると言える。また、現在もその研究内容は、基本的に本文異同の範囲に限定されており、『千載佳句』中の詩句の詳細な解説や関連して見えて来るさまざまな唐代の文学現象の考察などについては、未だその成果が不十分であるのが現状である。『千載佳句』の文献学以外の研究価値はいまだ発掘されていないのである。

三 本論文の目的と構成

本論文では、先行研究の成果と現状を踏まえつつ、日中両国の各種史料及び近年新しく発見された出土文献等を用いて、『千載佳句』所収の唐代の詩人・詩篇及びそれに関連する文学上の問題に着目する。中国に存する文献（大部分が刊本）と比較検討した際に、これら『千載佳句』に残される唐人の詩句が異本としてどのような特徴をもつのか、また『千載佳句』の詩句或いはそれらが参照した底本がどのような経緯で日本に伝来したのか、また合わせて、従来考証不可能と思われるてきた経歴未詳の唐代詩人と唐代文学について、『千載佳句』所収の逸詩や新出土文

献を用いてどの程度新たな側面を補い考察しうるのか、さらに当時のアジア漢字文化圏におけるいかなる書籍流通状況を反映しているのか、について究明を試みるものである。これは、忘れ去られた唐詩の佚文蒐集、中国文学史の補完といった成果にとどまらず、さらには『千載佳句』をはじめとする日本古鈔本の文献価値、及び八〜九世紀の日中の文化交流の実態を解明する上でも、大きな実証になることを確信する。各章節の概要は、以下の通りである。

上篇「奈良・平安朝に伝来した盛唐の詩歌」では、『千載佳句』に見える奈良朝から平安朝初期に伝来した盛唐の作品について考察した。即ち『千載佳句』所収の盛唐詩歌を主要な文献として、その中の王維や唐岐王李範などの盛唐詩人や、これに関連する従来指摘されることのなかった文学上の新発見について述べた。

第一章「王維集廿巻」考」では、平安時代の文人藤原佐世（八四七〜八九八）撰『日本国見在書目録』に「王維集廿巻」とあるのに着目し、これが唐宋時代の中国では全て「王維（文）集十巻」とされていた説と異なることについて考察した。『日本国見在書目録』に記す鈔本王維集は果たして存在していたのか。またその巻数が中国の文献の記録と異なるのはなぜか。これらの問題について、『千載佳句』等の古文献に収録される王維の詩句を手懸かりとし、以下のことを明らかにした。

（一）『日本国見在書目録』の「王維集廿巻」という記録は信頼に値する。『千載佳句』等日本の古文献に収録される王維の詩句がこれを傍証する。

（二）廿巻本の王維集は、中国で通行する十巻本王維集ではなく、開元天宝年間に既に民間で流布していた王維の「小集」である。

(三) 王維の「小集」が最初に日本に伝えられた経緯を完全に明らかにするのは困難であるが、日本に伝来した時期は、少なくとも安史の乱が起こる以前であるということが推定できる。

第二章「唐岐王李範の中国逸詩考」では、王維や崔顥といった盛唐詩人たちの文学活動を支援し、「楽府の文雄」とも称されていた唐岐王李範及びその詩作について考察した。彼の詩歌は中国本土では残存しないが、『千載佳句』に七言詩句五聯が収録され、さらに『日本国見在書目録』に『惠文太子集』十巻」が著録されている。このことを究明するため、『千載佳句』所収の李範の逸詩句及び彼の音楽活動や交遊関係、盛唐詩壇に与えた影響について考証し、その上で、中国においてなぜ『惠文太子集』が保存されなかったのか、またなぜ奈良時代の日本に『惠文太子集』が渡来したのかについて検討した。

第三章『千載佳句』所収盛唐詩人及び詩歌補考」では、王維と李範以外の『千載佳句』所収の盛唐詩人について考察を行い、盛唐詩壇について貴重と思われる補足資料を幾つか発見した。即ち過去の『千載佳句』研究でも「経歴未詳」とされてきた僧貞幹について、近年新たに出土した塔記の碑文を利用し、復元を試みた。またこの他に張諤・何仙芝に関しても、関連する墓誌銘を用いて補足した。さらに盛唐詩人として著名な劉長卿について、『千載佳句』所収詩句の特徴及びその来源について考察した。

下篇「奈良・平安朝に伝来した中晩唐の詩歌」では、『千載佳句』に収められる中唐期から晩唐期にかけての詩人とその詩歌について考察した。

第四章「旧巻常に抄されて外国に将く」―『千載佳句』所収の楊巨源詩を中心として―では、鈔本の時代において、中唐詩人の楊巨源の「旧巻常に抄されて外国に将く」と言われる文化的現象について、『千載佳句』中の中国

本土では佚詩となつてゐる詩句も含めた楊巨源の十八聯の詩句を手懸りに考察した。また、『千載佳句』の楊巨源の作品は、中国で現在通行してゐる一卷本の「楊巨源詩」とは別系統のテキストを底本としてゐることを指摘した。またこの底本は、渤海人によつて日本に伝來した原本或いはその転写本である可能性が高いこと、さらに楊巨源の詩が、大江維時を経て、平安後期の大江匡房（一〇四一〜一一一一）の頃まで確実に日本で読まれていたことを明らかにした。

第五章 『千載佳句』所収の中晩唐詩人についてでは、『千載佳句』に加えて近年新たに出土した墓誌銘を用い、従來その経歴が未詳とされてゐた中晩唐詩人について考証した。即ち李伯良・王魯復・賀蘭遂について検証し、さらに『千載佳句』に収録される中晩唐詩人の作品の特徴についても考察した。

注

- (1) 神鷹徳治、静永健 『旧鈔本の世界 漢籍受容のタイムカプセル』(『アジア遊学』一四〇、勉誠出版、二〇一一年、五頁)。
- (2) 劉玉才、潘建国 『日本古鈔本与五山版漢籍研究論叢』(北京大学出版社、二〇一五、八〜九頁)。
- (3) 謝思煒 『白居易詩集校注』卷一一二(中華書局、二〇〇六年、九四四頁)。
- (4) 『白氏文集』卷一一二(現大東急記念文庫蔵の金沢文庫本、勉誠社、一九八三年、二〇七頁)。
- (5) 『管見抄』卷二(国立公文書館内閣文庫蔵、永仁三年(一二九五)に原本より書写されたもの)。
- (6) 宗性 『白氏文集要文抄』卷一一二(東大寺図書館蔵)。

- (7) 『長恨歌伝・長恨歌序・長恨歌』（正宗敦夫文庫の正安二年〔一三〇〇〕写本、福武書店、一九八一年）。
- (8) 紫式部『源氏物語』（『日本古典文学全集』、小学館、一九七〇年、五八頁）。
- (9) 『千載佳句』の写本について、金子彦一郎などの先行研究は帝国図書館（今の国立国会図書館）の蔵本を底本としていることを宋紅氏が指摘しており（『千載佳句』、上海古籍出版社、二〇〇三年、一二頁）、宋氏本人もこれを底本としている。
- (10) 歴博本『千載佳句』は、国立歴史民俗博物館蔵史料編集会編『漢詩文』第二一巻（貴重典籍叢書、臨川書店、二〇〇一年）所収。

上篇 奈良・平安朝に伝来した盛唐の詩歌

第一章 「王維集廿卷」考

—『千載佳句』所収王維詩句を中心として—

一 問題提起

『日本国見在書目録』に「王維集廿（卷）」とあり（以下『見在書目録』と略称）、これは日本における王維の作品集の最も早い記録である。ところが唐宋時代の中国の各種書目における王維集の記述はこれとはやや異なる。例えば、王縉「進王維集表」には「臣近搜求、尚慮零落。詩筆共成十卷、今且隨表進上（臣近ごろ搜求し、尚ほ零落なるを慮るも、詩筆 共に十卷を成し、今且に表に随ひ進上せんとす）」とあり、また『崇文總目』に「王維文集十卷」とあり、『新唐書』「芸文志」、『郡齋讀書志』といった目録資料においても「王維集十卷」と記される。ここから唐宋時代には、王維集は全十卷であったとする説が一般的である。ならば、『見在書目録』に記す鈔本王維集の卷数の異同はなぜ起きたのだろうか。ここには当時の日中文化交流の一端が反映されており、王維の作品が最初に日本に伝わった際の本文系統や受容状況などを知る上で重要な手懸かりが残されている。

ところで、『見在書目録』成立時、「廿卷」の王維集は本当に存在していたのか。中国側の目録に記録される王維集は刊本と思われるが、『見在書目録』に記録されるのは鈔本である。ならば、中国の文献と『見在書目録』の異同は、単に刊本と鈔本の特性に因るもののだろうか。これらの疑問に対し、本章では『千載佳句』所収の王維詩

と通行本王維集を校勘し、王維集の流传状況と、背景にある日中文化交流の実態について考察する。

二 「王維集廿卷」について

王維集の巻数の違いは、『見在書目録』の唐集及びその巻数の記し方と中国の目録志との違いによるものなのか。また巻数の分け方の違いは、全くの誤記によるものなのか。これについて、以下、『見在書目録』別集家に収録される唐人の作品集を中国文献の目録志と比較して表に示す。

唐人作品集				注 語
『旧唐書』「経籍志」	『日本国見在書目録』	『新唐書』「芸文志」	『崇文総目』	
駱賓王集十卷	駱賓王集十卷	駱賓王集十卷	駱賓王集十卷	日本に保存される抄巻（正倉院御物）の作品数は刊本よりも多い。
王勃集三十卷	王勃集三十卷	王勃集三十卷	無	
陳子良集十卷	陳子良集十卷	陳子良集十卷	無	
陳子昂集十卷	陳子昂集十卷	陳子昂集十卷	無	
陳子昂集十卷	陳子昂集十卷	陳子昂集十卷	無	

集名・巻数の
とも同じもの

集名・巻数 に異同の あるもの	集名・巻 数とも同 じもの										
無	無	虞世南集三十卷	富嘉謨集十卷	杜審言集十卷	無	沈佺期集十卷	柳顧言集十卷	宋之問集十卷	上官儀集三十卷	太宗文皇帝集三十卷	盧照隣集二十卷
張昌齡集十卷	白氏文集七十卷	虞世南集三十卷	富嘉謨（謨）集十卷	杜審言集十卷	令狐楚表奏集十卷	沈佺期集十卷	柳顧言集十卷	宋之問集十卷	上官儀集三十卷	太宗文皇帝集三十卷	盧照隣集二十卷
張昌齡集二十卷	無	虞世南集三十卷	富嘉謨集十卷	杜審言集十卷	（令狐楚）表奏集十卷	沈佺期集十卷	柳顧言集十卷	宋之問集十卷	上官儀集三十卷	無	盧照隣集二十卷
無	白氏文集七十卷	無	無	無	無	沈佺期集十卷	無	宋之問集十卷	無	無	盧照隣集十卷
『新唐書』所収の二十卷は伝記によるものであり、存否未詳。											『崇文総目』のみ巻数が異なる。

集名・巻数 に異同の あるもの											
喬知之集二十卷	徐彦伯前集十卷 後集十卷	吳少微集十卷	無	無	韋承慶集六十卷	文皇帝集三十卷	無	無	許敬宗集六十卷	無	崔融集四十卷
喬知之集二卷	徐彦伯集二卷	吳少微(微)集五卷	王涯集一卷	王維集二十卷	韋永(承)慶集一卷	文皇帝集一卷	張説集十卷	王昌齡集一卷	許敬宗集二十卷	楊炯集三十卷	崔融集十卷
喬知之集二十卷	徐彦伯前集十卷 後集十卷	吳少微集十卷	王涯集十卷	王維集十卷	韋承慶集六十卷	無	張説集二十卷	王昌齡集五卷	許敬宗集八十卷	楊炯盈川集三十卷	崔融集六十卷
無	無	無	無	王維文集十卷	無	無	無	無	無	無	無
									八十卷本についての 情報に他書に見 えない。		「兩唐書」所収の「崔 融集」は現存しな い。

集名・巻数 に異同の あるもの	無	無	無	『旧唐書』元稹伝には「所著：一百卷、号曰「元氏長慶集」とある。
	元氏長慶集廿五卷	元氏長慶集一百卷又小集十卷	無	『旧唐書』白居易伝に「成五十卷：号曰「元氏長慶集」とある。
	無	白氏長慶集廿九卷	白氏長慶集七十卷	『旧唐書』白居易伝に「成五十卷：号曰「元氏長慶集」とある。
	無	白氏長慶集廿九卷	五卷	『旧唐書』白居易伝に「成五十卷：号曰「元氏長慶集」とある。
	無	無	無	『旧唐書』白居易伝に「成五十卷：号曰「元氏長慶集」とある。

【注】この表の唐集名は『見在書目録』別集家に著録される順番に従い排列した。

『見在書目録』所収の作品集を、『旧唐書』「経籍志」や『新唐書』「芸文志」に記載される中国の通行本と比較すると、以下のことがわかる。

まず、書籍名、巻数共に両者に異同が無いものが大半である。これらの書籍は、『令狐楚表奏集』を除いてその他は全て『旧唐書』「経籍志」に記述がある。この『旧唐書』「経籍志」の原本の多くは開元九年以前の唐代の宮中において保管されていた蔵本である。⁽²⁾ そのため『見在書目録』に記されるこれらの書籍は、書名も巻数も唐の宮中所蔵のものと同じである。ゆえに、嵯峨天皇弘仁年間（八一〇〜八二三）に建てられた冷泉院に伝わる書籍は実際に存在していたのであり、『見在書目録』と中国の目録志の記録法が異なるということもあり得ない。

また、書名と巻数の記述が異なることについては以下の要因が考えられる。すなわち『新唐書』「芸文志」所録の書籍の由来は、唐宋時代の書目だけでなく史伝や雑著も含まれ、⁽³⁾ 『新唐書』成立時には既に散逸していた可能性がある。例えば表中の『新唐書』が記載する張昌齡集二十卷や崔融集六十卷、許敬宗集八十卷などは、そ

の存在が極めて疑わしい。だが『見在書目録』が『新唐書』の記録と異なるということは、その著録が全て実際に存在した蔵書の目録であるということである。ゆえに、二十巻の鈔本である王維集の存在は、十分に信憑性がある。さらに、『見在書目録』と中国目録志の記録が異なる唐詩集のうち、『見在書目録』の著録する巻数が中国の文献の記載よりも多いのは王維集しかない。その他は全て中国側の文献にある記述よりも少ない。ここから、二十巻本の王維集という記述がかなり特殊な存在であり、藤原佐世による単なる誤筆ではないと考えられるのである。

三 『千載佳句』所収の王維の詩

二十巻本王維集の存在を証明するためには、さらに他の証左を集める必要がある。以下に関連資料を挙げる。

平安時代の遣唐僧空海（七七四〜八三五）撰『文鏡秘府論』地卷十七勢には、王維の「哭殷四」詩一首が引かれている。⁽⁴⁾これは王維の詩作に関する日本で最も早い記録である。

また、遅くとも平安朝初期（九世紀頃）に成立した唐人の詩句集『新撰類林鈔』⁽⁵⁾第四残卷には、王維の五言詩三首が収録される。

『千載佳句』の奥書には王維の七言詩句は十一聯と記されるが、実際には十聯である。これは該書に収める唐人百五十三人中、十三番目に多い数である。

藤原公任（九六六〜一〇四一）撰『倭漢朗詠集』も王維の詩句一聯を収め、藤原基経（一〇五六〜一一四二）編『新撰朗詠集』にも王維の詩句三聯が採録されるが、これらは皆『千載佳句』にも所収⁽⁶⁾されている。また五山時代以来の詩話等にも王維の作品が引かれるが、これらは刊本以降のものであるためここでは詳述しない。

以上に挙げた資料のうち、『千載佳句』所収の王維の詩句が最も多く、また最も重要である。『千載佳句』の王維の七言詩句は、「四時部春興」第六三聯、「四時部暮春」第九八聯、「四時部早春」第一五二聯、「地理部春水」第三五〇聯、「宮省部禁中」第五五三聯、「草木部牡丹」第六四九聯、「宴喜部公宴」第六九〇聯、「別離部餞別」第九二九聯、「隱逸部山居」第一〇〇三聯、「隱逸部山居」第一〇〇四聯にそれぞれ収録される。以下、『千載佳句』からの引用は、字体については原資料の表記に従う。なお①のみ松平本に拠る。②以下は全て歴博本を参照。

① 第六三聯 「輞川別業」（四時部、春興）

雨中草色綠堪染 雨中の草色 綠 染むるに堪へ

水上桃花紅欲燃 水上の桃花 紅く燃えんと欲す

② 第九八聯 「寒食池水作」（四時部、暮春）

落花寂寂啼山鳥 落花寂寂たり 山に啼ける鳥

楊柳青青渡水人 楊柳青青たり 水を渡る人

③ 第一五二聯 「早秋山中作」（四時部、早秋）

草間虫響臨秋急 草間の虫響 秋に臨みて急に

山裏蟬聲薄暮悲 山裏の蟬聲 暮れに薄りて悲し

④ 第三五〇聯 「桃源行」（地理部、春水）

春來遍是桃花水 春來たりて遍く是れ桃花の水

不辨仙源何處尋 仙源は何れの処にか尋ぬるを弁ぜず

⑤ 第五五三聯 「訓郭給事」(宮省部、禁中)

禁裏踈鐘官舎晩

禁裏の踈鐘 官舎晩れ

省中啼鳥史天イ人稀

省中の啼鳥 史人稀まれなり

⑥ 第六四九聯 「牡丹花綻イ」(草木部、牡丹)

自恨開遲還落早

自ら恨む 開くこと遅くして 還た落つること早きを

縦横只是怨春風

縦横 只た是こ是れ春風を怨む

⑦ 第六九〇聯 「賜讌楽」(宴喜部、公宴)

陌上堯樽傾北斗

陌上の堯樽 北斗を傾け

樓前舜樂動南薰

樓前の舜樂 南薰を動す

⑧ 第九二九聯 「送元二使安西」(別離部、餞別)

勸君更盡一盃酒

君に勸む、更に尽くせ一盃の酒

西出陽關無故人

西のかた陽関を出づれば故人無からん

⑨ 第一〇〇三聯 「山中作」(隱逸部、山居)

寂寞柴門人不到

寂寞たる柴門 人到らず

空林獨與白雲期

空林 独り白雲と期す

⑩ 第一〇〇四聯 「九城成イ宮避暑」(隱逸部、山居)

隔窓雲霧生衣上

窓を隔てて雲霧 衣上に生じ

卷慢山泉入鏡中

慢を卷けば山泉 鏡中に入る

以上の十聯は、⑥第六四九聯が佚詩として江戸時代の市河寛齋『全唐詩逸』に補録されたほか、他の九聯の詩句はいずれも『文苑英華』、北京図書館所蔵宋蜀刻本『王摩詰文集』、静嘉堂文庫所蔵宋刊本『王右丞文集』、上海涵芬楼所蔵元刊本『須溪先生校本唐王右丞集』（以下北京図書館宋蜀本、静嘉堂文庫宋刊本、涵芬楼元刊本と略称する）といった王維の別集にも見られる。また③一五二聯と⑨一〇〇三聯は共に王維「早秋山中作」中の句であるため、中国の文献において確認できる『千載佳句』所収の王維詩は計八首ということになる。

①第六三聯。この詩は、王維が輞川に住んでいた天宝年間に作られたものと考えられる。⁽⁷⁾詩句の「欲燃」について、静嘉堂文庫宋刊本は「亦燃」に作り、涵芬楼元刊本は「亦然」に作る。但し『千載佳句』は、『文苑英華』と北京図書館宋蜀本と同様、「欲燃」に作る。

②第九八聯。詩題は諸刊本間で様々な異同がある。『千載佳句』は「寒食池水作」とし、『文苑英華』は「寒食汜水山中作」とし、北京図書館宋蜀本と涵芬楼元刊本は共に「寒食汜上作」とし、静嘉堂文庫宋刊本は「寒食汜中（一本作上）作」とする。またこの詩は唐人芮挺章が天宝三年に編んだ『国秀集』にも収録されるが、詩題を「途中口號」とし、その下に「集作汜上寒食」との双行注がある。⁽⁸⁾陳鉄民に拠ればこの詩は開元十四年（七二六）に王維が濟州から長安へ帰る途中で作られたという。⁽⁹⁾途中の「汜水」は唐代では河南府の汜水県に属し、河南の鞏県の東南から北の黄河へ流れていた。また「汜上」は汜水のほとりを指す。よって『千載佳句』の「池水」は「汜水」の誤筆であると考えられる。また詩中で山鳥を描いており、この詩は山中で作られたことがわかる。このため『文苑英華』の「寒食汜水山中作」が詩題として最もふさわしい。他の刊本と比べて『文苑英華』の本文に最も近いのは、『千載佳句』の本文である。

③ 第一五二聯。この聯を含む「早秋山中作」詩は王維が輞川で隱居した天宝年間に作られたと考えられる。⁽¹⁰⁾ 句中の「虫」字を『文苑英華』は「蟲」に作る。そのほか、北京図書館宋蜀本や静嘉堂文庫宋刊本や涵芬楼元刊本はともに「蝨」とする。ここでは、『千載佳句』は『文苑英華』のみと一致し、字体を簡略化する。ところで、他の刊本の「蝨」は、蝗虫バッタ・蟋蟀コオロギ等の幾つかの説があり、「虫」とはやや異なるが、概して蟋蟀を指すものと考えられる。

④ 第三五〇聯。この聯を含む「桃源行」詩の題下には、「時年十九」との自注が附されており、開元七年（七一九）の作であることがわかる。この聯には異同は無い。

⑤ 第五五三聯。この聯は「訓郭給事」詩から出る。「訓郭給事」詩は天宝十四載（七五五）に作られたものである。⁽¹¹⁾ 句中の「省中啼鳥史人稀」の「史人」について、『文苑英華』や北京図書館宋蜀本や静嘉堂文庫宋刊本や涵芬楼元刊本はともに「吏人」に作る。また「史人」の右横に「天イ」と傍注があり、「史人」と「天人」二通りの本文があったことがわかる。これらの異同は、『千載佳句』が王維別集或いは王維作品を含む選集を底本としていたかどうかを判断する材料とはならないが、ここから『千載佳句』の编者或いは伝抄者が参照した王維のテキストが一種類ではなかったことが明らかとなる。だが、ここでは「史人」や「天人」よりも、やはり「吏人」とするのが正しい。『千載佳句』の拠った写本が必ずしも優れているとは限らないのである。

⑥ 第六四九聯。この詩は中国の文献には見られない。詩題は「牡丹花綻イ」と作り、「牡丹花」と「牡丹綻」の二つの本文がある。いずれが正しいかは未詳。

⑦ 第六九〇聯。この聯は「大同殿生玉芝、龍池上有慶雲、百官共覲、聖恩便賜宴樂、敢書即事」詩の詩句である。この詩は天宝七載（七四八）に製作されたと考えられる。⁽¹³⁾ 大江維時は『千載佳句』宴喜部に入れ、原題から「賜

「讌楽」のみを抜き出して詩題とした。「讌楽」は、『文苑英華』や北京図書館宋蜀本、静嘉堂文庫宋刊本、涵芬楼元刊本はいずれも「宴楽」に作る。両者は字義はさほど変わらないが、「讌楽」は唐代の十部楽に見える語句である。

⑧第九二九聯。この聯は「送元二使安西」詩から出る。安史の乱発生以前に作られた⁽¹⁴⁾。聯中の「盃」字は「杯」の異体字である。「盃」字に作るのは歴博本、松平本、内閣乙本、『文苑英華』、涵芬楼元刊本で、「杯」字に作るのは内閣甲本、国会本、北京図書館宋蜀本、静嘉堂文庫宋刊本である。諸本中、最も古い『文苑英華』が歴博本『千載佳句』と同じであることは、『千載佳句』が古いテキストの系統に属していることを傍証する。

⑨第一〇〇三聯。この聯は「早秋山中作」詩から出る。大江維時は原題の「早秋」二字を削り、「山居」部との符合を強調する。聯中の「空林独与白雲期」の「期」字について、宋蜀本は「帰」字に作る。この詩の全文は以下のとおり。

無才不敢累明時

無才敢へて明時を累はさず

思向東溪守故籬

東溪に向ひて故籬を守らんと思ふ

不(一作豈)厭尚平婚嫁早

尚平の婚嫁の早きを厭はず

却嫌陶令去官遲

却つて陶令の官を去るの遅きを嫌ふ

草間蛩響臨秋急

草間の蛩響 秋に臨みて急に

山裏蟬聲薄暮悲

山裏の蟬声 暮れに薄りて悲し

寂寞柴門人不到

寂寞たる柴門 人到らず

空林獨與白雲期

空林 独り白雲と期す⁽¹⁵⁾

押韻は「時」、「籬」、「遲」、「悲」、「期」で、それぞれ上平七「之」部、上平五「支」部、上平六「脂」部、上平六「脂」部、上平七「之」部に属する。「支」「脂」「之」はいずれも同用である。一方、宋蜀本のみ「歸」字に作っており、しかもこの字は上平八「微」部で独用で押韻しないため、宋蜀本の本文は誤りである可能性が高いだろう。⁽¹⁶⁾

⑩ 第一〇〇四聯。この聯の詩題は「九城成イ宮避暑」に作るが、『文苑英華』は「勅借岐王九成宮避暑之作応教」に、宋元刊本は「勅借岐王九成宮避暑応教」に作る。『千載佳句』に「九城成イ宮」とあるのは、『文苑英華』などが「九成宮」に作るのと異なる。また詩句の「卷幔」について、『文苑英華』は「捲幔」に、松平本と静嘉堂文庫宋刊本は「卷幔」に作り、その他は「卷幔」に作る。「幔」は「幔」の誤筆であろう。この詩の作られた時期は、開元八年に王維が及第する以前であると考証されている。⁽¹⁷⁾

以上の校勘から、『千載佳句』所収王維詩句の特徴は次のようにまとめられる。

まず、詩題と詩句に異同が多く、詩題は部類の主題に合わせてしばしば変更される。⑦六九〇聯と⑩一〇〇四聯の詩題がその例として挙げられる。これらは、王維の別集から詩歌の創作状況を説明する「応制」「応教」などの語を削除している。上述の校勘によれば、他の刊本に比べ『千載佳句』は『文苑英華』の記述により近い。なお『文苑英華』は抄巻の古本に最も近いので、『千載佳句』がよった底本も当時流行していた抄巻の本文と考えられる。また詩題と詩句にしばしば出現する「□イ」という旁注、例えば⑤五五三聯の「史天イ人」や⑥六四九聯の「牡丹花綻イ」や⑩一〇〇四聯の「九城成イ宮避暑」等は、大江維時が書き加えたか、或いは鎌倉時代の文人が伝抄する際に補充されたと考えられるが、いずれにせよ遅くとも鎌倉時代後期には、日本における王維の詩は、中国で通行

していた王維集中の本文とはすでに異なっていたのである。

次に、『千載佳句』中の王維の詩句には、『文苑英華』や王維集の刊本系統との異同が見られる。例えば⑤五五三聯中の「史人」は、唐より伝えられた異同として珍重され、『千載佳句』に採録されたが、必ずしも王維集の刊本より優れているとは言えない。しかしながらこの異同は、奈良平安時代に伝来した王維の作品が、一種類の写本ではなかったことをはっきりと表している。

以上、『千載佳句』の本文と宋元刊本の王維集の本文を校勘した結果、かなり顕著な異同が発見された。史料の限界から、『千載佳句』が拠った王維の底本と冷泉院所蔵廿卷本の王維集に直接的な関係があるかは確定できない。だがこの事実は、中国において通行する十卷本王維集とは異なる鈔本系統の王維集が、奈良平安時代の日本に確実に存在していたことを証明している。『見在書目録』の「王維集廿卷」という記載は、単なる誤りではなく、やはり根拠があると思われる。

四 「廿卷」王維集と唐代の小集

以上、二十卷本の鈔本王維集の存在が明らかになったが、ではなぜ中国ではこれに関する記載がないのか。それは鈔本時代における詩人の別集の流伝と関係があると思われる。二十卷本『王維集』は、王縉が編纂した十卷本の王維正集ではなく、王維の生前に既に成立し民間に流布していた小集であると考えられる。

「小集」は、その定義について、明確な記載がないが、史料によれば、南朝において既に出現していること⁽¹⁸⁾がわかる。また盛唐にもこのような例は少なくない。例えば杜甫の作品集には「杜甫集六十卷」以外に「小集六卷」、

元稹の作品集には「元氏長慶集一百卷」以外に「小集十卷」がある。⁽¹⁹⁾

王維の「小集」について、はつきりとした記載はないものの、以下のように説明される。

開元中期から既に名声が広く知れ渡っており、中唐の独孤及（七二五～七七七）撰「唐故左補闕安定皇甫公集序」には「沈宋既歿、而崔司勳顥、王右丞維復崛起于開元、天寶之間（沈宋 既に歿し、而して崔司勳顥、王右丞維復た開元天寶の間において崛起す）」とある。⁽²⁰⁾ また王維は生前にも『輞川集』のような唱和詩の小集を編纂した経歴がある。

次に、王維の多くの作品が、天寶年間には既に同時代人の詩歌選集に選出されていたこと。典型的なのは『国秀集』と『河嶽英靈集』である。『国秀集』には王維の詩歌が七首収録され、これは同書に選ばれた詩人の作品数では孟浩然と並んで首位を誇る。また『河嶽英靈集』は丹陽人の殷璠が天寶十二年（七五三）に編纂したもので、王維の詩を十五首採録する。この数は同書では王昌齡に次いで多い。しかし、両書の編者とも、王維との交遊については何も史料の記載はない。両者の間に特別な交流があった可能性が極めて低いにもかかわらず、これほど多くの王維の作品を採録していることは、開元天寶時期には王維の「小集」が民間において流行していたことを窺わせる。

さらに、開元天寶年間に入唐した日本人が、帰国時に大量の中国の典籍を持ち帰ったこと。例えば開元時期の遣唐使は「所得錫賚、盡市文籍、泛海而還（錫賚を得る所、うか 海に泛びて還る）」⁽²¹⁾ など、特に張鷟など著名な文人の作品を捜し求めた。⁽²²⁾ この記事から、入唐日本人が民間の書肆などで書籍を購入していたことがわかる。特に名声のあった王維の小集などは、「文籍」を大量に購入していた日本人の注目を引いたことであろう。

では、王維の「小集」と「正集」にはどのような違いがあるのか。王維の「正集」は、王維の弟王縉が安史の乱収束後、勅命を受けて亡き兄の作品を蒐輯し編纂した別集である。以下に関連史料を挙げる。

①『文苑英華』卷六一「王縉「進王維集表」

臣縉言、中使王承華奉宣進旨、應是王維文賦並仰錄寫進上者。……臣兄文詞立身、行之餘力……至於晚年、彌加進道。端坐虛室、念茲無生。秉興爲文、未嘗廢筆。或散朋友之上、或留篋笥之中。臣近搜求、尚慮零落。詩筆共成十卷、今且隨表進上。

臣縉言ふ、「中使王承華奉宣進旨し、応に是れ王維の文賦並びに仰録写して進上すべき者なり。……臣の兄文詞もて立身し、之を行ふに余力あり……：：：晩年に至り、弥よ加はりて道に進む。虚室に端坐し、茲に無生を念ずる。興を乗りて文を爲り、未だ嘗て筆を廢てず。或は朋友の上に散じ、或は篋笥の中に留む。臣近ごろ搜求し、尚ほ零落なるを慮る。詩筆 共に十卷を成し、今且に表に随ひ進上せんとす」と。

②『旧唐書』卷一九〇「王維伝」

代宗時、縉爲宰相。代宗好文、常謂縉曰、「卿之伯氏、天寶中詩名冠代、朕嘗於諸王座聞其樂章。今有多少文集、卿可進來。」縉曰、「臣兄開元中詩百千餘篇、天寶事後、十不存一。比於中外親故間相與編綴、都得四百餘篇。」翌日上之、帝優詔褒賞。縉自有傳。

代宗の時、縉宰相と爲る。代宗 文を好み、常に縉に謂ひて曰く、「卿の伯氏、天寶中の詩名 代に冠たり、朕嘗て諸王の座に於いて其の樂章を聞く。今 多少の文集有らば、卿進め來たるべし。」と。縉曰く、「臣の兄 開元中の詩百千餘篇あるも、天寶の事後、十に一を存せず。此 中外の親故の間に於いて相与に編綴し、^{すべ} 都て四百餘篇を得。」と。翌日 之を ^{たてまつ} 上り、帝優詔し褒賞す。縉自ら伝有り。

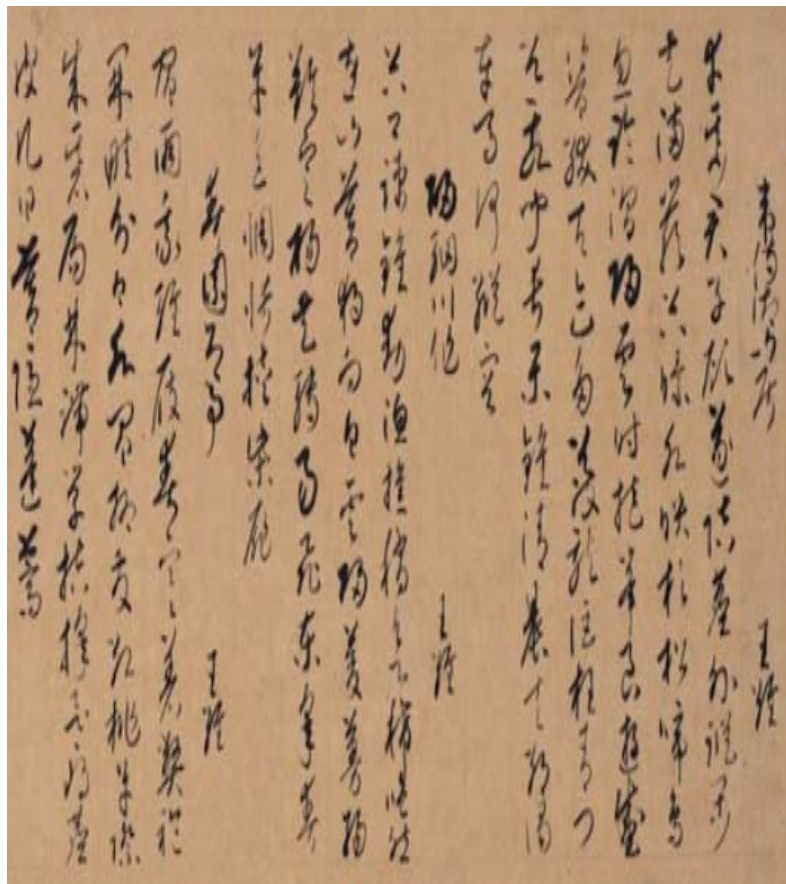
資料①の「進王維集表」を献上したのが宝応二年（七六三）正月七日で、資料②では、安史の乱発生後、王維の作品は既に「十不存一」の状態であったとある。王縉は親戚や知人の協力を得て、王維の残存する詩歌四百余篇を集め、十卷本の王維集を編纂した。つまり安史の乱以前に流行した王維の「小集」は、作品が散佚する前の詩集であり、当然王縉が編纂した「正集」よりも多くの作品が収録されていたと考えられるのである。『見在書目録』に記載される王維集の巻数は、王維正集の二倍の量であったが、これはまさに筆者の推断と合致する。

また、日本の古文献に収録される王維作品の製作時期から判断するに、『千載佳句』の王維の詩句は、全て安史の乱以前のものと思われる。これは偶然であろうか。或いは大江維時の採録基準と関係があるのだろうか。安史の乱後の王維作品を見ると、『千載佳句』の部類や内容と同様の詩歌もある。安史の乱の前後で一致した内容を持つ詩歌があるにも関わらず、『千載佳句』が安史の乱以前に作られた王維詩のみを採録するのは、大江維時の故意による現象ではないと判断される。では、他の奈良平安文献に収録される王維作品の創作時期も、やはり『千載佳句』と同じく安史の乱以前のもののだろうか。

空海『文鏡秘府論』に引用される王維の「哭殷遙」について考察してみよう。この詩は「送四葬」と題して『国秀集』に収録された。⁽²³⁾『国秀集』は天宝三年（七四四）の成立であるから、この「送殷遙」詩はそれより以前に詠まれたと考えられる。また『新撰類林鈔』第四残巻に収録される王維の詩三首は、「韋侍御山居」「帰輞川作」⁽²⁴⁾「春園即事」であり（図版一）、それぞれ開元二十五年と王維が輞川に隠棲した天宝年間に製作されたものと思われる。

さらに、平安文人の大江匡衡撰『江吏部集』巻下に「重陽侍宴同賦花菊映宮殿詩序」を収め、「三農有年、誇学稼之共熟。四海無事、嘉弁岸之不枯」の表現がある。「三農有年」、「四海無事」は王維の「奉和聖製重陽節宰臣及

群官上寿応制」の首聯「四海方無事、三秋大有年（四海 方に事 無く、三秋 大いに年 有り）」との関連が認められる。⁽²⁵⁾
 「四海方無事」の語句や、末尾に漢武帝「柏梁篇」を引用し、宮中で君臣が詩を賦す様子を喩えていることから、
 この王維の詩も安史の乱以前に作られたものであることが明白である。⁽²⁶⁾



図版一：『新撰類林鈔』巻第四残巻、平安前期（九世紀）、京都国立博物館、B 甲 616。縦 27.0 cm、横 558.0 cm。ウエブサイト「e 国宝」（国立博物館所蔵）を参照。

以上、各文献に収録する王維詩の製作時期は、安史の乱以前に王維の小集が既に流行していたという現象の確固たる証拠となるだろう。

最後に、王維集が最初に日本にもたらされた経緯は、資料が極めて少ないためすべてを明らかとするのは難しい。しかし、とりわけこの王維集を舶来した可能性のある人物として、開元五年（七一七）に入唐した日本人留学生である阿倍仲麻呂が推定される。阿倍仲麻呂は「多所該識（多く該識する所）⁽²⁷⁾」、「留京師五十年、好書籍、放歸郷、逗留不去（京師に留まること五十年、書籍を好み、放ちて歸郷せしむるも、逗留して去らず）⁽²⁸⁾」と記され、また当時の王維、李白、儲光羲などと親しい交流があり（例えば、李白は「哭朝卿衡」、儲光羲は「洛中貽朝校書衡、朝即日本人也」とある）、さらに帰国の際、王維から「送秘書晁監還日本国」及び詩の序文一篇を贈られている。これは唐人による現存する最初の日本文化に関する長篇の作品であり、日中文化交流史においても大変重要な価値がある。その序文には、阿倍仲麻呂の唐での生活が詳しく描かれている。

金簡玉字、傳道經於絕域之人。方鼎彝樽、致分器於異姓之國。

金簡の玉字、道経を絶域の人に伝^{つた}へん。方鼎彝樽は、分器を異姓の国に致^{いた}さん⁽²⁹⁾。

ここでは、阿倍仲麻呂が帰国のために準備した物品の中に珍しい書籍があったことを述べている。当時、留学生や留学僧は、政府の許可のもとで人を雇って書物を書写し、或いは師友からの贈り物として書籍を手に入れた⁽³⁰⁾。阿倍仲麻呂が安史の乱の前に王維作品の一部を所持していた可能性は極めて高い。しかし、最終的に王維集を日本に伝えた人物は阿倍仲麻呂ではない。彼は天宝十二載（七五三）、第十次遣唐使団と共に帰国しようとしたが、不

運にも途上で暴風雨に遭い、遂に故国の土を踏むことは叶わなかつた⁽³¹⁾からだ。天宝十四年（七五五）六月、彼は苦難の末再び長安に戻った。それから程なくして安史の乱が発生し、玄宗に従い蜀地に難を避けた。いずれにせよ、王維と阿倍仲麻呂の親密な交際や、日本入唐者がこぞって多くの書籍を買い求めたこと、また王維の詩文が当時大変流行していたこと等を考え合わせれば、王維小集が日本に伝えられたのは、阿倍仲麻呂が帰国しようとした頃か、少なくとも安史の乱以前である可能性が高いと言えよう。

以上を要するに、(一)『日本国見在書目録』の「王維集廿卷」という記録は信ずべきものである。『千載佳句』をはじめ日本古文獻に収録する王維の詩句が、この結論に傍証を与える。(二)二十卷本の王維集は、中国で通行する十卷本の王維集とは別系統のテキストで、開元天宝年間に既に民間で流行していた王維小集ではないか。(三)王維小集が最初に日本に伝えられた経緯を徹底的に考証するのは難しいが、その東渡した時期は、安史の乱発生以前であったということが確定できる。

注

- (1) 『文苑英華』卷六一一王縉「進王維集表」(中華書局、一九六六年、三一六六頁)。
- (2) 『旧唐書』経籍志の底本は、玄宗朝の母嬰の『古今書録』である。『古今書録』は、「開元四部之外」の書籍に対して、「不欲雜其本部」(『旧唐書』卷四六「経籍志」、一九六三、一九六六頁)し、また母嬰が開元九年に略編した『群書四部録』を参照し完成した(『唐会要』卷三六「修撰」、中華書局、一九五五年、六五八頁)。
- (3) 張固也「論「新唐書・芸文志」的史料来源」(『吉林大学社会科学学報』第二期、一九九八年)参照。

- (4) 盧盛江『文鏡秘府論彙校彙考』地卷十七勢（中華書局、二〇〇六年、三九三頁）。
- (5) 小川環樹「新撰類林抄校読記」（『中国文学報』第一冊、一九五九年）参照。
- (6) 『倭漢朗詠集』所収の一聯は「桃源行」からで、詩題は無く、春部三月三日に属す（藤原公任撰『倭漢朗詠集』御物粘葉本、伝藤原行成筆、雄山閣出版株式会社、一九六八年）。『新撰朗詠集』に収録される三聯は、それぞれ秋部虫の「早秋山中作」、雑部山家の「山中作」、雑部餞別の「送元二使」である（藤原基俊撰『新撰朗詠集』、二玄社、一九八四年、上冊第九四頁、下冊第六〇頁、下冊第八一頁）。
- (7) 陳鉄民『王維集校注』（中華書局、一九九七年、四一四頁）参照。
- (8) 芮挺章『国秀集』卷中（毛晋編『唐人選唐詩』、台湾大通書局、一九七三年、下冊、一四三三頁）参照。
- (9) 前掲注（7）、六七頁参照。
- (10) 前掲注（7）、四六八頁参照。
- (11) 前掲注（7）、三五八頁参照。
- (12) 『日本国見在書目録』総集家には『河嶽英靈集』一卷とあるが、『河嶽英靈集』が採録する王維の詩句は、『千載佳句』と一聯も重複しない。また『千載佳句』の九八聯の詩題「寒食池水作」は、『国秀集』に「途中口號」とあるのと大きく異なる。ここから、『千載佳句』所収の王維詩句は王維集を底本とする可能性が高い。
- (13) 前掲注（7）、二六八頁参照。
- (14) 前掲注（7）、四〇八頁参照。
- (15) 米山寅太郎等解題、静嘉堂文庫本『王右丞文集』卷四、『古典研究会叢書・漢籍之部三二』（汲古書院、二〇〇五年、一〇八〜一〇九頁）。

- (16) 陳彭年等『校正宋本広韻附索引』（芸文印書館、一九六七年）参照。
- (17) 前掲注（7）、二五頁参照。
- (18) 例えば、『隋書』卷三五「経籍志」には「梁元帝小集十卷」（中華書局、一九七三年、一〇七六頁）とあり、『旧唐書』卷四七「経籍志」には「宋建平王小集十五卷」（中華書局、一九七五年、二〇五三頁）とある。
- (19) 『新唐書』卷六〇「芸文志」（中華書局、一九七五年、一六〇三、一六〇六頁）。
- (20) 『全唐文』卷三八八（中華書局、一九八三年、三九四〇頁）参照。
- (21) 『旧唐書』卷一九九「日本国伝」（五三四一頁）参照。
- (22) 『旧唐書』卷一四九「張荐伝」に「新羅、日本東夷諸蕃、尤重其（張鷟）文、每遣使入朝、必重出金貝以購其文」（四〇二四頁）とある。
- (23) 『国秀集』卷中（『唐人選唐詩』、一四三四頁）参照。
- (24) 「韋侍御山居」が製作されたのは開元二十五年であり（前掲注〔7〕、第一二五頁）、「帰輞川作」と「春園即事」が作られたのは王維が輞川で隠居していた天宝年間である（前掲注〔7〕、四五〇頁）。
- (25) 小野泰央『平安朝天曆期の文壇』（風間書房、二〇〇八年、八六頁）参照。
- (26) 前掲注（7）（第三七三頁）にも見られる。
- (27) 『新唐書』卷二二〇「日本伝」（六二〇九頁）参照。
- (28) 『旧唐書』卷一九九「日本国伝」（五三四一頁）参照。
- (29) 前掲注（7）、三一七頁参照。
- (30) 陳獅「王朝公権的威嚴象徴…略談日本漢籍的一個重要特徵」（『中文学術前沿』第一輯、浙江大学出版社、二

〇一〇年）参照。

(31) 『日本紀略』桓武天皇の延暦二十二年（八〇三）三月丁巳には「（藤原）河清……天平勝宝四年（七五二）、以参議民部卿、為聘唐大使。天宝十二載、与留学生朝衡同舟帰朝。海路遭風、漂泊安南」とある。黒板勝美、国史大系編修会編『増補新訂国史大系』第十卷（吉川弘文館、一九六五年、二七八頁）参照。

第二章 唐岐王李範の中国逸詩考

一 問題提起

『日本国見在書目録』には、「恵文太子集十（巻）」という記録がある。恵文太子（六八六～七二六）とは唐睿宗李旦の第四子、李範のことである。武后期の混乱が収束し、睿宗が重祚した景雲元年（七一〇）に岐王に封ぜられ、玄宗の開元十四年（七二六）四月に病により薨じ、「恵文」の諡号を追贈された。李範は「学を好み、書に巧たくみにして、雅つねに文章の士を愛（1）す」と評された人物で、閻朝隱や王維、崔顥といった有能な文士たちを礼を以て遇した。その様子は漢代、博学善文で知られた梁孝王劉武と淮南王劉安の文学サロンに喩（2）えられ、「梁園の筆壯、樂府の文雄」とも称（3）されている。

だが、『恵文太子集』は中国では早くに散逸し、両唐書の目録志はもとより、歴代の公私蔵書目録及びその他の古文獻等にも一切の記録が残っていない。現在中国に残存する李範の作品は、近年出土した墓誌銘の一篇のみである。（4）これに対し日本では、『千載佳句』に李範の七言詩句五聯が収録されるのをはじめ、『新撰朗詠集』や『続撰和漢朗詠集』等の漢詩選集にも作品が収録（5）されている。このことは、単に唐代文学史研究の領域にとどまらず、当時の東アジア漢字文化圏における文化交流の実態を解明する上でも、決して看過することのできない事実である。本章では、李範の音楽活動や交遊関係、及び彼が盛唐詩壇に与えた影響について考察し、また『千載佳句』に残る李範の詩句を手懸かりに、なぜ中国では『恵文太子集』が残存しなかったのか、なぜ奈良時代の日本に『恵文太子集』が渡来したのかについて検討していきたい。

二 『千載佳句』所収の李範逸詩句について

『千載佳句』に収録される李範の詩句は、以下の通りである。

① 第一〇一聯 「同李士懷長安」(四時部、暮春)

渭水橋邊春已渡 渭水の橋の辺に春已に渡り、
灞陵原上雨初晴 灞陵の原の上に雨初めて晴る。

② 第二三三聯 「宴大歌宅」(四時部、冬夜)

清冷池裏氷初合 清冷たる池の裏に氷初めて合し、
紅粉樓中月未圓 紅粉の楼の中に月未だ円まどかならず。

③ 第二四六聯 「三月三日」(時節部、三月三日)

可惜韶年三日暮 惜しむべし韶年三日の暮れ、
風光由繞碧鸞觴 風光由なほ碧鸞の觴を繞る。

④ 第二八八聯 「洛河山亭初晴」(天象部、晴霽)

晚日半銜西苑樹
晴雲直卷上天風

晚日半ば西苑の樹を銜み、
晴雲直ちに上天の風を巻く。

⑤第九一七聯「送植功還京」（別離部、送別）

離筵風日三晡晚
歸路雲霞一道開
離筵の風日三晡に晩れ、
歸路の雲霞一道開けり。

この李範の五聯の詩句について、江戸時代の市河寛齋は『全唐詩逸』に補録し、また金子彦二郎氏は『平安時代文学と白氏文集』の中で、帝国図書館（現国立国会図書館）の写本を底本として、『新撰朗詠集』との校勘を行い、文字の異同を整理した。だがこれらの先行研究では、詩句の内容や特徴、李範の事蹟については未だ十分な考察がなされていない。そこでまず、この五聯の詩句に対し詳細に分析していきたい。

①第一〇一聯「李士ともとおもに長安を懐ふ」の「李士」については、「李十一」の誤筆とする説がある。⁽⁶⁾李範の活動時期に比較的近い杜甫の詩に「長沙送李十一」という作品があり、ここでの「李十一」は李銜を指す。だがこれは大暦五年（七七〇）前後の作品であるため、⁽⁷⁾李範の詩にある「李士」とは別人であると思われる。

②第二三三聯「大歌の宅に宴す」の「大歌」は、「大哥」の誤写である。玄宗の御製詩に「過大哥宅探得歌字韻」、「同玉真公主過山池二首」という作品があり、また張説がこれに唱和して「奉和過寧王宅応制」「奉和同玉真公主遊大哥山池題石壁（応制）二首」を製作しており、ここでの「大哥」は睿宗の長男李憲を指す。李範詩に詠まれる「大哥宅」も、李憲の邸宅を指すと考えられる。開元年間、李憲と李範は共に政治から距離を置き、遊覧や宴会に

耽る生活を送っていたとされ、さらに二人の邸宅は、長安と洛陽のどちらにおいても近い場所にあった。⁽⁸⁾ ゆえに李範が李憲の邸宅での宴会に参加していたことは間違いないであろう。

③ 第二四六聯「三月三日」。『千載佳句』は部立てにより詩題を省略することがあり、この詩題も「三月三日」の四字であったとは限らないであろう。製作年代は不明だが、「碧鸞の觴」は三月三日の曲水の宴での様子を詠んだものである。

④ 第二八八聯「洛河山亭の初晴」の「洛河」は洛水を指す。また詩句の「西苑」は神都苑とも呼ばれ、洛陽の御苑を指し、「東抵宮城、西至孝水、北背邙阜、南拒非山、其間有穀水雒水相互交匯（東のかた宮城に抵り、西のかた孝水に至り、北のかた邙阜を背にし、南のかた非山を拒ぎ、其の間穀水雒水（洛水）相互に交匯する有り）」とある。李範の洛陽の邸宅は天津橋南の尚善坊にあり、北は洛水に接し、皇城とは洛水で隔てられていた。よつてこの詩が創作されたのは、洛陽の李範の邸宅にほど近い西苑の山亭であろう。

⑤ 第九一七聯「植功の京に還るを送る」について、金子彦二郎氏は「送植切還京」の誤りであると指摘する。これは写本の「功」と「切」の字形が似ているためである。⁽¹²⁾ 詩題と内容から、李範が地方に赴任していた時期、夕方申の刻に製作されたことが分かる。

以上、五聯の詩句を分析した結果、それぞれ長安への思い、兄弟仲間との宴会、上巳節、洛陽の皇城等を詠んでいることが明らかとなった。

さて、『恵文太子集』は書名に李範の諡を冠するため、李範の歿後に編纂されたと考えられるが、親王の別集が臣下の独断で編集されたとは考え難く、当然そこには朝廷の関与があったはずである。つまりこれは、兄である玄宗の勅命を受けて編纂されたものであり、収録作品の選択も玄宗の意向を少なからず反映している可能性が高い。

ところで、「樂府の文雄」という李範の評価は、唐人の竇息撰の「述書賦」に見られる。

惠文靡倦、博好敦勸。恨夫有始無終、灰燼成空。苟懼存而投閣、徒榮歿而昇宮。尚可謂梁園筆壯、樂府文雄。累聖重光之盛業、六書一藝之精工。非所以抑至人之徇已、服勇士以雕蟲。責繁聲於韶濩、徵豔色於蒼穹者也。惠文は倦む靡^なく、博く好み敦く勸む。恨むらくは夫れ始め有りて終り無く、灰燼空と成れるを。苟も存するを懼れ閣より投じ、徒^{いたづ}らに榮歿して宮に昇れり。尚ほ梁園の筆壯、樂府の文雄と謂ふべし。累聖重光の盛業にし、六書一芸の精工なり。至人の已に徇ふを抑へ、勇士を服するに雕蟲を以てする所以に非ず。繁聲を韶濩に責め、豔色を蒼穹に徵する者なり。

この「尚可謂梁園筆壯、樂府文雄」句には、さらに竇蒙の注が付されており、

言樂府文雄者、王多能好事、有文詞、特爲歌者所唱。

樂府の文雄と言ふは、王の多能にして事を好み、文詞有らば、特に歌者の唱ふ所と爲るを⁽¹³⁾いう。

とあり、ここから李範作品の特徴が音楽に合わせて歌われるという点にあったことが分かる。また「樂府」という語が用いられることから、その多くは宮廷音楽だったのではないだろうか。「述書賦」の作者と成立年代についてはなお議論の余地が残るものの、書中の内容の真偽については疑うまでもない。⁽¹⁴⁾よって「樂府の文雄」との称賛にも、一定の根拠が認められよう。

以下、李範の音楽活動や交遊関係について、当時の時代背景を考慮しつつ、さらに考察を深めていきたい。

三 「恵文太子」と開元時代の音楽文化

開元前期、玄宗の兄弟達に対する処遇は極めて複雑であった。玄宗は太平公主らの政治集団との対立から、皇族に支持と援助を求め、即位後は新政権の地盤を強固なものとするべく、また都城周辺の防衛政策として、諸王を京畿付近の主要な州県に派遣して治安の維持にあたらせた。だがその一方で玄宗は、兄弟である親王の政治活動や交遊に対して次第に厳しい制限を加えていった。李範に関連する例を挙げると、例えば開元元年、姚崇の勢力拡大を恐れた張説が李範と密会し、これを察知した姚崇側の密告により、張説は相州に左遷され、また開元八年には、駙馬都尉の裴虚己、万年尉の劉庭琦、太祝の張諤らが李範と密かに交遊した廉で地方に配流された。さらに開元十年玄宗は「宗室、外戚、駙馬、非至親母得往還（宗室、外戚、駙馬、至親に非ざれば往還するを得る母かれ）」との敕命を下しており、李範ら親王には官職の高低、功劳の大小を問わず、朝廷の臣下たちとの交遊が禁じられた。⁽¹⁸⁾

このような玄宗の方針により、宮廷音楽における李範の立場も変化を余儀なくされた。これには宮廷音楽機構における玄宗との主導権問題が絡んでいるのだが、特に開元二年は、玄宗が宮廷音楽の全面的な改革を敢行した年で、梨園や左右教坊といった専門性の高い宮廷燕楽機構が設立され、雅楽と俗楽が分けられ、太常寺に属していた百戲や散楽は、新設された教坊に移管された。⁽¹⁹⁾そして玄宗の腹心の部下である姜皎と宦官の范安及がそれぞれ太常卿と教坊使に任じられると、それまで太常卿として宮廷音楽に多大な影響力を持っていた李範はその指導的立場を⁽²⁰⁾

追われ、華州刺史に任じられたのである。⁽²²⁾

だが、宮廷雅楽機構において実権を失った李範に対し、玄宗は一般の宮廷楽人との交際には特に制限を加えなかった。李範と親交のあった楽師に、開元中に歌芸においてその名を知られた太常寺の李龜年が挙げられる。⁽²³⁾ある時李龜年が、李範の家伎の演奏を品評した後、家伎の琵琶を強引に奪ったという逸話からは、李範の岐王府の自由で開放的な雰囲気垣間見ることが出来る。また史料によれば、李範の王府は長安の安興坊東南区と洛陽の天津橋南の尚善坊にあったとされる。長安の右教坊は光宅坊、左教坊は長樂坊（延政坊）に、洛陽の左右教坊は明義坊にあつて、⁽²⁵⁾いずれも李範の岐王府に近かつた。この点も李範と教坊の楽人との交際を一層促す要因となつたであろう。

さて、宮廷音楽に造詣が深かつた李範は、『資治通鑑』に「琵琶を善くす」と記される。⁽²⁶⁾ また唐の鄭万鈞「代国長公主碑」には、

初、則天太后御明堂、宴。聖上年六歳、爲楚王、舞「長命□」。□□年十二、爲皇孫、作「安公子」。岐王年五歳、爲衛王、弄「蘭陵王」、兼爲「行主詞」曰、「衛王入場咒願神聖神皇万歳、孫子成行」。

初め、則天太后明堂に御し、宴す。聖上年六歳、楚王と爲り、「長命□」を舞ふ。□□年十二、皇孫と爲り、「安公子」を作す。岐王年五歳、衛王と爲り、「蘭陵王」を弄し、兼ねて「行主詞」を爲りて曰く、「衛王入場して神聖神皇の万歳、孫子の成行を咒願す」⁽²⁷⁾と。

と記される。「長命□」の缺字部分は「女」であろう。「長命女」、「安公子」、「蘭陵王」等の曲調は、唐の崔令欽撰「教坊記」にも見られ、当時流行した宮廷楽曲であった。李範は五歳で「蘭陵王」を演じる等、玄宗と同様に幼少より宮廷音楽に触れていたことが分かる。

しかも、李範が盛んに宴を催した背景には、いわれなき疑いがかかるのを避けるため、玄宗の「天子兄弟當極樂（天子の兄弟は当に楽しみを極むべし）」という懐柔政策に従い、終日音楽や飲酒、鬪鷄等の遊びに興じ、努めて享樂的な生活を送らざるを得なかったという事情も指摘しておきたい。⁽²⁸⁾

以上の要因では、李範の音楽活動は、玄宗の即位により以前にもまして活発化していった。王維の「從岐王過楊氏別業応教」詩には「嚴城時未啓、前路擁笙歌（嚴城 時 未だ啓かず、前路 笙歌を擁す）」⁽²⁹⁾とあり、親王の外出とそれを先導する鼓吹楽隊が描かれている。これも、李範が頻繁に音楽を演奏していたことの証左となるだろう。ところで、李範が太常卿を務めていた頃、中宗朝において既に絶滅に瀕していた百済楽の再興を、彼が上奏していることは注目に値しよう。⁽³⁰⁾これは李範が外国人と音楽を通じて交流していたこととも関係があるかもしれない。

四 李範と盛唐の文壇

玄宗や張説らが一代の文風を成していた頃、李唐宗室である李範はどのような文学活動を行っていたのだろうか。『旧唐書』の「睿宗諸子」には、

範好學工書、雅愛文章之士、士無貴賤、皆盡禮接待、與閭朝隱、劉庭琦、張諤、鄭絳篇題唱和、又多聚書畫古

跡、爲時所称。時上禁約王公、不令與外人交結。駙馬都尉裴虛己坐與範遊讌、兼私挾讖緯之書、配徙嶺外。萬年尉劉庭琦、太祝張諤皆坐與範飲酒賦詩。黜庭琦爲雅州司戶、諤爲山莊丞。

範学を好み書に工たくみにして、雅つねに文章の士を愛し、士に貴賤無く、皆礼を尽して接待し、閻朝隱、劉庭琦、張諤、鄭繇と篇題唱和し、又多く書画古跡を聚め、時の称する所と爲る。時に上王公を禁約し、外人と交結せしめず。駙馬都尉の裴虛己範と遊讌し、兼ねて讖緯の書を私挾するに坐し、嶺外に配徙せらる。万年尉の劉庭琦、太祝の張諤皆範と酒を飲み詩を賦すに坐す。庭琦しりぞ黜しりぞけられて雅州司戶と爲り、諤山莊丞と爲る。

とある。ここから、李範が専ら書画骨董の蒐集を行い、文人たちと頻繁に交遊していたことが分かる。このうちに、張諤の作品はこのような中で日本に伝播したのである。『日本国見在書目録』には「張諤集一卷」と記され、『千載佳句』に「月夜看美人踏歌」、「翫山月送百九」の二聯が収録される。いずれも『全唐詩』未収作品である。閻朝隱は先天中期（七一二〜七一三年）に亡くなったため、李範や閻朝隱、劉庭琦らとの唱和は遅くとも睿宗時代に遡るだろう。

(31)

また、李範を中心とするこの文学集団は、劉庭琦、張諤らが長安を離れるとともに解散したという説がある。以下、李範の開元年間前期における地方任官時代の文学活動についてさらに検討したい。

『旧唐書』『玄宗本紀』によれば、開元二年（七一四）七月に「太常卿、岐王範爲華州刺史（太常卿、岐王範華州刺史と爲る）」、開元三年（七一一）夏四月に「兼虢州刺史（虢州刺史を兼ね）」、開元六年（七一一）春正月に、「以太子少師兼許州刺史、岐王範兼鄭州刺史（太子少師兼許州刺史、岐王範を以て鄭州刺史を兼ねしむ）」、また同年十二月に「以太子少師兼鄭州刺史、岐王範爲岐州刺史（太子少師兼鄭州刺史、岐王範を以て岐州刺史と爲す）」、

開元八年（七二〇）秋九月に「太子少師兼岐州刺史、岐王範兼太子太傅（太子少師兼岐州刺史、岐王範 太子太傅を兼ねしむ）」とあるが、このうち李範が虢州刺史だったのは、「岐王範太子少師等制」に「虢州刺史岐王範……可太子少師兼虢州刺史。……開元四年六月七日（虢州刺史 岐王範……太子少師兼虢州刺史とすべし。……開元四年六月七日）」⁽³²⁾とあることから、開元三年から四年（七一五〜七一六）の間である。李範は上記の官職のほか、『資治通鑑』から開元二年七月乙卯（三十日）に絳州刺史を兼任し、『新唐書』から并州大都督を務めていたことが分⁽³³⁾かり、また「岐王範華州刺史等制」に「太常卿兼左衛率并州大都督岐王範……可使持節華州諸軍事兼華州刺史……開元二年十月二十九日（太常卿兼左衛率并州大都督 岐王範……持節華州諸軍事兼華州刺史に使はすべし……開元二年十月二十九日）」⁽³⁵⁾とあることから、李範が并州大都督を務めたのは、華州刺史赴任以前のことと考えられる。李範は開元九年（七二二）十二月に正式に長安に呼び戻されている。⁽³⁶⁾

以上、李範の赴任地が并州、華州、絳州、虢州、許州、鄭州、岐州等であったことを確認した。『旧唐書』「地理志一」には、このうち華州が関内道の上郡で「在京師東一百八十里、去東都六百七十里（京師の東一百八十里に在り、東都を去ること六百七十里）」、虢州が開元初に河東道に属し「西至京師四百三十里、東至東都五百五十三里（西のかた京師に至ること四百三十里、東のかた東都に至ること五百五十三里）」、許州が河南道に属し「在京師東一千二百里、至東都四百里（京師の東一千二百里に在り、東都に至ること四百里）」、鄭州が河南道に属し「至東都二百七十里（東都に至ること二百七十里）」、岐州が元関内道の鳳翔府として「在京師西三百一十五里、去東都一千一百七十里（京師の西三百一十五里に在り、東都を去ること一千一百七十里）」と記され、また『旧唐書』「地理志二」には、并州及び絳州は河東道に属すとある。つまりこれらの地域はみな関内、河南、河東の三道にあつて、長安や洛陽にも比較的近い場所にある。また親王が刺史を務める際、政務は実質、地方の上級役人が

担うのが慣例で、⁽³⁷⁾「宋王以下毎季二人入朝、周而復始（宋王以下、毎季二人入朝し、周りて復た始む⁽³⁸⁾）」あるように、開元二年から九年（七一四〜七二二）の間、李範は地方刺史でありながらしばしば長安に戻っている。そのため彼らの遊宴は実際の赴任地だけでなく長安や洛陽でも引き続き行われていたはずであり、李範の文学活動は、上述の文学団体の解散と共に終了したわけではないのである。

さらにこの時期、李範は王維や崔顥といった政治に深く関与していない若者たちと交遊している。王維と崔顥の二人が、中唐以降、沈佺期や宋之間の後を継いで開元天寶の詩壇を代表する存在と目されるようになったのはその後年のことであり、⁽³⁹⁾李範が活躍した開元前期には、彼らの名声はさほど高くなく、まだ文学の修養に励んでいた時期であった。史料には、李範が彼らに及ぼした文化的影響について直接の記載はない。だが王維や崔顥が盛唐詩壇を代表する文人に成長する過程において、李範の存在は忽視することはできない。次に挙げる『唐会要』巻四「雜録」の記述はその証左となる。

惠文太子範、好學尚書、雅愛文章之士……雅稱風格秀整、時士庶冀有所成功。忽然殂謝、遠近失望焉。

惠文太子範、学を好み書を尚^{たつと}び、雅に文章の士を愛す……雅に風格秀整なるを称され、時の士庶成功する所有らんことを冀^{こひねが}ふ。忽然として殂謝するに、遠近失望す。

「士庶冀有所成功」とは、李範が若い士人を援助していたことに関係する。王維の例を挙げると、唐の薛用弱『集異記』をはじめとする筆記小説には、王維が李範の援助を受けて科挙試験を首席で合格したと記す。⁽⁴⁰⁾筆記小説という性質から研究者の間では長らく信憑性の低い資料とされてきた。だが開元九年に李範が長安に戻り、その同年

に王維が進士に及第していることは、果たして偶然の一致であろうか。決して根拠のない記事とは言えない。

李範のもとで催される宴は、文人たちが知り合い、互いに宣伝し合う社交場として大きな役割を果たしていた。以下に、李範と関連した王維の詩を挙げる。⁽⁴²⁾

① 敕借岐王九成宮避暑應教（敕して岐王に九成宮を借し避暑せしむ、応教）

帝子遠辭丹鳳闕 帝子遠く辞す丹鳳の闕

天書遙借翠微宮 天書遙かに借す翠微の宮

隔窗雲霧生衣上 窓を隔てて雲霧衣上に生じ

卷幔山泉入鏡中 幔を卷けば山泉鏡中に入る

林下水聲喧語笑 林下の水声語笑かまびす喧し

巖間樹色隱房櫳 巖間の樹色房櫳隠る

仙家未必能勝此 仙家未だ必ずしも能く此れに勝らざるに

何事吹笙向碧空 何事ぞ笙を吹きて碧空に向かふ

② 從岐王過楊氏別業應教（岐王に従ひて楊氏の別業に過る、^{よぎ}応教）

楊子談經所 楊子經を談ずる所

淮王載酒過 淮王酒を載せて過る

興闌啼鳥換 興闌にして啼鳥換かはり

坐久落花多
 逕轉迴銀燭
 林開散玉珂
 巖城時未啓
 前路擁笙歌

坐久しくして落花多し
 逕転じて銀燭を廻り
 林開きて玉珂を散ず
 巖城時未だ啓ひらかず
 前路笙歌を擁す

③從岐王夜讌衛家山池應教（岐王の衛家の山池の夜讌するに従ふ、應教）

座客香貂滿
 宮娃綺幔張
 澗花輕粉色
 山月少燈光
 積翠紗窗暗
 飛泉繡戶涼
 還將歌舞出
 歸路莫愁長

座客香貂滿ち
 宮娃綺幔張る
 澗花粉色を輕んじ
 山月灯光少なし
 積翠紗窓暗く
 飛泉繡戸涼し
 還た歌舞を將いて出づ
 歸路長きを愁ふ莫かれ

いずれも詩題に「應教」とあることから、これらの詩は王維が李範に扈從していた時期に製作されたことが分かる。また開元八年の作とする説もある。⁽⁴³⁾①の詩題にある「九成宮」は、鳳翔府麟遊県の西方一里にあり、当時は

岐州に属していたから⁽⁴⁴⁾、玄宗が九成宮を李範に敕借したのは李範の岐州在任時と考えられる。①頷聯の「隔窗雲霧生衣上、卷幔山泉入鏡中」句は『千載佳句』隱逸部山居類に、また②の首聯と頷聯の「楊子談經所、淮王載酒過。興闌啼鳥換、坐久落花多」句は『樂府詩集』「近代曲辭」に採録される⁽⁴⁵⁾。そして①詩は、敦煌文書にも保存されており⁽⁴⁶⁾（P・三六一九）、王維の李範への応教詩が広く知られていたことが窺われる。だが王維の李範への接近は、後に彼の仕官にとって不利に働くこととなった。小林太市郎氏及び入谷仙介氏は、開元八年に王維が濟州の司倉參軍に左遷されたのは、両者の交遊が原因であると指摘している⁽⁴⁷⁾。また、崔顥に「岐王席觀妓」という作品がある⁽⁴⁸⁾。

二月春来半 二月春 来たること半ばにして

宮中日漸長 宮中日 漸く長し^{ようや}

柳垂金屋暖 柳 垂れて 金屋 暖かく

花發玉樓香 花 発きて^{ひら} 玉楼 香る

拂匣先臨鏡 匣を拂ひて先に鏡に臨み

調笙更炙簧 笙を調へて更に簧を炙す

還將歌舞態 還た歌舞の態を將て

只擬奉君王 只だ擬して君王に奉ぜん

この詩は李範の家妓を詠んだものであるが、一般的に宴会の際の家妓を描写することはあっても、閨房の彼女の

様子を、しかも誰の家妓であるかを明示して歌に詠むということはあまり見られない。特に最後の二句「還將歌舞態、只擬奉君王」では、この詩を岐王に捧げるとおどけた口調で述べており、岐王府の自由で和やかな雰囲気が見られる。⁽⁴⁹⁾ この作品は後に『樂府詩集』「雜曲歌辭」に収録され、「盧女曲」と呼ばれていることから、⁽⁵⁰⁾ 音楽にのせて歌い広められたであろうことが分かる。

更に、李範に関連する作品として杜甫の「江南逢李龜年」がある。⁽⁵¹⁾

岐王宅裏尋常見

岐王の宅裏 尋常に見

崔九堂前幾度聞

崔九の堂前 幾度か聞く

正是江南好風景

正に是れ江南の好風景

落花時節又逢君

落花の時節 又た君に逢ふ

ここから、杜甫もまた開元前期にしばしば李範の岐王府に出入りしていたことが推察される。ただし、杜甫が生まれたのは睿宗の先天元年（七一二）で、李範が逝去したのが開元十四年（七二六）であるから、当時杜甫はわずか十四歳ということになり、サロンに参加するには些か年齢が若すぎるようにも思われる。杜甫は十四〜十五歳で文壇に入ったと自ら述べているが、⁽⁵²⁾ 親王という高貴な身分にある李範の王府に、少年の杜甫が文才のみを頼りに頻繁に出入りする事は果たして可能であろうか。実際、この詩については多くの解釈があり、例えば詩中の「岐王」は李範ではなく、李範の養子である「嗣岐王」李珍を指すといった見方もある。⁽⁵³⁾ だが李珍が李範ほど文士を礼遇したという記録はなく、また「崔九」即ち崔滌は、李範と同じ開元十四年に死去していることから、その在世期間

や文壇での名声を考慮すれば、詩中で「崔九」と共に詠われる「岐王」は、やはり李範を指すだろう。ただし詩句の内容から杜甫と李範の交遊を断言できるわけでもない。⁽⁵⁴⁾ 或いは生涯の大部分を安史の乱に翻弄された杜甫にとって、「岐王宅」「崔九堂」とは、開元の時代と、みずからの少年時代とを回顧する一つの象徴的な場所であったと考えることもできよう。

以上、李範の開元前期における文化活動や交遊状況及び盛唐文壇に与えた影響について考察し、李範の「梁園の筆壯、楽府の文雄」たるゆえんを明らかにした。『惠文太子集』は、このように様々な要因が重なり合っていたからこそ、編纂されることとなったのである。

五 『惠文太子集』は何故日本に残されたのか

ところで、なぜ『惠文太子集』は両唐書の目録志を始めとする諸史料に記録されなかったのだろうか。『旧唐書』「経籍志」は、玄宗朝の母喪撰『古今書録』を参照したものであるが、これは元来、母喪が開元九年の『群書四部録』を略編したもので、⁽⁵⁵⁾ 開元時期の四部書物以外の書籍を収録しない。⁽⁵⁶⁾ そのため『惠文太子集』は、『旧唐書』に記録されなかったのである。開元十九年冬の記録によれば、当時集賢院の四庫には書八万九千巻が収められており、このうち集庫の書は一万七千九百六十巻であった。⁽⁵⁸⁾ これは『群書四部録』に記載される四部書籍の四万八千一百六十九巻⁽⁵⁹⁾ と比べると、大幅な増加である。恐らくこの増加した分の書籍の中に『惠文太子集』は含まれていたのではないだろうか。後に安祿山の乱によって長安と洛陽は「兩都覆没、乾元舊籍、亡散殆盡（兩都覆没し、乾元の旧籍、亡散して殆ど尽く）」⁽⁵⁹⁾ といった惨状に陥り、⁽⁵⁹⁾ 宮廷の書籍の大部分がこの時失われてしまった。もし『惠文

太子集』が皇宮書庫に収蔵されていたとすれば、この戦禍を免れることは不可能だったであろう。それゆえ『新唐書』『芸文志』の編纂時には、すでに散逸して久しく、輯録できなかつたものと考えられる。

ここで、『恵文太子集』の日本渡来の原因についても考察してみたい。李範の詩を日本に伝えた人物について明記した史料はないが、李範が長安の文壇で活躍していた頃、日本から学問僧玄昉と留学生吉備真備が長安に来ていた。二人は元正天皇の霊龜二年即ち開元五年（七一七）に入唐し、長安で約二十年を過ごした後、聖武天皇の天平七年即ち開元二十三年（七三五）三月に帰国した。後に玄昉は、唐から持ち帰った経論章疏五千余卷や仏像等を尚書省に献上し⁽⁶⁰⁾、吉備真備も多くの文籍や樂器を奈良の朝廷に献じた。『続日本紀』『聖武天皇』には、「(天平七年四月)辛亥、入唐留学生從八位下下道真備、獻『唐禮』一百卅卷、『大衍曆經』一卷、『大衍曆立成』十二卷、測影鐵尺一枚、銅律管一部、鐵如方響、寫律管聲十二條、樂書要錄十卷……(天平七年四月二十六日、入唐留学生從八位下下道真備は『唐禮』一百卅卷、『大衍曆經』一卷、『大衍曆立成』十二卷、測影鐵尺一枚、銅律管一部、鐵如方響、寫律管聲十二條、『樂書要錄』十卷……を献ず)」とあり、また『扶桑略記』『聖武天皇』にも「獻『唐禮』一百卅卷、『大衍曆經』一卷、『大衍曆立成』十二卷、測影鐵尺一枚、『樂書要錄』十卷、馬上飲水漆角弓一張、並種種書跡、要物等、不能具載(『唐禮』一百卅卷、『大衍曆經』一卷、『大衍曆立成』十二卷、測影鐵尺一枚、『樂書要錄』十卷、馬上飲水漆角弓一張を献じ、並びに種種の書跡、要物等、具さに載する能はず)」とある。「並種種書跡、要物等」とあるため、記載された書物以外にも多くの文物書籍が献上され、その中には唐人の別集も含まれていたであろうと推察される。また玄昉と吉備真備が長安に滞在していた前半の十年は、ちょうど李範が長安の文壇で活躍していた時期と重なる。既に述べたように、李範の詩は樂曲に付して歌われたため、文字のみの作品と違いはるかに容易に広まったのである。長安において「所得錫賚、盡市文籍(得る所の錫賚、⁽⁶¹⁾ 尽く文籍を市ふ)」と言

われた遣唐使らが、李範の詩に興味を示し日本に持ち帰った可能性は十分に考えられる。ここから『恵文太子集』が日本に伝来した時期を推測すると、開元二十三年（七三五）から第十次遣唐使団が帰国した天宝十二載（七五三）の間となる。

『恵文太子集』が日本にもたらされたとするならば、恐らく次のような事情によるものである。

まず、奈良時代の朝廷において漢籍が非常に重視されていたこと。当時、天皇は唐の文化や制度の普及に尽力しており、『続日本記』には、文武天皇について「博涉經史（博く經史に渉る）^{ひろ}」^{わた}とあり、また元正天皇の養老五年（七二一）正月二十七日の詔令に「文人武士、國家所重（文人武士は、國家の重んずる所）」として学芸別に優秀者を褒賞しており、その学芸には漢文の明経や文章等が記載されている。⁶³ また大江匡房撰『江談抄』の「吉備大臣昇進次第」には、「（吉備大臣）元從八位下、獻百五十卷雜書、色々弓箭具等色目、在『続日本記』第十二卷。八年正月辛丑敘從五位下。（吉備大臣）元從八位下、百五十卷の雜書、色々の弓箭具等の色目を獻ずること、『続日本記』第十二卷に在り。八年正月辛丑從五位下に敘せらる。」とある。⁶⁴ 從八位下であった吉備真備が、異例の早さで從五位下に昇進できたのは、彼が百五十卷もの書籍を献上した功績によるものでもあるだろう。

第二、奈良朝廷における「礼」の導入と、李範の立場の特殊性である。玄昉や吉備真備らが唐に渡ったのは、元正天皇が登祚した翌年である。元正天皇は儒教を重んじた君主で、『続日本記』「靈龜元年」には「神識沈深、言必典禮（神識 沈深にして、言必ず典禮あり）」と記される。吉備真備ら遣唐使も、入唐後間もなく玄宗に「請謁孔子廟堂礼拜（孔子廟堂に謁して礼拝せんことを請ひ）⁶⁵」、「請儒士授經（儒士に授經を請ふ）」⁶⁶などして鴻臚寺で四門助教の趙玄默から儒経を学んでいる。さらに吉備真備が帰国に際し「唐礼一百卅卷」を持ち帰ったことも、当時日本が本格的に儒教を導入しようとしていたことを反映している。そして李範は、自分に警戒心を抱く玄宗に対

して忠誠心を示すため、儒教の君臣兄弟の礼を守るなど、皇族の模範たる人物であった。李範のかかる態度は、唐の律令制度を学ぼうとしていた当時の日本にとって、恰好の手本となったのではないか。既に述べた通り、『恵文太子集』は玄宗の勅命によって編纂された可能性が高い。玄宗の意向により成立した彼の別集は、その文学的価値の高さのみならず、奈良の朝廷において君臣の礼を明確にする上でも大変貴重な資料となり得た可能性も否定はできないのではないだろうか。

まとめ

以上、『千載佳句』所収の李範の逸詩句及び李範の生涯を分析し、合わせて『恵文太子集』の日本伝来の経緯について考証してきた。李範は音楽に精通し、宮廷音楽とも深く関わった人物で、自身も多くの作品を製作した。彼の交遊関係は、閻朝隠や張諤、鄭絳といった著名な文人だけでなく、王維や崔顥ら新進気鋭の文士にも及び、且つ若い彼らは李範の支援を得たのである。こうして李範は、皇族という特別な身分に加えて、文人への多大な影響力から、死後その作品は『恵文太子集』として編纂され、さらには唐の文化や制度を積極的に取り入れようとしていた日本に伝えられることとなったのである。

日本の奈良時代から平安時代初期、即ち七一〇年の平城京遷都から八九四年の遣唐使廃止までの約二百年間は、唐の文物と文化が様々なルートで日本にもたらされた時代であった。そしてこの時期に伝来した文物は、奈良の正倉院や唐招提寺、和歌山の高野山や京都の比叡山などの仏寺に今なお大切に保存されている。当時の日本人が唐の文物や文化とどのように接し、いかにして日本の文化として受け容れていったのかについては、既に多くの研究者

によって多方面からの研究が積み重ねられてきたところであるが、漢文資料の収集とその解説といった領域については、未だ十分な研究がなされていないのが現状である。

本章は、『千載佳句』所収の李範の逸詩句について分析を行い、そこから『惠文太子集』の日本伝来について、『千載佳句』や『日本国見在書目録』をはじめとする日本の文献に書き残された唐の詩歌や書籍目録等の史料に着目して、唐代文学の新たな側面及び唐詩の伝来状況について考察した。

注

- (1) 『旧唐書』卷九五「睿宗諸子列伝」(中華書局、一九七五年、三〇一六頁)。また『唐会要』卷四「雜録」にも「好尚書」(中華書局、一九五五年、四九頁)とある。
- (2) (唐)張説「惠文太子挽歌詞」其二に「梁国深文雅、淮王愛道仙」(『張説集校注』卷九、中華書局、二〇一三年、四六九頁)とあり、また(唐)袁瓘「惠文太子挽歌」に「羽化淮王去、仙迎太子帰」(『全唐詩』卷一二〇、中華書局、一九六〇年、一二〇八頁)とある。
- (3) (唐)竇泉「述書賦」卷下、『全唐文』卷四四七(中華書局、一九八三年、四五七一頁)。
- (4) 李範「唐故洛陰郡王(李嗣莊)墓誌銘并序」(吳鋼主編『全唐文補遺』第三輯、三秦出版社、一九六六年、五七頁)。
- (5) 藤原基俊『新撰朗詠集』入春部・暮春に一聯、近世の『続撰和漢朗詠集』入春部・三月三日(附桃)類と雑部晴類に二聯収録される。ただしこれらは全て『千載佳句』所収の詩句と重複している。

- (6) 金子彦二郎 『平安時代文学と白氏文集』(増補版)(培風館、一九四三年、六五二頁) 参照。
- (7) (清) 仇兆鰲 『杜詩詳註』 卷二三(中華書局、一九七九年、二〇九〇頁) 参照。
- (8) 『旧唐書』 卷九五 「睿宗諸子列伝」(三〇〇九〜三〇一三頁)。
- (9) 李範と李憲の長安の府邸はそれぞれ安興坊と勝業坊にあり(『旧唐書』 卷九五 「睿宗諸子」、三〇一一頁)。
北宋の呂大防の「長安城図」によれば、李憲の府邸は安興坊にあるとする(呂大防「長安城図」、平岡武夫編『唐代の長安と洛陽・地図篇』、『唐代研究のしおり第七』、京都大学人文科学研究所、一九五六年)。また両者の洛陽の府邸はそれぞれ尚善坊と旌善坊にあった(徐松撰、張穆校補、方巖点校『唐兩京城坊考』 卷五 「東京・外郭城」、中華書局、一九八五年、一四八、一五〇頁及び徐松輯、高敏点校『河南志』 卷一、中華書局、一九九四年、六、七頁)。
- (10) 『唐兩京城坊考』 卷五 「東京・神都苑」(一四三頁)。
- (11) 『唐兩京城坊考』 卷五 「東京・外郭城」(一四八頁) 及び『河南志』 卷一(六頁)。
- (12) 例えば「智永千字文谷氏本」や「興福寺断碑」を見ると、「功」と「切」の字体は酷似している(伏見冲敬編『書道字典』、角川学芸出版、一九七七年、一〇九頁)。
- (13) 「述書賦」 卷下、『全唐文』 卷四四七(四五七一頁)。
- (14) 趙華偉 「述書賦」 成書及版本源流考」(『古籍整理研究学刊』 第二期、古籍整理研究学刊雜誌社、二〇〇九年、五六頁) 参照。
- (15) 『旧唐書』 卷八 「玄宗本紀」(一六九頁)。
- (16) 『新唐書』 卷一二四 「姚崇伝」(中華書局、一九七五年、四三八七頁)、『資治通鑑』 卷二二〇 「唐紀二十六」。

玄宗開元元年」（中華書局、一九五六年、六六九二頁）。

(17) 『旧唐書』卷九五「睿宗諸子列伝」（三〇一六頁）及び『資治通鑑』卷二二二「唐紀二十八・玄宗開元八年」（六七四一頁）。

(18) 『資治通鑑』卷二二二「唐紀二十八・玄宗開元十年」（六七五一頁）。

(19) 崔令欽「教坊記・序」、杜佑『通典』卷一四六「散樂」、『旧唐書』卷二九「音樂志」、『新唐書』卷四八「百官志」、『資治通鑑』卷二二二「唐紀・玄宗開元二年」等に関連する記述がある。

(20) 姜皎が太常卿に任じられたことは、『旧唐書』卷五九「姜嘗伝」（二三三四～二三三六頁）に、また范安及が教坊使に任じられたことは、任半塘『教坊記箋訂』（中華書局、一九六二年、九頁）及び韋述「大唐故鎮軍大將軍行右驍衛大將軍上柱国岳陽郡開国公範公（安及）墓誌銘並序」（『全唐文補遺』第三輯、一九九四年、六七頁）に見える。

(21) 中宗の神龍二年製作の盧粲「大唐故雍王贈章懷太子墓誌並序」の文末に「太常卿兼左衛率岐王範書」（『全唐文補遺』第三輯、五一頁）とあり、李範は遅くとも中宗期には太常卿に任官していた。

(22) 開元二年、李範は華州刺史任官の救命を受け、太常卿の勳封を受けた。（宋）宋敏求編『唐大詔令集』卷三五「岐王範華州刺史等制」に「太常卿兼左衛率并州大都督岐王範……可使持節華州諸軍事兼華州刺史、太常卿勳封如故。……開元二年十月二十九日」とあり（商務印書館、一九五九年、一五一頁）、『旧唐書』卷八「玄宗本紀」に「（開元二年七月）太常卿岐王範為華州刺史」と作る（一七三頁）。

(23) (唐) 鄭処誨『明皇雜錄』卷下、(五代) 王仁裕等『開元天寶遺事十種』（丁如明輯校、上海古籍出版社、一九八五年、二三頁）。

- (24) (唐) 馮贄『雲仙雜記』卷二「辨琴秦楚聲」條、『四部叢刊統編子部』(商務印書館、一九三四年)。
- (25) 『教坊記箋訂』(一四頁)。
- (26) 『資治通鑑』卷二一一「唐紀二十七・玄宗開元二年」(六七〇一頁)。
- (27) 『全唐文』卷二七九(二八二六頁)。
- (28) (唐) 鄭瓘「開天伝信記」(『開元天寶遺事十種』、五〇頁)と『旧唐書』卷九五「睿宗諸子」(三〇一一頁)参照。
- (29) 米山寅太郎等解題の静嘉堂文庫本『王右丞文集』卷二、『古典研究会叢書漢籍之部三二』(汲古書院、二〇〇五年、六五〜六六頁)。
- (30) 『旧唐書』卷二九「音樂志二」(一〇七〇頁)、また(北宋)王欽若等編『冊府元龜』卷五七〇「夷樂」は「百濟樂」を「高麗樂」に作り、「則天時、「高麗樂」猶二十五曲。……中宗時、百濟曲工人死散。開元中岐王範為太常卿、復奏置焉」とする。(中華書局、一九六〇年、六八六一頁)。
- (31) 丁放、袁行霈「姚崇、宋璟与盛唐詩壇」(『文学遺産』、二〇〇七年三期、五九頁)。但しこの研究は、李範の長安における文学活動に影響を及ぼしたことを指摘するもの、李範の文学に関して具体的な検証はされておらず、また駙馬都尉の裴虚己らが「坐黜」された時期を『資治通鑑』に基づき開元八年十月と断定する。
- (32) 『唐大詔令集』卷三五(一五二頁)。
- (33) 『資治通鑑』卷二一一「唐紀二十七・玄宗開元二年」(六七〇三頁)。
- (34) 『新唐書』卷八一「睿宗諸子列伝」(三六〇一頁)。
- (35) 『唐大詔令集』卷三五(一五一頁)。

- (36) 『資治通鑑』卷二一二「唐紀・玄宗開元九年」に「是歲、諸王為都督、刺史者、悉召還京師」とある（六七四八頁）。また李範の「唐故濟陰郡王（李嗣莊）墓誌銘並序」には、この銘文を李嗣莊が京師勝業里の私邸で死去した開元九年十月二十七日から日の浅い同年歲次辛酉十一月甲辰朔六日己酉に製作したとあり、李範は遅くとも開元九年（七二二）十一月ごろ長安に呼び戻されたと思われる。
- (37) 『唐大詔令集』卷三五「岐王範華州刺史等制」（一五一頁）。
- (38) 『資治通鑑』卷二一一「唐紀二十七・玄宗開元二年」（六七〇三頁）。
- (39) (唐) 獨孤及「唐故左補闕安定皇甫公集序」に「沈宋既歿、而崔司勳顯、王右丞維復崛起於開元、天寶之間」と評される（『全唐文』卷三八八、三九四〇頁）。
- (40) (唐) 薛用弱『集異記』卷中（陶敏主編『全唐五代筆記』、三秦出版社、二〇一二年、八六五頁）。なお、(唐) 鄭還古「鬱輪袍伝」にもこれと類似の記載がある。
- (41) 例えば唐の姚合『極玄集』には、王維について「開元九年進士」と注する（姚合『極玄集』卷上、「明」毛晋編『唐人選唐詩』、明崇禎元年虞山毛氏汲古閣刊本、大通書局、一九七三年、九二七頁）がある。
- (42) この三首は全て静嘉堂文庫『王右丞文集』卷二（六五〜六六頁）に見える。
- (43) 陳鉄民『王維集校注』卷一（中華書局、一九九七年、二五、二二、二四頁）参照。
- (44) 『旧唐書』卷三八「地理志一」（一四〇三頁）。
- (45) 『樂府詩集』卷八〇「近代曲辭・崑崙子」は、「揚子談經所」を「揚子譚經去」に作り、「興闌」を「醉来」に作る（中華書局、一九七九年、一一二三頁）。
- (46) 黄永武『敦煌的唐詩』（洪範書店、一九八七年、二三五、三二六頁（図影真跡））参照。

(47) 小林太市郎『王維の生涯と芸術』（全国書房、一九四四年、二六〇―二七頁）、入谷仙介著『王維研究』（創文社、一九七六年、九七頁）参照。

(48) 『全唐詩』卷一三〇（中華書局、一九六〇年、一三二―七頁）参照。

(49) 岐王府の自由で文化的な雰囲気については、張諤の「三日岐王宅」、「岐王山亭」、「岐王席上詠美人」等にも見られ、これらは李範の娘や山亭、歌伎等を歌詠対象とする（『全唐詩』卷一一〇、一一二―九―一一三〇頁）。

(50) 『樂府詩集』卷七三「雜曲歌辭十三」（一〇三―九頁）では、「發」を「覆」に、「歌舞態」を「盧女曲」に、「只擬」を「夜夜」に作る。

(51) 『杜詩詳註』卷二三「江南逢李龜年」（二〇六―〇頁）参照。

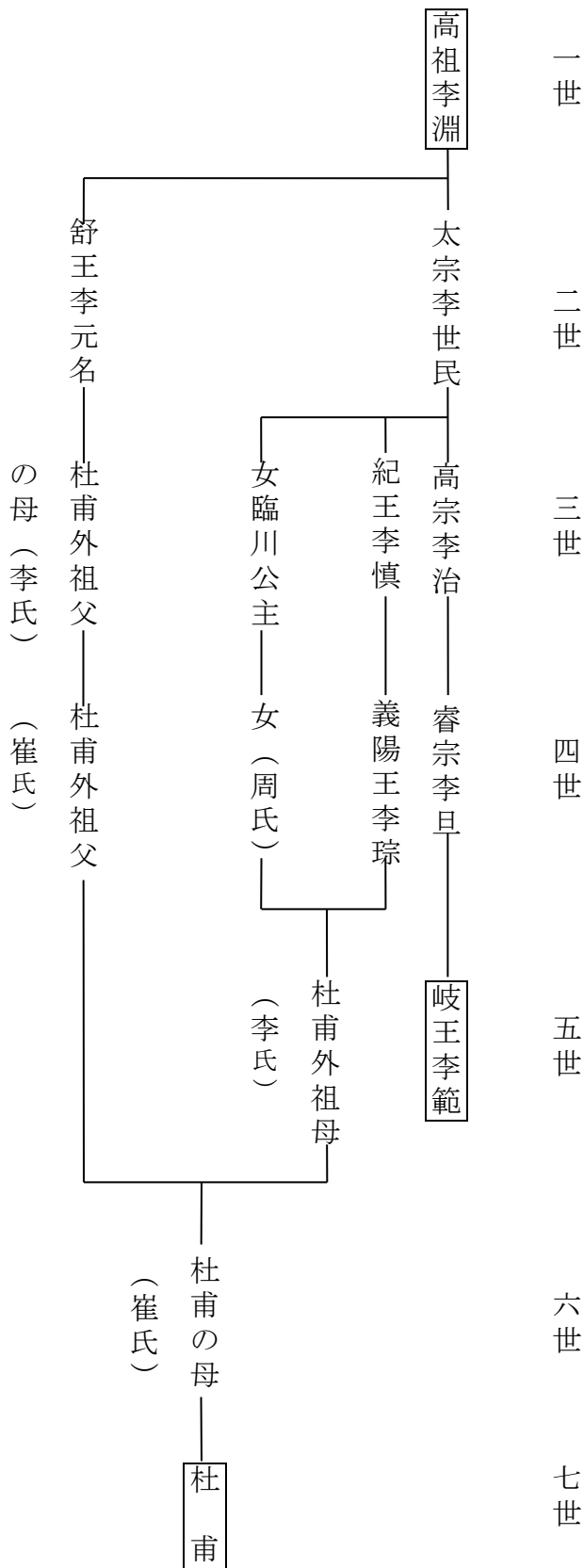
(52) 『杜詩詳註』卷一六「壯遊」（一四三―八頁）参照。

(53) 『杜詩詳註』卷二三「江南逢李龜年」の注に、「黃鶴云「開元十四年、公止十五歲、其時未有梨園弟子。公見李龜年、必在天寶十載後、詩云岐王、當指嗣岐王珍。」とある（二〇六―一頁）。

(54) この原因の一つに、この詩の作者が杜甫ではない可能性が挙げられるが、李範詩の語彙を分析すると、第二三三聯の「紅粉樓中」は、初唐の杜審言の「贈蘇綰書記」（「紅粉樓中応計日、燕支山下莫經年」）に初めて見られる詩語で、また第九一七聯の「風日」も、同じく杜審言の「春日京中有懷」（「寄語洛城風日道、明年春色倍還人」）に見られる詩語である。つまり『千載佳句』に残る李範の五聯の詩句のうち二聯中の詩語が、杜審言作品の語彙と一致する。李範が文学修養に努めた少年時代、杜審言は既に「文章四友」の筆頭として「天下に於いて重名有り」と評されていたため、李範が杜審言の詩歌の影響を受けた可能性は高い。また杜甫の外祖父は唐の高祖李淵の第十八子である舒王李元名の外孫で、外祖母は唐の太宗李世民的孫である義陽

王李琮の娘である（【杜甫母系与李唐王室の關係図】参照）。皇室の外族子孫にあたる杜甫ならば、李範の王府へ出入りが可能だったであろうし、また李範自身も政治的な事情から、地位や身分のある官員よりも、まだ政治に深く関わる機会のない若手文士と好んで交流した。以上二点の理由から、筆者は杜甫と李範は互いに面識があったと考える。

【杜甫母系与李唐王室の關係図】



- (55) 『唐会要』卷三六「修撰」(六五八頁) 参照。
- (56) 『旧唐書』卷四六「経籍志」(一九六六頁) 参照。
- (57) 『唐会要』卷三五「経籍」(六四四頁) 参照。
- (58) 『唐会要』卷三六「修撰」(六五八頁) 参照。
- (59) 『旧唐書』卷四六「経籍志」(一九六二頁) 参照。
- (60) 虎関師鍊『元亨积書』卷一六「力遊」(黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系』卷三一、吉川弘文館、一九六五年、二三三頁)。また心覚阿闍梨『入唐記』に「玄昉僧公山階寺、元正天皇靈龜元季乙卯、從吉備大臣船入唐唐開元三年乙卯。聖武天皇天平七年乙亥、帰朝在唐廿一年。裏書―玄昉請来経論合五十余卷」とある(平安末期鈔本『阪本龍門文庫覆制叢刊之三』、奈良県吉野町龍門文庫、一九六〇年)。
- (61) 『旧唐書』卷一九九上「日本国伝」(五三四一頁)。
- (62) 菅野真道等『続日本紀』卷一「文武天皇」(黑板勝美、国史大系編修会編『続日本紀新訂増補』、吉川弘文館、一九五二年、一頁) 参照。
- (63) 『続日本紀』卷八「元正天皇」(八四頁) 参照。
- (64) 大江匡房『江談抄』第三「雑事」、(川口久雄、奈良正一著『江談證注』、勉誠社、一九八四年、三八三頁)。
- (65) 『冊府元龜』卷九七四「外臣部・褒異」(中華書局、一九八九年、三八七三頁)。『冊府元龜』卷一七〇「帝王部・来遠」同載。
- (66) 『旧唐書』卷一九九上「日本国伝」(五三四一頁)。

第三章 『千載佳句』所収盛唐詩人及び詩歌補考

『千載佳句』に収される詩人百五十三名のうち、盛唐の詩人（無名氏は考慮しない）は王維、李範、張諤、崔顥、李白、杜甫、何仙芝、劉長卿などあわせて十数名に及ぶ。これらの詩人の一部については、すでにその生涯や官歴、作品等が明らかにされているが、『千載佳句』を資料として挙げるものは極めて少ない。またこれらの詩人のうち『千載佳句』にしか作品が残存しない詩人となると、資料の限界もあり、これまで本格的な研究はほとんど皆無であった。だが近年、新たな出土資料の発見が続々と報告されており、これらの資料を用いれば、従来考証が難しかった詩人についても新たな発見が可能である。本章では、『千載佳句』所収の盛唐詩人、特に従来考証が不十分であった人物の生涯や作品について、新資料を用いて考察し、文学における空白部分の解明を試みたい。ただし王維と李範については第一章及び第二章において既に考察しており、本章ではその対象としない。

一 僧貞幹について

貞幹については、現在中国側の文献に一切の記録が残っておらず、『千載佳句』遊放部遊獵に彼の七言詩「賀幸華清宮（華清宮に賀幸す）」の一聯「鷹隼風高隨草去、旌旗日晚傍山來（鷹隼風高く草に隨ひて去り、旌旗日晚れて山に傍^そひて來たる）」が収められるのみである。『全唐詩逸』はこの詩句を佚詩として採録し、作者の「貞幹」について「真幹。真、一作直」と記す⁽²⁾。従来、貞幹に関する記録は概ねこの資料に基づくほか無いのが現状であった。『唐詩大辞典』にも、『全唐詩逸』と同じく「貞幹」を「真幹、一作直幹」とし、「僧人。生平無考。『全唐詩

逸』收詩二句、録自日本大江維時編『千載佳句』卷下」とあるのみで、⁽³⁾これまで本格的な考証はなされていない。だが近年、西安や洛陽近辺で大量の唐代墓誌文献が出土し、筆者はその中に貞幹の「大唐開元慶山之寺上方舍利塔記」という作品が含まれているのを発見した。これは貞幹の生涯や文学を明らかにする上で重要な手懸りとなる。以下に本文を引用する。

涯夫真相不住曰應、惠力不拔曰堅。難目乎端倪、靡分乎噉昧、矧靈化不歇、分百億身耶。則知佛雨溥興、滅大宅之火、慈臚廣驚、洊彼岸之津。衡其功、點恒沙之塵。酌其微、納須彌之芥。匪涅匪朽、骨之有光。不騫不崩、瓶以合照。椀之以瓊寶、尊其異也。衾之以錦綺、形其信也。罕可瞻禮、其至謂歟。此寺迦藍、因神山踊建、剏鴻門之左阜、南揭驪嶺、劃象河之大川、北橫豐樹。漢之勝地、首在茲乎。壓重林、亘絕巘、肇創曾塔。歟遭大風、欒椽中隳、歲月亦久。賴前邑宰唐俊、下車不日、貞信孔崇。哀此荒涼、僉誰而可。迺命京溫國寺承宗法師充寺主。師冰徹性靈、松標節檢。知福田可作、識苦集若流。精舍席其風、鄰閭肩其行。自廿五歲、迨廿九年、寒暑不勞、土木躬力。載謀載構、是階是堵。□倕妙近、不召以子來。豫章巨材、匪求以人施。方虬奮浮、柱中閭清霄。鳳翔懸題、下簷白日。屏諸天於外戶、透迤若還。牀衆聖坎中軒、儼寢不動。能事畢萃、功德克周。允由僧徒同心、里閭罄信者矣。歲次鶉尾月惟仲呂日戊子、爰葬于舍利茲岩頂也。士女星奔以虔繞、阡陌晝空。童耄霧委以歸依、榛蕪成徑。瞻言伋立、作鎮大千。俾無疆之休、永永於皇祿。必感之祉、秩秩於黔黎。幽昭有憑、龍神聿會。將貽究竟之典、固勒他山之石。不墜覺果、式揚斯文。詞曰、惟滅度兮苟現真骨、炯昏沉兮惠性齊發。超祗劫兮作藩作離、拯逝世兮爲筌爲楫。

當寺大德惠燈、晤玄、思遠、謙已、上座太暉寺主承宗、法宗、休已、道琳、修己、鳳仙等同建。

大唐開元廿九年四月八日

涯夫真相 住まざるを応と曰ひ、恵力 抜かざるを堅と曰ふ。端倪をみるは難しく、皦昧を分かつ靡し、矧して靈化 歇まず、百億の身を分するなり。則ち仏雨の溥く興し、大宅の火を滅し、慈臚の広く驚き、彼岸の津に洊るを知る。其の功を衡れば、恒沙の塵を点す。其の微を酌すれば、須弥の芥を納る。涅ず朽ちず、骨の光有り。騫らず崩さず、瓶を以て合照す。之を椀するに瓌宝を以てするは、其の異を尊ぶなり。之を衾むに錦綺を以てするは、其の信を形すなり。罕に礼を贍るべし、其の至れる謂なるか。此の寺の迦藍、神山に因りて踊建し、鴻門の左阜を剷し、南に驪嶺に掲し、象河の大川を劃い、北のかた豊樹に横る。漢の勝地、首は茲に在らんか。重林を圧し、絶巘に亘り、肇めて曾塔を創す。歛かに大風に遭い、欒椽 中隳し、歲月亦久しうす。頼ひに前の邑宰の唐俊、下車 日ならず、貞信 孔崇たり。此の荒涼を哀れみ、誰を僉して可とす。迺ち京の温国寺の承宗法師に命じて寺主に充つ。師 冰徹 性靈、松標 節檢なり。福田 作る可きを知り、苦集 流るるが若きを識る。精舎 其の風を席き、鄰閭 其の行に肩ぶ。廿五歳より、廿九年に迨び、寒暑に勞らず、土木に力を躬くす。載ち謀り載ち構へ、是れ階是れ堵。□俚の妙近、召さずして以て子 来たる。豫章の巨材、求めずして以て人 施す。方虬 奮浮し、柱中閭 清霄あり。鳳翔 題に懸り、下に白日を簷る。諸天を外戸に屏き、透迤 還るが若し。衆聖を牀き、中軒を扞き、儼峩 動かず。能事畢萃し、功德 克周す。允に僧徒の同心、里閭の罄信の者に由るかな。歳次は鶉尾、月は惟仲呂、日は戊子、爰に舍利を茲の岩頂に葬す。士女 星奔し虔繞し、阡陌 昼に空く。童耄 霧委以て帰依し、榛蕪に 徑を成す。瞻言 伋立し、大千を作鎮す。無疆の休、皇祿に永永とし、必感の祉、黔黎に秩秩とせ俾む。幽昭 憑有り、龍神 聿に会ふ。將に究竟の典を貽り、固り他山の石を勒す。覺果に墜ちず、式に斯文を揚ぐ。詞に曰く、惟だ滅度すれば苟に真骨を

現し、昏沈を炯すれば惠性 齊しく発す。祇劫を超えて藩と作り離と作り、逝世を拯ひて筌と為し楫と為す。当寺の大徳の恵灯、晤玄、思遠、謙已、上座の太暉寺の主の承宗、法宗、休已、道琳、修己、鳳仙等、同に建つ。大唐開元廿九年四月八日⁽⁴⁾

この塔記を刻した上方舍利塔記碑は、一九八五年五月五日、陝西省西安市から三十公里の郊外にある新豊鎮露台郷で発見された⁽⁵⁾。釈迦牟尼の真身舍利を改葬する際に製作されたもので、文末に「大唐開元廿九年四月八日」とある。また題下に「翰林内供奉僧貞幹詞兼書（翰林内供奉の僧の貞幹 詞し兼ねて書す）」とあり、ここから貞幹が碑文の製作と揮毫を行ったことがわかる。（図版二）。

まずはこの題下の「翰林内供奉」に注目しよう。管見の限り、唐代の文献にこのような官職名を見出すことはできない。ただよく似た職に「翰林供奉」があり、これは『新唐書』百官志に「唐制、乘輿所在、必有文詞、經學之士、下至卜、醫、伎術之流、皆直於別院、以備宴見……玄宗初、置「翰林待詔」、以張説、陸堅、張九齡等爲之、掌四方表疏批答、應和文章。既而又以中書務劇、文書多壅滯、乃選文學之士、號「翰林供奉」、與集賢院學士分掌制詔書敕。開元二十六年、又改翰林供奉爲學士、別置學士院、專掌內命（唐制に、乘輿の在る所、必ず文詞有り、經學の士、下は卜、医、伎術の流に至るまで、皆別院に直^{とのい}し、以て宴見に備ふ……玄宗の初、「翰林待詔」を置き、張説、陸堅、張九齡等を以て之と爲す、四方の表疏批答を掌り、文章に応和す。既にして又中書の務^{はげ}劇しく、文書多く壅滯するを以て、乃ち文學の士を選びて、「翰林供奉」と号し、集賢院學士と制詔書敕を分掌す。開元二十六年、又翰林供奉を改めて學士と爲し、學士院を別置し、専ら内命を掌る」とあるように、「翰林供奉」が国家の政事に携わる官職で、その後身は開元二十六年に改名された「翰林學士」であることがわかる。僧侶である貞幹が、

このような重職に就くことは通常はありえない。一方で当時、「内供奉」という職もあつた。高宗期に新設された非正規の役職⁽⁶⁾で、即ち皇帝の側近として侍し、庶務を処理する臨時職であつた。つまり翰林院の宮廷文人や、書や絵画を得意とする僧侶や道士らが、内供奉と称して君主に侍駕していたのである（例えば天宝十五年春に立石された「溧陽瀨水貞義女碑銘并序」には、撰者に「前翰林院内供奉学士隴西李白」とある⁽⁷⁾）。貞幹が宮中において内供奉の職にあつたのなら、彼が「賀幸華清宮」を製作したのも自然な成り行きである。恐らくこれが事実であろう。

またこれによって、なぜ僧侶である彼の作品が『千載佳句』の遊放部遊獵に収録されるのかという疑問も一気に氷解する。僧侶は元來殺生を禁じられているが、貞幹が翰林内供奉であつたならば、玄宗に扈從して狩獵を實見することも可能だからだ。また「鷹隼風高隨草去、旌旗日晚傍山來」という表現は、後年、中唐の鄭嵎「津陽門詩（並序）」にも「五王扈駕夾城路、傳聲校獵渭水湄。……赤鷹黃鶻雲中來、妖狐狡兔無所依。人煩馬殆禽獸盡、百里腥羶禾黍稀（五王夾城の路に扈駕し、伝声渭水の湄に校獵す。……赤鷹黃鶻雲中より来たり、妖狐狡兔依る所無し。人煩^{わづら}馬殆^{あやう}く禽獸^{あやう}尽き、百里腥羶にして禾黍稀なり）」とあり、臨場感のある表現である。実際に貞幹がその目で見た狩獵の描写であると思われる。

次に、貞幹の塔記とその特徴について考察したい。先述の彼の塔記を見ると、駢文体で書かれている。その内容は、まず仏法の偉大さと舍利の尊さを讃え、慶山寺の舍利塔の建立と老朽化の状況を述べて、前県令の唐俊や長安の温国寺の承宗らの援助を得て、舍利塔の修復が行われたことを記した後、仏舍利改装の儀式が盛大に行われる様子を描くものである。明快な文章構成に、優美な文章表現、また字体は六朝の華麗な書風と楷書の端的な美しさを備え、生き生きとした筆遣いが特徴的である⁽⁸⁾。ここからも、貞幹が仏事だけでなく文芸や書においても深い造詣

を有していたことが十分確認できる。

慶山寺については、すでに専論があり、その遺址は陝西省臨潼県の城南、西の西安市から二十五キロ離れた驪山の北麓にあるという⁽⁹⁾。これは華清宮とも非常に近い位置にある。

またこの華清宮は元は温泉宮といい、華清宮と改称されるのは天宝六載のことであるから⁽¹⁰⁾、「賀幸華清宮」の創作時期は、必然的に天宝六載以降となる。

最後に、『宋高僧伝』「唐吳郡嘉禾貞幹伝」にも「貞幹」という人物についての記述があるので、検証しておきたい。

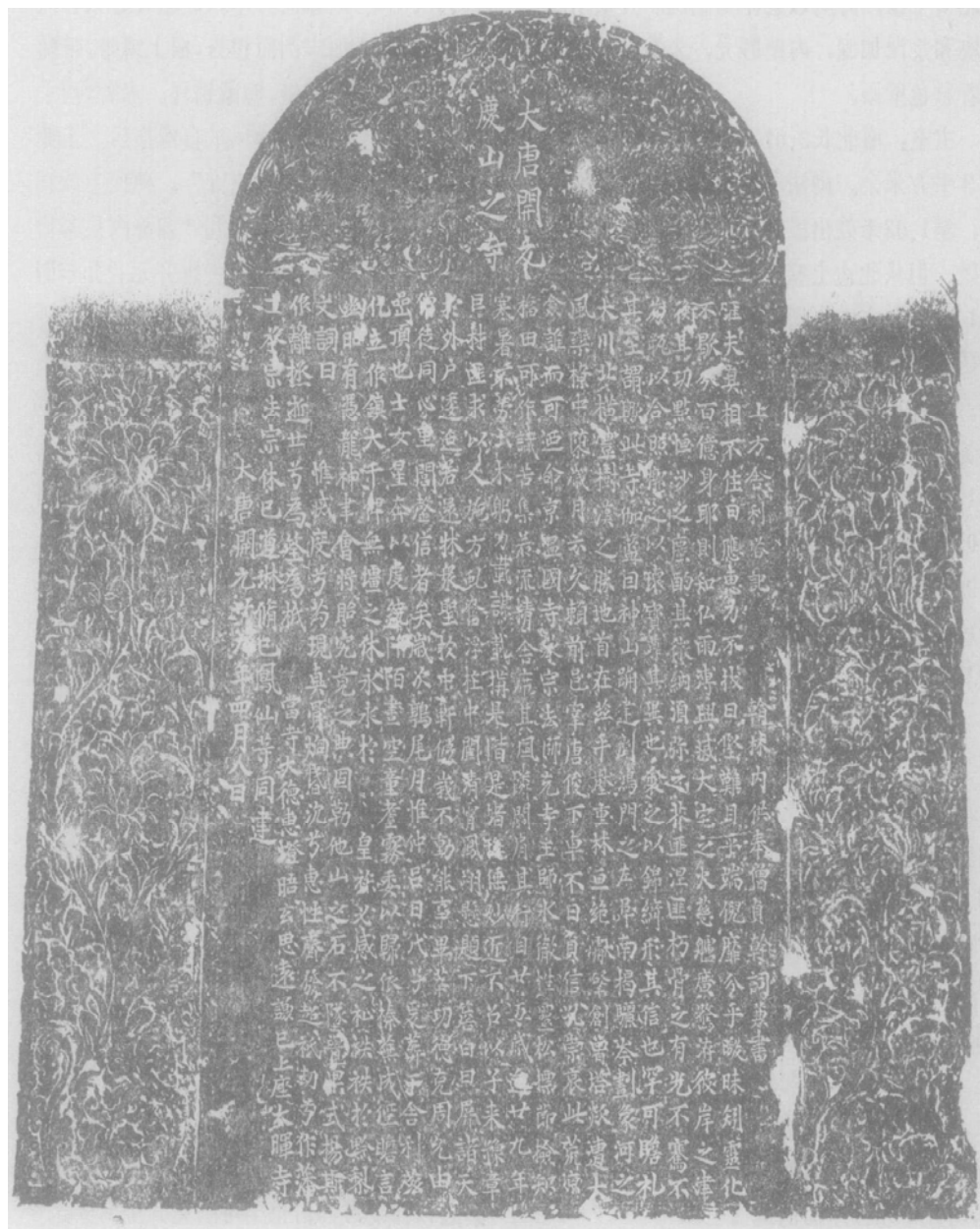
釋貞幹、俗姓武氏、雲中人也。神宇高邈、以禪默爲務。曳錫躡步、南訪靈跡、及至故鄣、有崑山寺者、林泉秀茂、則宋支曇諦嘗考室于此、味道崇化二十餘載、基跡存焉。至元嘉中創成大伽藍。屬武宗廢教、其寺屏除。幹至止於茲、與范陽盧君襲同興弘覺法師第二生名跡、寺成、進士姚扶有詩。幹後遊今秀州長水、見靈光寺、邑民欲樹巨殿。時盧令移邑宇民、欣然相遇、幹悉先知。或云「得他心宿命之明焉」。遂請幹首唱、而惡偃室之囂、寓殿基後、編苦爲淺室而居。四方檀信、弗召自臻。又與僧令恭君道等累歲方成今殿。其最高廣、海内罕比。事畢、挈弊囊、振舊錫歸北、莫知其終。

積貞幹、俗姓武氏、雲中の人なり。神宇高邈にして、禪默を以て務めと爲す。錫を曳きて躡歩し、南のかた靈跡を訪ね、故鄣に至るに及び、崑山寺なる者有り、林泉秀茂なり、則ち宋の支曇諦嘗て此に室を考し、道を味わい崇化すること二十餘載、基跡焉に存す。元嘉中に至り大伽藍を創成する。屬武宗教えを廢し、其の寺屏除さる。幹茲に至り止まり、范陽の盧君襲と共に弘覺法師第二生の名跡を興し、寺成り、進士

姚扶に詩有り。幹後に今の秀州長水に遊び、靈光寺を見るに、邑民巨殿を樹てんと欲す。時に盧令邑を
移し民を字し^{いづく}しみ、欣然として相遇ふも、幹悉く先に知る。或は云ふ「他心・宿命の明なるを得たるか」
と。遂に幹に首に唱せんことを請び、而るに偃室の囂^{はじめ}きを悪^{かまびすし}み、殿基の後に寓し、苦を編みて淺室を
為りて居る。四方の檀信、召さすしても自ら臻^{いた}る。又僧令の恭君道等と累歳方に今殿を成す。其れ最も高
広にして、海内罕比たり。事畢りて、弊囊を挈り、旧錫を振るひて北に帰り、其の終りを知る莫⁽¹¹⁾し。

ここでは、貞幹という名の唐僧の遊歴や布教の様子が述べられる。だが上述の資料に拠れば、当時昆山寺は武宗
の廃仏運動の影響を受けて廢寺となっていた。したがってこの昆山寺を再興した貞幹なる人物は、無論、武宗時代
或いはそれ以降の人物ということになり、玄宗時代の貞幹とは別人となる。

以上、『千載佳句』に見える貞幹の生涯について明らかにした。貞幹は、玄宗期において宮中に仕えた僧侶であ
った。仏道教学に精通していたほか、文学や書道にも明るく、開元二十九年には皇族の寺院である慶山寺の祭典に
参加し、「開元慶山寺上方舍利塔記」を書いた。その後天宝六載或いはそれ以降、玄宗の華清宮行幸に従い「賀幸
華清宮」を創作した。そしてこの作品が、日本に伝わり『千載佳句』に採録されたのである。



図版二 一九八五年五月五日、陝西省新豐鎮露台郷で出土した「大唐開元慶山之寺上方舍利塔記」碑。この図像は趙康民「臨潼唐慶山寺舍利塔基精室清理記」(『文博』、一九八五年第五期)から引用した。

二 張諤についての考証

張諤の生涯に関する資料は極めて少ない。『旧唐書』、『新唐書』、『唐会要』、『唐詩紀事』等に言及があるものの、例えば『旧唐書』「睿宗諸子伝」に「万年尉の劉庭琦、太祝の張諤 皆 範と酒を飲み詩を賦すに坐す。庭琦 黜しりぞけられて雅州司戸と為り、諤 山莊丞と為る」とあるように、その内容は岐王李範との交際のために左遷されたことを記すのみで、彼の生涯や作品については語られない⁽¹²⁾。それゆえ、日本側の資料である『日本国見在書目録』に「張諤集一（巻）」とあり、また『千載佳句』に張諤の七言詩二聯が残されているのは注目に値する。中国の文献では張諤の別集の存在は一切触れられておらず、また各種唐詩選集にも彼の作品は一切収録されていないからである。彼の作品や経歴、交友関係についてはまだ本格的に研究されたことがなく、多分に研究の余地がある。本章では上述の資料に加え、新出土資料である張諤撰「唐故潁王府録事參軍郗君墓誌銘并序」⁽¹³⁾についても考察する。

(一) 張諤の仕官について

関連する資料は以下の通り。

① 陳王掾張諤五首。

陳王掾の張諤五首。

(『国秀集』巻中)

②（岐王李範）與閻朝隱、劉庭琦、張諤、鄭絛篇題唱和、又多聚書畫古跡、爲時所稱。時上禁約王公、不令與外人交結。駙馬都尉裴虛己坐與範遊讌、兼私挾讖緯之書、配徙嶺外。萬年尉劉庭琦、太祝張諤皆坐與範飲酒賦詩、黜庭琦爲雅州司戶、諤爲山莊丞。

（岐王李範）、閻朝隱、劉庭琦、張諤、鄭絛と篇題唱和す。又多く書画古跡を聚め、時の称する所と爲る。時に上王公を禁約し、外人と交結せしめず。駙馬都尉の裴虚己範と遊讌し、兼ねて讖緯の書を私挾するに坐し、嶺外に配徙せらる。万年尉の劉庭琦、太祝の張諤皆坐して範と酒を飲み詩を賦す。黜しりぞけられて庭琦雅州司戸と爲り、諤山莊丞と爲る。

〔旧唐書〕卷九五「睿宗諸子伝」

③萬年尉劉庭琦、太祝張諤唐太常寺有太祝六人、正九品上。數與範飲酒賦詩、貶庭琦雅州司戶、諤山莊丞。

万年尉の劉庭琦、太祝の張諤唐太常寺太祝六人を有す、正九品上。數しばしば範と飲酒賦詩し、貶さるるに庭琦は雅州司戸たり、諤は山莊丞たり。

〔資治通鑑〕卷二二二「唐紀二十八、玄宗開元八年」

④諤、登景龍進士第。岐王範好儒士、與閻朝隱、劉廷琦、鄭絛等飲酒賦詩。駙馬都尉裴虛己善讖緯、坐私與範游、徙嶺南、廷琦貶雅州司戶、諤山莊丞、然明皇于範無間也。

諤、景龍進士の第に登る。岐王範 儒士を好み、閻朝隱、劉廷琦、鄭繇等と飲酒賦詩す。駙馬都尉の裴虛己 讖緯を善くし、私ひそかに範と遊ぶに坐して、嶺南に徙され、廷琦 雅州司戸に貶され、諤 山莊丞たり、然るに明皇範へだに間たる無し。

〔『唐詩紀事』卷一五〕

⑤張諤、景龍中登進士第。仕爲陳王掾。岐王範雅好儒士、諤與閻朝隱、劉庭琦、鄭繇等皆從之遊、賦詩飲酒。後坐貶山莊丞。詩十二首。

張諤、景龍中 進士の第に登る。仕ふるに陳王掾たり。岐王範 儒士を雅好し、諤は閻朝隱、劉庭琦、鄭繇等と皆之に従ひて遊び、賦詩飲酒す。後に坐して山莊丞に貶さる。詩十二首あり。

〔『全唐詩』卷一一〇〕

資料④と⑤から、張諤が中宗の景龍年間に科擧に及第したことがわかる。『登科記考』ではさらに詳細な考証を行い、この時期を景龍二年（七〇八）と指摘する。⁽¹⁴⁾ また上述の五つの資料から、張諤が陳王掾や太祝、山莊丞の職にあつたことがわかる。太祝とは正九品で、⁽¹⁵⁾ 主に「掌讀祝文、出納神主（祝文を掌讀し、神主を出納す）」る任務を司つた。⁽¹⁶⁾ 資料③は、張諤がその太祝から山莊丞に左遷されたことを述べる。また陳王掾は、陳王府の掾属である。開元年間の敕制によれば、親王府には「掾一人」を置き、「通判功、倉、戸三曹」とある。⁽¹⁷⁾ 高宗から玄宗の時代にかけて陳王に封じられた者は全部で三名おり、うち一人は貞觀二十年（六四六）八月に陳王となり、⁽¹⁸⁾ 永徽三年（六五二）七月に皇太子に立てられた⁽¹⁹⁾ 高宗の長子李忠である。また二人目は、開元二十一年（七三三）九月

に陳王に封じられた⁽²⁰⁾玄宗の長子李漼である。そして三人目は、開元二十三年（七三五）に陳王に封じられた⁽²¹⁾玄宗の息子李珣である。ではこの三人のうち、張諤は一体誰に仕えたのだろうか。まず、資料③から張諤が山莊丞に左遷されたのが開元十年とあること、また張諤には開元十三年（七二五）に玄宗の泰山封禪の様子を述べた「東封山下宴群臣」詩があることから、陳王の李忠は年代が合わない。また、張諤が山莊丞に左遷された時期と李漼、李珣が陳王に封じられた年を考え合わせると、彼が陳王掾の職に就いたのは、左遷以降であると推断される。

さらに張諤の「唐故潁王府録事參軍郃君墓誌銘并序」について分析すると、この作品が製作されたのは、張諤が「國子監四門博士」であつた時とわかる。四門博士とは、開元二十五年の敕令によつて設置された正七品の官職である。⁽²²⁾その成立背景について『通典』卷五三「礼十三」に「貞觀五年、太宗數幸國學……無何、高麗、百濟、新羅、高昌、吐蕃諸國酋長、亦遣子弟請入國學。於是國學之内八千餘人。國學之盛、近古未有。龍朔二年、東都置國子監、丞、主簿、録事各一員、四門博士、助教、四門生三百員（貞觀五年、太宗數^{しばしば}國學を幸し……^{いくばく}何も無くして、高麗、百濟、新羅、高昌、吐蕃の諸國の酋長、亦子弟を遣はし、國學に入らんことを請ふ。是に於て國學の内八千余人あり。國學の盛んなること、近古に未だ有らず。龍朔二年、東都に國子監、丞、主簿、録事各一員、四門博士、助教、四門生三百員を置く）」とある。初唐では國學が重視されたため、龍朔二年（六六二）には長安に続いて東都洛陽にも四門博士が設立された。また墓誌銘にあるように、墓主の郃崇烈は「洛陽感德里の私室」において逝去した。よつて張諤は、洛陽の四門博士であつたと推定される。また郃氏が死去したのは「開元廿有八祀五月八日」であるから、張諤が四門博士だつたのは開元二十八年、或いはそれに前後する時期であろう。墓主の郃氏は墓誌銘中に「潁王府録事參軍」とあり、玄宗の第十三子李漼の潁王府の録事參軍であつた。⁽²³⁾墓誌銘の序文には「解褐以諸親拜太州參軍、轉司禮太祝、秦府功曹、蘇州司法、潁王録事。無何、以内憂免官。……荏苒五莅事、

蹉跎一掾曹。不以位卑而荒厥政、不以祿薄而怨其時（解褐し諸親を以て太州參軍を拜し、司礼太祝、秦府功曹、蘇州司法、潁王録事に転ず。何いくばくも無くして、内憂を以て免官さる。……荏苒五莅事、蹉跎一掾曹。位の卑ひくきを以て厥その政を荒おこたららず、祿の薄きを以て其の時を怨まず）とあり、郗崇烈もまた張諤と同じく上中級役人ではなかつた。

（二）張諤の文学活動

張諤の交遊関係に関しては、次の資料が注目される。

（徐浚）往往警策、蔚爲佳句。常與太子賓客賀公、中書侍郎族兄安貞、吳郡張諤、會稽賀朝、萬齊融、餘杭何謩爲文章之游。凡所唱和、動盈卷軸。

（徐浚）往往にして警策あり、蔚佳句と爲す。常に太子賓客の賀公、中書侍郎の族兄安貞、吳郡の張諤、會稽の賀朝、万齊融、余杭の何謩と文章の遊を爲す。凡そ唱和する所、動やもすれば卷軸(24)に盈みつ。

（徐浩「唐故朝議郎行馮翊郡司兵參軍徐府君（浚）墓誌銘並序」）

ここから張諤の原籍が江蘇吳郡であること、そして当時江南では賀知章を中心とする文学集団が形成されており、張諤もこれに参加していたことがわかる。(25)つまり、張諤は長安において岐王李範が私的に主催する文学集団に参加(26)しただけでなく、江南の文壇でも活躍していたのである。ただし一地方に過ぎない江南の社交界では規模的に

限界があり、やはり張諤にとっては都長安での交遊のほうが人脈や名声を得る機会が多かったはずである。

張諤の作品はほとんど現存しておらず、『全唐詩』にもわずかに十二首が収録されるのみで、その多くは五言の侍宴詩や唱和詩である。ただしうち五首が『国秀集』に（「東封山下宴群臣」、「岐王美人」、「贈吏部孫員外濟」、「岐王山亭」、「九日宴」）、また三首が『搜玉小集』（撰者不明）に収められ（「三日岐王宅」、「満月」、「岐王席上詠美人」）、さらに一首が五代の韋穀編『才調集』に収録される（「還京」）。しかも、『国秀集』が収める詩歌は「風流婉麗（風流 婉麗にして）」、「可被管弦（管弦を被る可し）」といった作風のもの（²⁸）が多く、『搜玉小集』では応制、奉和、閨怨、述懐などがあり、そして『才調集』に採録されるのは「韻高而桂魄爭光、詞麗而春色鬪美（韻高くして桂魄光を争ひ、詞麗にして春色 美を鬪 ^{たか}はす）」などの詩であることから、張諤の詩歌は華麗で音楽に合わせて詠まれる性格を持っていたことがわかる。また彼の詩歌はこれらの詩歌選集に多く収められているので、彼の作品が当時広く流行してことは推察される。『千載佳句』に所収される彼の二聯の詩句、すなわち宴喜部踏歌に属す「月夜看美人踏歌」詩「天上恒娥遙解意、偏教月向踏歌明（天上の恒娥 遙かに意を解き、偏教 月 踏歌 ³⁰）に向かひて明らかなり」や、別離部送別に属する「翫山月送百九」詩「共待山頭明月上、照君行棹出長川（共に待つ 山頭 明月の上るを、君 棹を行ひ長川に出づるを照らす）」など、歌舞、美人、別離等の題材を扱っており、唐詩選集の張諤の作風とほぼ一致する。

以上、盛唐詩人の張諤は江蘇の呉郡の人であり、景龍二年（七〇八）に進士に及第し、太祝、山莊丞、陳王掾等の職を奉じた。また洛陽で四門博士を務めていた頃、墓誌銘を製作した。さらに張諤は、官位が低く、特に目立った業績が無かったにも拘らず、長安だけでなく、江南における唱和活動にも積極的に参加し、当時彼の作品は広く流行していた。その作品が日本に伝えられて平安時代の古文献に今なお保存されるのはこのためであろう。

三 丁仙芝「陪岐王宅宴」詩について

丁仙芝の経歴についても資料が乏しい。ただし儲光羲の「貽丁主簿仙芝別」詩から、丁仙芝が開元十三年（七二五）に進士に及第したことがわかる。⁽³¹⁾その後長く仕官できず、開元十八年によく職を得たが、主簿や余杭尉といった下級役人に過ぎなかった。丁仙芝の作品について、まず別集が残っておらず、また『全唐文』等の文献にも採録されていない。わずかに数首の詩歌がいくつかの唐詩選集に収録されるのみである。しかもこれらの中には、孟浩然の作品を誤入したものや、作者が丁仙芝であるかどうか疑わしいものも含まれる。丁仙芝の官位が低かったこと、彼の作品が生前それほど流行しなかったことから、文壇における当時の彼の声望や影響力は決して大きくはなかったと推察される。しかしながら一方で『千載佳句』は、四時部早秋に彼の詩「陪岐王宅宴（岐王宅の宴に陪す）」の一聯「雨鳴鴛瓦收炎氣、風卷珠簾送曉涼（雨鴛瓦を鳴らして炎氣を収めしめ、風珠簾を巻きて曉涼を送る）」を収める。この作品は、中国側には全く伝わらない資料であり、丁仙芝の生涯や文学を再考する上で重要な手がかりとなる。

まず、『千載佳句』に収録される丁仙芝詩から、彼の作品の伝播状況を見ていきたい。丁仙芝の詩歌は、生前には当時の唐詩選集にも採録されており、例えば『国秀集』は「京中守歳」⁽³²⁾一首を収め、作者を「余杭尉丁仙芝」と記す。ここから丁仙芝が余杭尉の任に就いたのは、『国秀集』が成立する天宝三年（七四四）より以前であることがわかる。これより、この時期、丁仙芝の作品には「可披管弦」、つまり音楽に合わせて詠まれるという特徴があったことが考えられる。『樂府詩集』「相和歌辞一」が丁仙芝の「江南曲」五首を採録していることが、このことを証明していよう。また、同時代の殷璠編『丹陽集』も丁仙芝の作品数首を収録する。『丹陽集』について、『新唐

書』「芸文志」の「包融詩」の注に、「曲阿有餘杭尉丁仙芝、緱氏主簿蔡隱丘、監察御史蔡希周、渭南尉蔡希寂、處士張彥雄、張潮、校書郎張暈、吏部常選周瑀、長洲尉談戡、句容有忠王府倉曹參軍殷遙、硤石主簿樊光、橫陽主簿沈如筠、江寧有右拾遺孫處玄、處士徐延壽、丹徒有江都主簿馬挺、武進尉申堂構、十八人皆有詩名。殷璠彙次其詩、爲『丹楊集』者。（曲阿に余杭尉の丁仙芝、緱氏主簿の蔡隱丘、監察御史の蔡希周、渭南尉の蔡希寂、処士の張彥雄、張潮、校書郎の張暈、吏部常選の周瑀、長洲尉の談戡有り、句容に忠王府の倉曹參軍の殷遙、硤石主簿の樊光、橫陽主簿の沈如筠有り、江寧に右拾遺の孫處玄、処士の徐延壽有り、丹徒に江都主簿の馬挺、武進尉の申堂構有り、十八人皆 詩名有り。殷璠 其の詩を彙次し、『丹楊集』なる者を為す）」とある。ここから『丹陽集』が特定の地域に偏向した選集であることがわかる。すなわち該書に収録される十八名はみな潤州（今の江蘇省鎮江市）出身の詩人なのである。この詩集自体は後に散逸し、丁仙芝の作品が如何なるものであったか、現在では知るよしもない。だが彼の作品は、『吟窗雜錄』に「仙芝詩婉麗清新、迴出凡俗、恨其文多質少（仙芝の詩は婉麗清新にして、迴かに凡俗を出づ、其の文多く質少なきを恨む）」と評され、⁽³³⁾文才を高く評価されている。『丹楊集』は開元二十三年から二十九年の間に⁽³⁴⁾成立しており、したがって開元後期には丁仙芝の詩が一定の評価を得ていたことがわかる。また『崇文總目』に『丹楊集』一卷」と著録されていることから、『丹楊集』は北宋までは伝存しており、さらに『見在書目録』に『丹楊集』一（卷）」とあり、日本にも伝来していた。ところで、『見在書目録』には『河嶽英靈集』一（卷）」と『荊楊挺秀集』二（卷）」の存目もある。⁽³⁵⁾『河嶽英靈集』も『荊揚挺秀集』も、『丹陽集』の編者である殷璠が編纂した唐詩選集である。前者は丁仙芝の作品を収めておらず、後者は宋代に既に散佚してしまったが、殷璠が編纂した三つの選集が全て日本に持ち込まれたのは、彼の唐詩作品に対する見識が当時広く受け入れられていたことの現れであろう。丁仙芝に別集がなく、『丹楊集』に丁仙芝の作品についての言及があり、また『荊揚挺

秀集』も彼の詩を収録していた可能性を考慮すれば、『千載佳句』の「陪岐王宅宴」の祖本は、この二つの唐詩選集のうちのいずれかである可能性が極めて高い。

次に詩題の「陪岐王宅宴」について検証したい。「岐王」は「好學尚書、雅愛文章之士……時士庶冀有所成功（学を好み書を尚^{たつと}び、文章の士を雅愛す……時の士庶 成功する所有らんことを冀^{こひねが}ふ）」と評された李範を指す⁽³⁶⁾。丁仙芝が進士に及第したのは開元十三年（七二五）で、その翌年に李範が死去したため、「陪岐王宅宴」が創作されたのは彼の科挙登第以前のことであると考えられる⁽³⁷⁾。しかも丁仙芝は長安に滞在中、権貴に知遇を求める作品を製作しており（例えば「贈朱中書」詩に「紫微侍郎白虎殿、出入通籍廻天眷。晨趨綵筆柏梁篇、晝出雕盤太官膳。會應憐爾居素約、可即長年守貧賤（紫微の侍郎 白虎の殿、出入通籍し天眷を廻る。晨に趨りて「柏梁篇」を綵筆し、晝に出で太官膳を雕盤す。會^{かなら}ず応^{まさ}に 爾の素約に居^おくを憐れむべし、即^{たと}ひ長年なるも貧賤を守るべし）」とある）、またこの「陪岐王宅宴」中に描かれる宴席は、「士庶 成功する所有らんことを冀ふ」とされた岐王李範の邸宅である。よってこの詩は恐らく、李範に仕官の幹旋を求める目的で創作されたのだろう。

さらにここで、丁仙芝の交遊関係について考察してみたい。現存する彼の詩「贈朱中書」、「戲贈姚侍御」「余杭醉歌贈吳山人」から、彼が朱中書、姚侍御、隱者の吳山人と交遊があったことがわかる。また丁仙芝の「唐故隨州司法參軍陸府君（広成）墓誌銘並序⁽³⁹⁾」という作品がある。この墓誌銘の撰者「丁仙芝」は「丁仙芝」であり⁽⁴⁰⁾、「前国子進士」と記される。墓誌銘には墓主の陸広成が「始以弱冠補國子生。明申公詩及左氏傳。登太常第、調補隨州司法參軍（始め弱冠なるを以て国子生に補さる。申公詩及び左氏伝に明らかなり。太常第に登り、調せられて隨州の司法參軍に補さる）」とあるため、両者は国子生であった際に知り合ったとする説もある⁽⁴¹⁾。陸広成は隨州の司法參軍として生涯を終えているから、やはり下級役人の一人に過ぎなかった。このため丁仙芝と交遊があったこ

とがわかっている者のうち、彼が仕官の幹旋を求めるほどの高位にあったのは「朱中書」のみである。『千載佳句』所収の丁仙芝の作品に「岐王」と現れることにより、丁仙芝の仕官幹旋を求めた対象を補足でき、したがって、丁仙芝の交遊関係において新たに岐王李範という皇室関係者の存在を見出すことができるのである。

四 劉長卿の『千載佳句』収録詩句について

劉長卿は、五言詩に巧みなことから「五言の長城」と称される⁽⁴²⁾。范晞文『対床夜語』には、「人知許渾七言、不知許五言亦自成一家人。知劉長卿五言、不知劉七言亦高（人許渾の七言を知るも、許の五言も亦自ら一家を成せるを知らず。劉長卿の五言を知るも、劉の七言も亦高きを知らず）」と、当時の人々が彼の五言詩を評価するあまり、七言詩にも巧みなことに気付かなかった、という逸話を載せる。これに対し日本の平安時代の古文獻では、劉長卿の五言詩よりも、むしろ七言詩が収録される傾向にあり、『千載佳句』は彼の七言詩五聯を収める。これは『千載佳句』に所収される詩人百五十三名のうち、二十六番目に多い収録数である（奥書に拠る）。五聯の詩句については以下の通り。

①第五八聯「送嚴士元」（四時部、春興）（松平本を参照）

細雨濕衣看不見 細雨衣を湿らすも 看れども見えず

閑花滿地落無聲 閑花 地に満つるも 落つるに声無し

②第九六聯「題褚少府湖上臨亭」（四時部、暮春）

紛紛花落門空閉
紛紛として花落つるも門空しく閉ぢ
寂寂鸞啼日更遲
寂寂として鸞啼けば日更に遅し

③第四五九聯「題張山人所居」（人事部、閑居）

春苔滿地無行處
春苔地に満ちて行く処無く
染映桃花獨閉門
染め映ゆる桃花独り門を閉ざす

④第九一六聯「送巖士元」（別離部、送別）

日斜江上孤帆影
日江上に斜す孤帆の影
草綠湖南万里情
草湖南を緑にす万里の情

⑤第九三九聯「送李舍人」（別離部、秋別）

帆帶夕陽千里沒
帆夕陽を帯びて千里沒し
天連秋水一人歸
天秋水を連ねて一人歸す

ここで①第五八聯と④第九一六聯はいずれも詩題を「送巖士元」に作る。両首は作者に関して異説があり、『中興間気集』と『文苑英華』は『千載佳句』と同じく作者を劉長卿とするものの、『才調集』では李嘉祐を作者とする。⁽⁴³⁾

両者の混同は、②第九六聯の「題褚少府湖上臨亭」においても同様で、『文苑英華』は劉長卿を作者とするが、『才調集』では李嘉祐としている。⁽⁴⁴⁾

次に、この五聯の詩句について劉長卿の別集や唐宋時代に成立した唐詩選集と比較し、その異同について検証したい。まず①第五八聯の詩題「送巖士元」について、『劉隨州集』は「別巖士元」に作り、『中興間氣集』は「送郎士元」に、『才調集』は「送巖員外」に作り、また『文苑英華』の卷二七〇では「送巖員外集作吳中贈列巖士元」に、卷二八七では「留別巖員外」に作る。ただし『中興間氣集』が「郎士元」とするのは誤りである。⁽⁴⁶⁾『千載佳句』の詩題「送巖士元」に最も近いのは、『劉隨州集』の「別巖士元」である。また、②第九六聯の詩題「題褚少府湖上臨亭」について、『劉隨州集』は「赴南中題目褚少府湖上亭子」に、『才調集』は「赴南中留別褚少府湖上林亭」⁽⁴⁵⁾作起南巴留別褚少府」に作り、また『文苑英華』は「越南中留集作題褚少府湖上林亭」に作る。さらにこの聯の詩句「紛花落門空閉」について、『劉隨州集』は『千載佳句』と同様「紛紛花落門空閉」に作るが、『文苑英華』と『才調集』は「紛紛花發門空閉」に作る。つまり異同については『才調集』、『文苑英華』の系統と、『千載佳句』、『劉隨州集』の系統に分けられるのである。以上の検証から、『千載佳句』が底本としたのは、各種唐詩選集ではなく劉長卿の別集であった可能性が高い。

さらに最も着目すべきは、①第五八聯の詩句「細雨濕衣看不見、閑花滿地落無聲」である。通行している『劉隨州集』は「細雨濕衣看不見、閑花落地聽無聲」に、『中興間氣集』、『文苑英華』、『才調集』でも、ともに「細雨濕衣看不見、閑花落地聽無聲」⁽⁴⁵⁾に作っており、『千載佳句』とは大きく異なる。これに関して清の汪師韓撰『詩学纂聞』「劉隨州別巖士元詩」の記事が特筆される。

友人有曾游於何義門先生之門者、嘗言劉隨州詩「細雨溼衣看不見、閑花落地聽無聲」。先生家有宋槧本、乃是「閑花滿地落無聲」、蓋花已落地、更何可聽。

友人曾て何義門先生の門に遊ぶ者あり、嘗て劉隨州の詩に「細雨溼衣看不見、閑花**落地聽無聲**」と言ふ。先生(47)の家に宋槧本有るは、乃ち是れ「閑花**滿地落無聲**」なり、蓋し花已に地に落つるに、更に何をか聴くべけんや。

汪師韓は、「閑花**落地聽無聲**」に作る通行本と比較し、宋槧本『劉長卿集』が「閑花**滿地落無聲**」に作るのは意味が通らないとする。しかしこれは『千載佳句』の詩句と完全に一致している。そのため『千載佳句』所収の劉長卿詩は、宋槧本の劉長卿集と同系統本を底本としていたのではないかと思われる。

最後に、③第四五九聯の「題張山人所居」については、中国ではすでに佚詩となっているため、張山人についての考証は難しい。また⑤第九三九聯の詩題「送李舍人」は、『劉隨州集』では「青溪口送人歸岳州（青溪口にて人の岳州に帰るを送る）」に作るが、詩句中の異同はない。

劉長卿の作品は、なぜ日本の古文献中に見られるのか。これについて明確な史料は無いものの、劉長卿の詩に「同崔載華贈日本聘使」という作品があり、先行研究によって「長卿贈詩者、當為小野石根或布勢清直二人之一」との考証がある。(48)つまり劉長卿と入唐日本人との交遊こそ、彼の作品が日本に伝えられた重要な要因だったのである。

- (1) 詩題の「賀」を『全唐詩逸』は「駕」に作る。「賀幸」は唐代にはあまり見られない用例であるのに対し、「駕幸」は君主に扈遊する際に当時よく使われた語句である。例えば玄宗期の宰相韓休の「駕幸華清宮賦以温泉
 恣湧盪邪難老為韻」(『文苑英華』卷五八)や林琨の「駕幸温泉宮賦以天下安樂明主宴遊為韻」(同上)など。
 ゆえに『全唐詩逸』に従い「駕幸華清宮」と作るのが妥当とも思われるが、筆者が確認し得た『千載佳句』
 はいずれも「賀」に作り、かつ『全唐詩逸』が「駕」と作る理由が不明瞭なため、ここでは『千載佳句』に
 従う。なお韓休は開元二十七年(七三九)に病没している(『旧唐書』卷九八、三〇七九頁)ので、「駕幸華
 清宮賦以温泉恣湧盪邪難老為韻」に「華清宮」とあるのは後人の改作であろう。
- (2) 『全唐詩逸』卷中(中華書局、一九六〇年、一〇二一一頁)。
- (3) 周勛初『唐詩大辭典』修訂本(鳳凰出版社、二〇〇三年、三二五頁)。
- (4) 吳鋼『全唐文補遺』第一輯(三秦出版社、一九九四年、五頁)。
- (5) 趙康民「臨潼唐慶山寺舍利塔基精室清理記」(『文博』第五期、一九八五年)。
- (6) 『通典』卷二十四「職官六」(中華書局、一九八八年、六六一頁)。
- (7) 瞿蜕園、朱金城『李白集校注』卷二九(上海古籍出版社、一九八〇年、一六四八頁)。
- (8) 顧承甫「唐代慶山寺小考」(『史林』第一期、一九八六年) 参照。
- (9) 前掲注(8) 参照。
- (10) 『旧唐書』卷九「玄宗本紀」(二二二頁) 参照。

- (11) 贊寧『宋高僧伝』卷二七（范祥雍点校、中華書局、一九八七年、六七六～六七七頁）。
- (12) 『旧唐書』卷九五（三〇一六頁）、『新唐書』卷八一（三六〇一頁）、『唐会要』卷四（四九頁）、『唐詩紀事』卷一五（王仲鏞校箋、中華書局、二〇〇七年、五一一頁）参照。
- (13) 周紹良『唐代墓誌彙編』下冊（上海古籍出版社、一九九二年、一五〇八頁）。この石碑は河南省洛陽で出土した。『全唐文補遺』第一輯（一四五～一四六頁）に収録される。また陶敏『全唐詩作者小伝補正』（遼海出版社、二〇一〇年、二四八頁）は、この墓誌銘とその序文を引用して、張諤の生涯について補足しているが、作品の分析等が不足している。
- (14) （清）徐松『登科記考』卷四（趙守儼点校、中華書局、一九八四年、一四八頁）。
- (15) 『通典』卷四〇「職官二二・秩品」（一一〇一頁）。
- (16) 『通典』卷二五「職官七・太常卿」（六九四頁）。
- (17) 『通典』卷三一「職官一三・歷代王侯封爵」（八七一頁）。
- (18) 『旧唐書』卷三「太宗本紀」（五九頁）。
- (19) 『旧唐書』卷四「高宗本紀」（七〇頁）。
- (20) 『旧唐書』卷八「玄宗本紀」（一九九頁）。
- (21) 『旧唐書』卷八「玄宗本紀」（二〇二頁）。
- (22) 『通典』卷四〇「職官二二・秩品五」（一〇九八頁）。
- (23) 『旧唐書』卷八「玄宗本紀」に「開元十三年三月甲午）第十三男灋封為潁王」とある（一八七頁）。
- (24) 『全唐文補遺』第八輯（三秦出版社、二〇〇五年、六二頁）。

- (25) 胡可先『出土文献与唐代詩学研究』(中華書局、二〇一二年、五〇七頁)。
- (26) 本論第一章を参照。
- (27) それぞれ『国秀集』巻中、『搜玉小集』、『才調集』巻九(「明」)毛晋編『唐人選唐詩』、台湾大通書局、一九七三年、一四〇四頁、一五二一頁、七七二頁)参照。
- (28) 楼穎「国秀集序」(『唐人選唐詩』、一三三一〜一三三二頁)参照。
- (29) 『才調集序』(『唐人選唐詩』、一九四頁)参照。
- (30) この聯の詩題と詩句の「踏歌」について、松平本と内閣甲本において詩題・詩句・部立てともに「踏歌」に作るが、国会本では詩題を「踏歌」に作り、詩句・部立てはともに「踏歌」とする。このような文字の混乱は、平安時代の文人が、「踏歌」と「踏歌」の概念と混同していたことから生じたと思われる。
- (31) 『登科記考』巻七(二四〇頁)。
- (32) 『国秀集』巻中(『唐人選唐詩』、一四五二頁)。
- (33) (宋)陳應行『吟窗雜録』巻二六(中華書局、一九九七年、七四一頁)。
- (34) 陳尚君『唐代文学叢考』(中国社会科学出版社、一九九七年、二四〇頁)。
- (35) 傅璇琮『唐人選唐詩新編』(陝西人民教育出版社、一九九六年、七七頁)。
- (36) 『唐会要』巻四「雜録」(四九頁)。なお李範については第一章で詳述した。
- (37) 「陪岐王宅宴」が製作されたのは開元八年であるとの異説もある。霍志軍、安濤『盛唐士人求仕活動与文学以關隴地区為中心』(中国社会科学出版社、二〇一三年、二四四頁)参照。
- (38) 『文苑英華』巻二五〇「寄贈四」(一二六四頁)。

- (39) 『全唐文補遺』第一輯(四三三頁)。この墓誌銘については、程章燦「唐代墓誌叢考」(『古刻新詮』、中華書局、二〇〇九年、一三五～一三八頁)において専門的な考証がなされる。
- (40) 前掲注(39)、一三五頁参照。
- (41) 前掲注(39)、一三七頁参照。
- (42) 『新唐書』卷一九六「秦系伝」(五六〇八頁)、『文苑英華』卷七一六「秦徵君校書與劉隨州唱和詩序」(三七〇三頁)参照。
- (43) 第五八聯と第九一六聯の出典となる詩は、それぞれ『中興間氣集』卷下(『唐人選唐詩』、一〇七九頁)、『文苑英華』卷二七〇、卷二八七(一三六五、一四六一頁)、『才調集』卷八(『唐人選唐詩』、七五二頁)に見られる。
- (44) この聯の典故は、『文苑英華』卷三一五(一六二四頁)と『才調集』卷八(『唐人選唐詩』、七五二～七五三頁)に収録される。
- (45) 明銅活字本の『唐五十家詩集』の『劉隨州集』卷九(上海古籍出版社、一九八一年)参照。
- (46) 儲仲君『劉長卿詩編年箋注』(中華書局、一九九六年、一二五頁)。
- (47) 汪師韓「詩學纂聞」(楊復古輯『昭代叢書広編』卷四一、沈氏世楷堂、一九一九年、三二二頁)。
- (48) 謝海平『唐代詩人与在華外国人之文字交』(文史哲出版社、一九八一年、七三頁)参照。

下篇 奈良・平安朝に伝来した中晩唐の詩歌

第四章 「旧卷常に抄されて外国に将く」——『千載佳句』所収の楊巨源詩を中心として——

一 問題提起

中唐詩人の楊巨源（七五五〜八三〇頃）は、元来作品数が多いことで知られた詩人で、当時は「卷裏詩過一千首（卷裏の詩は一千首を過ぐ）」、そして「詩名往日動長安、首首人家卷裏看（詩名 往日に長安を動かし、首首 人家の裏に看らる）」という評がある。⁽¹⁾ だがその作品は中国本土ではほとんど散逸し、北宋期には僅か一卷分の作品しか残っていないかった。例えば、『新唐書』『芸文志』及び『崇文總目』ともに、「楊巨源詩一卷」と記録している。⁽²⁾ その後、楊巨源の詩歌は目録史料と幾つかの唐詩選集に収録されたものしか残っていない。

その一方で、作品がある程度保存されたものの、海外には伝わらなかった著名な唐代の詩人たちとは異なり、楊巨源の作品は生前からすでに海外に広く伝えられていた。例えば王建の「寄楊十二秘書」⁽³⁾には「新詩欲寫中朝滿、舊卷常抄外國將（新詩写さんと欲して中朝に滿ち、旧卷常に抄されて外国に将く）」とあり、劉禹錫の「酬楊司業巨源見寄」にも「渤海歸人將集去、梨園弟子請詞來（渤海の歸人 集を將て去り、梨園の弟子 詞を請ひ来る）」とある。⁽⁴⁾ また『千載佳句』には楊巨源の七言詩句が十八聯も採録されており（但しこのうち三聯は劉長卿作品、実際に楊巨源の詩句は十五聯）、これは該書に収める唐人の中では七番目に多く、しかもそのうち九聯が『全唐詩』未収の作品である。『千載佳句』にこれほど多くの詩歌が採録されていることは、王建や劉禹錫の彼に対する評価が根拠の

ないものではないことの証しであろう。また日本に伝わった彼の作品に、中国では佚詩となったものが多く含まれているという事実は、大江維時が用いた楊巨源の底本が現在中国の伝本とは系統が大きく異なる版本であった可能性を示しており、さらには楊詩の流传状況について新たな手がかりとなり得る。楊巨源の作品はどのようにして当時の日本に流传したのか。そして、それは当時の東アジア漢字文化圏における書籍流通の実態をどこまで反映しているのか。本章ではこれらの問題について検討する。

二 『千載佳句』所収の楊巨源詩について

まずは『千載佳句』所収の楊巨源詩と『全唐詩』、『全唐詩逸』（以下『詩逸』と略称）とを校勘してみよう。

千載佳句			全唐詩・全唐詩逸			校 語
六二	作品番号	春日	詩題	青門日暖塵光動、 紫陌花晴風色來。	四時部春興	
六二	作品番号	春日	詩題	同	『詩逸』卷上	卷数

四〇〇	三七八	三六〇	三〇〇	二〇四	一八二	一八一
弟拜金吾 僕射子 賀田申イ	送司徒童子 赴舉	和劉員外 赴闕次潼 關作詩イ	遇雪	別薛柳二 イ无員外	寓居	將赴嶺外 留別
文武珂聲疊 街衢燭影侵 寒月、	光彩春風初 轉蕙、 性靈秋水不 藏珠。	鳴鞭秋色詩 情遠、 拂匣寒花釵 力多。	應同谷口尋 春去、 定似山陰待 月歸。	江上月明胡 雁過、 淮南木落楚 山多。	夢中鄉信驚 秋雁、 窓下林聲帶 夜蟬。	内史舊山空 日暮、 南朝古木向 人秋。
人事部慶賀	人事部幼智	人事部將軍	天象部雪	四時部暮秋	四時部秋興	四時部秋興
榮拜金吾 賀田僕射子 弟	送司徒童子	和劉員外赴 闕次潼關作	盧郎中拜陵 遇雪蒙見召 因寄	江州重別薛 六柳八二員 外	寓居	將赴嶺外留 題 蕭寺遠公院
同	同	「釵」を「劍」 に作る。	「待」を「帶」 に作る。	同	同	同
『全唐詩』卷三 三三二	『全唐詩』卷三 三三二	『詩逸』卷上	『全唐詩』卷三 三三二	『全唐詩』卷一 五一	『詩逸』卷上	『全唐詩』卷一 五一
				實際は劉長卿 の詩である。		實際は劉長卿 の詩である。

九〇七	送楊松陵 歸宋汴州	八六四	送王秀才	八四〇	氷イ无	七四八	陪宴	六四五	紫薇	六二六	贈李傅	五六二	永平里 酬盧拱
	新河柳色千株暗、 故國雲帆万里歸。	獨入曉山知露濕、 遠臨秋水愛雲明。		映盤皎潔非開露、 當扇清涼不在風。		歌態曉臨團扇静、 舞容春映薄衫妍。		香壓荊花蝶不飛、 艷欺藤蔓鷺無限、		入院松聲共鶴聞、 搖窓竹色留僧語、		籍通蓮闕秋光迥、 詩答蓬山晚思遥。	
	別離部別意	遊放部秋遊		宴喜部氷		宴喜部歌舞		草木部紫薇		草木部松竹		官省部秘書省	
汴州	送楊松陵歸宋 字)州別業	送王秀才	和人與人分惠 賜氷		邵州陪王郎中 宴		紫薇		贈李傅		永平里酬盧洪		
同	同	「入」を「向」 に作る。	「開露」を「資 月(一作關 露)」、「當」 を「披(一作 當)」に作る。		同	同	同	同	同	同	「迥」を「遍」 に作る。		
『詩逸』卷上	五二 『全唐詩』卷一	『詩逸』卷上	『全唐詩』卷三 三三三		『全唐詩』卷三 三三三		『詩逸』卷上		『全唐詩』卷三 三三三		『詩逸』卷上		
	實際は劉長卿 の詩である。												

一〇四二	寄宣供奉	一院綠錢童子掃、 千竿青玉主人栽。	釈氏部禪居	寄宣供奉	同	『詩逸』卷上	
一〇四五	贈江樓院宣供奉	露凝丹地初疑雨、 煙著紅樓半是霞。	釈氏部禪居	贈紅樓院宣供奉	同	『詩逸』卷上	
一〇五八	題金字經院供奉 養イ上人	空門水定塵埃遠、 真偈金書世界稀。	釈氏部贈僧	贈金字經供養□ 上人	同	『詩逸』卷上	

このように『千載佳句』所収の楊巨源の詩句計十八聯のうち、実にその半数が『全唐詩』未収録の作品である。しかも、『全唐詩』既収録の九聯のうち、四時部秋興第一八一聯、四時部暮秋第二〇四聯、別離部別意第九〇七聯の三聯は、実際には楊巨源の詩句ではなく、劉長卿の作品とする。つまり『千載佳句』において確実に楊巨源の詩句と言えるのはわずか六聯しかない。また市河寛齋は、第一八一聯と第九〇七聯を楊巨源の逸詩として『詩逸』に補録する。さらに『詩逸』が補録する十一聯の詩句は、『千載佳句』の五つの写本との間で字句の異同が幾つかある。ここでは、『全唐詩逸』「徳宗皇帝」の詩句の下に「家藏『千載佳句』、二百年前謄本。誤謬脱落甚多、而無他本可比較（家藏『千載佳句』、二百年前の謄本なり。誤謬脱落甚だ多く、而るに他本比較すべき無し）」という注があることを併せて考えれば、これは市河寛齋が用いた『千載佳句』が現存する『千載佳句』の写本とは別系統の写本だったためであろうか。

『千載佳句』に楊巨源の作品が多く収録されること、またそのうち逸詩が多く含まれていることを考慮すれば、大江維時が活躍した平安中期には既に相当数の楊巨源詩が日本に伝存していたと見るべきである。『千載佳句』に収録される楊巨源の詩句、特に中国には残存しない逸詩について考証することは、楊巨源の作品の日本における流伝状況を把握するのに有用である。以下、『千載佳句』の楊巨源詩句を分類、考証する。

(一) 『全唐詩』に収録されない楊巨源の断句九聯について

四時部春興第六二聯（歷博本欠丁のため松平本に拠る）。句中の「青門」「紫陌」から、これは楊巨源が京城での職に就いていた際に作られたものであることがわかる。

四時部秋興第一八二聯。この詩は『新撰朗詠集』『秋部雁付帰雁』にも収録される。⁽⁵⁾ 詩題の「寓居」及び句中の「夢中鄉信驚秋雁」から、秋に故郷を思い詠んだ作品と思われる。

人事部將軍第三六〇聯。『千載佳句』は詩題を「和劉員外赴闕次潼關作詩イ（劉員外の闕に赴き潼關に次やどれる作（または詩）に和す）」とし、『詩逸』は「和劉員外赴闕次潼關作」とする。ここから、この詩は楊巨源が「劉員外」の「赴闕次潼關作」（或いは「赴闕次潼關詩」）に唱和した作品であることがわかる。「劉員外」は、楊巨源の交遊関係や彼の詩「早春即事呈劉員外」、「和劉員外陪韓僕射野亭公宴」などを考慮するに、恐らく劉禹錫を指すだろう。この詩句が『千載佳句』人事部の將軍に属し、「鳴鞭秋色詩情遠、拂匣寒花釵力多（鞭を鳴らして 秋色 詩情遠く、匣を払ひて 寒花 釵力多し）」と軍人を描写する内容であることから、いずれにせよ「劉員外」は、詩作ができ、かつ軍旅生活の経験がある人物である。

宮省部秘書省第五六二聯。この聯は『千載佳句』宮省部の秘書省に属するため、楊巨源が秘書郎であった時に製作されたものと推定される。『旧唐書』『憲宗本紀下』、唐の趙璘『因話録』卷二「商部」、『唐詩紀事』卷三五等の記

載によれば、楊巨源が秘書郎を務めたのは元和九年（八一四）六月以降であり、太常博士に遷ったのは、「同太常尉遲博士闕下待漏」詩から元和十一年（八一六）頃と考えられる⁽⁷⁾。従ってこの詩の製作時期は元和十年（八一五）頃であろう。また詩題「永平里訓盧拱」の「永平里」は、長安城西南の永平坊を指す。張籍の「題楊秘書新居」に「愛閑不向爭名地、宅在街西最靜坊（閑を愛し名を争ふの地に向はず、宅は街西の最も静かなる坊に在り⁽⁸⁾）」とあるため、楊巨源の秘書郎在官時の自宅もこの長安城西にあったことがわかり、この聯の部類及び詩題とも合致する。詩題に含まれる「盧拱」について、『千載佳句』の松平本、内閣甲本、内閣乙本、国会本は全て「盧拱」に作り、『詩逸』のみ「盧洪」に作る。また『千載佳句』の宮省部禁中には、「盧拱」という作者の詩一聯が収録される。この断句の詩題は「和胡金吾寓直」で、詩句は「万戸歌鐘清禁近、九天星月碧霄寒（万戸の歌鐘 清禁 近く、九天の星月碧霄寒し）」である。では、「盧拱」「盧洪」、果たしていずれの名が正しいのだろうか。まず「盧拱」は、白居易の「酬盧秘書二十韻」や元稹の「酬盧秘書並序」等に登場する人物で、楊巨源にも「寄申州盧拱使君」という詩がある。すなわち「盧拱」は秘書省での勤務経験があり、楊巨源とも交遊関係があった実在の人物なのである。一方、「盧拱」「盧洪」は、管見の限り全く記録が無い。ゆえに「盧拱」及び「盧洪」は「盧拱」の誤りと推断される。

また、この聯の「籍通蓮闕秋光迴」の「迴」字を、『詩逸』は「遍」字に作る。だが歴博本、松平本は「迴」字に「ハルカナリ」と訓を付し、甚だ遠いという意味で読むことから、ここでも『詩逸』が誤ったものと考えられる。

草木部紫薇第六四五聯。詩題を「紫薇」に作り、詩句は「艷欺藤蔓鷲無限、香壓荊花蝶不飛（艷 藤蔓を欺き 鷲限り無く、香 荊花を圧し蝶 飛ばず）」とする。「紫薇」は、唐代、中書省の別名で、中書省の庭にはこの花が植えられていた。楊巨源の官歴と何らかの関係があるだろう。

遊放部秋遊第八六四聯。詩題中の「王秀才」は不明。「獨入曉山知露濕（独り曉の山に入り露濕を知る）」の「入」字を、『全唐詩逸』は「向」字に作る。

釈氏部禅居第一〇四二聯。詩題「寄宣供奉」の「宣供奉」とは、唐の憲宗、穆宗両朝に供奉した詩僧広宣を指す。『唐詩紀事』に「宣以應制詩示樂天。時詔許上人居安國寺紅樓、以詩供奉（宣応制詩を以て樂天に示す。時に詔して上人の安國寺紅樓に居るを許し、詩を以て供奉す）」とあり、また李益の「贈宣大師」に「先皇詔下徵還日、今上龍飛入内時（先皇詔下る徵還の日、今上龍飛ぶ入内の時）」とある。⁽¹⁰⁾とあるので、この詩句「一院綠錢童子掃（一院の綠錢童子掃く）」の「掃」字を、『詩逸』は「拂」字に作る。

釈氏部禅居第一〇四五聯。詩題「贈江樓院宣供奉」の「宣供奉」は一〇四二聯の「宣供奉」と同一人物で、「江樓院」は「紅樓院」の誤りである。『詩逸』は「贈紅樓院宣供奉」とあり正しい。広宣は憲宗の元和九年（八一四）前後に安國寺の紅樓院に移居し、敬宗の宝曆年間（八二五く八二七）に紅樓院を追われたが、文宗の時に再び安國寺に戻った。⁽¹¹⁾元和九年から穆宗の長慶四年（八一四く八二四）とは、まさに楊巨源が都で官職に就いていた時期である。一時期、鳳翔少尹の官職に任じられたこともあったが、在任期間は非常に短かった。恐らくこの「贈紅樓院宣供奉」が創作されたのはこの期間であろう。しかも広宣について、楊巨源には「春雪題与善寺広宣上人竹院」、「和権相公南園閒涉広宣上人」、「送定法師帰蜀、法師即紅樓院供奉広宣上人兄弟」等の詩もあり、二人の親密な交遊関係が窺われる。釈氏部贈僧第一〇五八聯。詩題は「題金字経院供奉上人」（一に「題金字経院供養上人」に作る）とあるが、『詩逸』は「題金字経供養□上人」とする。

（二）『千載佳句』及び中国の文献に見える楊巨源の詩句六聯

天象部雪第三〇〇聯。詩題は「遇雪」で、この詩は『文苑英華』「天部・詠雪雜題」にも「盧郎中拜陵遇雪蒙見召

因寄」という詩題で収録される。この「盧郎中」は、⁽¹³⁾盧虔或いは当時庫部郎中であつた⁽¹⁴⁾盧汀とする説がある。「定似山陰待月帰（定めて山陰の月を待ちて帰るに似たり）」句の「待」字を、『文苑英華』や明の曹学佺『石倉歷代詩選』、『全唐詩』等の諸本は「帶」字に作る。上句「應同谷口尋春去（応に谷口に春を尋ね去るに同じかるべし）」との対句と考えれば、「帶月」とするのがよいだろう。

人事部幼智第三七八聯。詩題は「送司徒童子赴挙」とするが、『唐詩紀事』や王安石『王荊公唐百家詩選』、『全唐詩』では「送司徒童子」とする。「赴挙」とは童子科に赴くことで、代宗の大歴三年（七六八）四月二十五日の敕令により、十歳以下の子供を対象に「習一經兼『論語』『孝經』」。毎卷誦文十科全通者、與出身（一經を習ひて『論語』『孝經』を兼ね。毎卷誦文して十科を全通する者、出身を与ふ）」と規定された。童子科は大歴十年五月に廃止されたが、後に「以童子爲薦者、比比有之。（童子を以て薦と為す者、比比⁽¹⁶⁾之有り）」という現象もある。ここから、『千載佳句』の詩題の方がより詩歌の内容を明示していると言える。

人事部慶賀第四〇〇聯。詩題は「賀田僕射子弟拜金吾」（一作「賀申僕射子弟拜金吾」）、また『王荊公唐百家詩選』と『全唐詩』は「賀田僕射子弟拜金吾」とする。この詩の内容及び『新唐書』「宰相世系表」の記載によれば、「田僕射」は、長慶元年十月に部下に自害を迫られ、「尚書右僕射」を諡られた田布を指し、⁽¹⁷⁾彼の子と兄弟、五人の官職は、詩句に「五侯恩澤不同年、叔姪朱門襮稍連（五侯の恩沢年を同じくせず、叔姪の朱門襮稍連なる）」とあるのに合致する。よって「申僕射」は、「田僕射」の誤りである。

草木部松竹第六二六聯。この聯は詩題、詩句共に『王荊公唐百家詩選』『全唐詩』等との異同は無い。また『新撰朗詠集』⁽¹⁸⁾卷下雜部松にも収録される。

宴喜部歌舞第七四八聯。詩題「陪宴」について、『文苑英華』と『全唐詩』は共に「邵州陪王郎中宴」に作る。『千載

佳句』の詩題はこれを簡略したものであろう。本文については異同は無い。

宴喜部氷第八四〇聯。詩題は「氷」、或いは詩題が無い。『王荊公唐百家詩選』『全唐詩』は共に詩題を「和人与人分惠賜氷」に作る。「和人与人分惠賜氷」とあることから、楊巨源がある人物の詩に唱和したもので、彼が朝廷に仕官していた時期に製作されたことが明らかである。この聯の詩題だけでなく、詩句中にも異同がある。例えば「映盤皎潔非開露（盤を映して皎潔 露を開くに非ず）」の「開露」は、『王荊公唐百家詩選』は「開露」に作り、『全唐詩』は「資月（一作関露）」に作る。「関露」、または「資月」の方が「開露」より文意が通る。恐らくは『千載佳句』が誤ったのだらう。また「當扇清涼不在風（扇に當たりて清涼 風に在らず）」の「當扇」を、『全唐詩』は「披（一作當）扇」に作る。「當扇」と「被扇」はほぼ同じ意味である。

(三) 楊巨源の作品として誤入された劉長卿の詩句三聯

四時部秋興第一八一聯。詩題を「將赴嶺外留別」に作る。『文苑英華』卷二三五は劉長卿の作とし、詩題を「將赴嶺外留題蕭寺遠公院寺即梁朝蕭内史創」とする。「梁朝蕭内史」は、「出爲信威將軍、豫章内史（出でて信威將軍、豫章内史と爲る）」とある梁の蕭穎達、「蕭寺遠公院」は蕭氏の洪州の旧宅を指す。乾元中、劉長卿は南巴に左遷され、洪州で待機を命ぜられたことから、「將赴嶺外」と呼ばれる。⁽¹⁹⁾『文苑英華』の全文は以下のとおり。

竹房遙閉上方幽

竹房 遙かい閉づ 上方の幽

苔蘚集作徑蒼蒼訪昔游

苔蘚 蒼蒼として 昔游を訪ふ

内史舊山空日暮

内史の旧山 空しく日暮

南朝古木向人秋

南朝の古木 人に向かひて秋なり

天香月色同集作空僧室

天香の月色 僧室に同じく

葉落猿啼訪集作送、又作傍客舟

葉落ち 猿啼 客舟に訪ふ

此去播遷明主意

此の去、播遷するは明主の意

白雲何事苦集作欲相留

白雲 何事ぞ相留まるを苦しまん

句中の小注の「集」とは、『文苑英華』を校訂した際、中国で通行していた劉長卿の別集を指す。「集作径」、「集作送」、「又作傍」などの校語からも、劉長卿集には当時に伝本が多数存在したことがわかる。それにしても、『文苑英華』の編者も校訂者もこの詩を劉長卿の作品としており、大江維時だけが誤って楊巨源の詩としたのである。恐らく大江維時が参照した底本は、劉長卿の作品を誤って収録した楊巨源の別集か、或いは劉長卿と楊巨源の作品を共に収録する唐詩選集の類だったと思われる。いずれにしても、『文苑英華』成立以前に既に複数の楊巨源作品の鈔本が存在していたことを意味することになる。

四時部暮秋第二〇四聯。詩題は「別薛柳二員外」、一に「別薛柳員外」に作る。これは原題「江州重別薛六柳八二員外」⁽²⁰⁾を簡略化したもので、『千載佳句』は「薛」字を「薛」字に誤る。江州は唐代では江南西道に属し、治所は今の江西省九江市にある。「薛六」は薛弁のことで、彼は江州刺史に任じられたことがある。また「柳八」は柳渾を指し、⁽²²⁾当時は江西觀察使であった。⁽²³⁾この詩は大暦十一年(七七六)、劉長卿が睦州へ左遷される途中で詠まれたものである。⁽²⁴⁾別離部別意第九〇七聯。詩題は「送楊松陵歸宋汴州」。また『劉隨州集』は詩題を「送楊於陵歸宋州別業」とし、『全唐詩』は「送楊於陵歸宋汴(一無此字)州別業」とする。「楊於陵」について、『新唐書』「楊於陵傳」に「十八擢進士、調句容主簿(十八に進士に擢し、句容主簿に調せらる)」とある。この詩は建中四年(七八三)或いは興元元年(七八

四)、楊於陵が句容主簿の任務を終えて北に戻る際に創作された⁽²⁶⁾。なお「楊松陵」は「楊於陵」の誤りである。

以上、『千載佳句』所収十八聯の楊巨源の詩句について具体的な分析を試みた。これらのことから以下のことが指摘できる。

まず、十八聯の詩句の詩題のうち、五箇所に「□イ」即ち「一作□」の注記が見える。これは大江維時による注か、もしくは鎌倉時代の文人が後に補充したものであるが、いずれにせよ、これは平安鎌倉時代の日本では、中国の文献とは別系統の書を底本とする楊巨源詩が相当数保存されていたことを物語っている。

次に、第(一)部分の楊氏の佚詩句には、四時部春興第六二聯、四時部秋興第一八二聯、草木部紫薇第六四五聯、遊放部秋遊第八六四聯等の情報はやや簡単に過ぎるものの、その他の聯の詩題や詩句内容が楊氏の生涯や仕官状況と符合しており、楊巨源の逸詩であることには間違いない。これらは楊巨源の生涯や事蹟等の研究を補完するに足るものであろう。

また、第(二)部分の楊巨源の詩句には、第六二六聯以外の五聯、特にその詩題において、中国で通行する各種唐詩選集とは大幅な異同が見られる。各選集間では異同はほとんど存在せず、『千載佳句』の異同だけが孤立しているのである。このことも、大江維時が用いた底本が諸本の選集と系統を異にすることを示しているのである。

最後に、第(三)部分は楊巨源の詩歌における誤入問題に関するものである。これに関しては宋代にも既に言及⁽²⁷⁾があり、また近代においても少なくとも⁽²⁸⁾指摘があり、複数の唐詩選集において、劉長卿、楊衡、錢起、劉禹錫、武元衡、梁鋗など多くの詩人が誤って楊巨源詩として収録されていることがわかっている。だが『千載佳句』で誤⁽²⁹⁾収されるのは劉長卿のみで、ここでも『千載佳句』は他本とは異なる傾向を見せており、新たな視点を提供する

資料として極めて貴重である。

三 楊巨源作品の流伝状況

『千載佳句』所収の楊巨源詩句の文献の来源は確定できないが、これらの詩句は、中国で通行する諸家の選集とは系統の異なる詩集であったと考えられる。これは楊巨源の作品の流伝状況の解明に幾つかのヒントを与える。本章では以下、この問題点について考察する。

(一) 楊巨源の作品が日本に伝えられたことに関する問題

楊巨源は生前より高い名声を得ており、特に七言律詩を得意とした。元稹の「授楊巨源郭同玄河中興元少尹制」では、楊巨源の作品を「詩律鏗金、詞鋒切玉。相如有凌雲之勢、陶潛多把菊之情（詩律 金を鏗^うち、詞鋒 玉を切る。相如 凌雲の勢有り、陶潛 把菊の情多し）」と称する。⁽³⁰⁾ また元和九年から十二年（八一四〜八一七）に勅撰された『御覽詩』には彼の作品十四首（五言詩五首、七言詩九首）が採録されている。⁽³¹⁾ これらは楊巨源の当時の詩壇における評価の高さを証明していよう。また元和十三年撰「唐故塩鉄転等使河陰留後巡官前徐州蕪県主簿弘農楊君墓誌銘並序」では、楊巨源が「今之鮑昭（今の鮑昭）」で、「咸所推服、莫敢敵偶（咸^{みな} 推服する所、敢えて敵偶する莫し）」と評した。「鮑昭」は、六朝の詩人の鮑照である。鮑照は「上挽曹、劉之逸歩、下開李、杜之先鞭（上に曹、劉の逸歩を挽き、下に李、杜の先鞭を開く）」と賞賛された南朝宋の詩人であり、樂府と七言歌行を得意として、「俊爽絶倫（俊爽たること絶倫たり）」と称された。⁽³⁴⁾ つまり撰者は楊巨源を鮑照に喩えることで、楊巨源が文学に秀で、特に樂府を得意としていたことを表現しているのである。楊巨源の作品のこうした優れた点が、彼の作品が日本に

伝えられ、『千載佳句』に収録された要因の一つなのであろう。

楊巨源の作品を日本に伝えた人物について明記した史料は無いが、楊巨源が文壇で活躍していたのとはほぼ同じ時期、学問僧の空海と最澄が入唐している。空海は自ら当時の越州節度使に手紙を送り、「三教之中、經律論疏傳記、乃至詩賦、碑銘、卜醫、五明所攝之教、可以發蒙濟物者、多少流傳遠方（三教之中、經律、論疏、伝記、乃至は詩賦、碑銘、卜医、五明所撰の教の、蒙を發ひらき物を濟すくふべき者、多少遠方に流伝したまへ）」と述べて仏典（35）だけでなく貴重な漢籍の収集に尽力した。だが現存する資料の中に、空海が日本に持ち帰った書物として楊巨源に関するものは見えない。また『文鏡秘府論』や『性靈集』では、朱千乘など決して有名とは言えない詩人の作品を引用するが、楊巨源の作品については引用した形跡が無い。このように、楊巨源詩の日本渡来の経緯については、日本側の文献にも記録がない。ただし、王建の詩句「旧卷常に抄されて外国に将く」、及び劉禹錫の詩句「渤海の婦人集を将て去り」は、重要な手懸かりとなる。

王建 「寄楊十二秘書（楊十二秘書に寄す）」

新詩欲寫中朝滿 新詩 写さんと欲して中朝に満ち

舊卷常抄外國將 旧卷 常に抄されて外国に将く

閑出天門醉騎馬 閑かに天門を出いでて、酔ひて馬に騎る

可憐蓬閣秘書郎 憐あわれむべし 蓬閣の秘書郎

劉禹錫 「酬楊司業巨源見寄（楊司業巨源の寄せらるるに酬ゆ）」

壁雍流水近靈臺

壁雍の流水 靈台に近し

中有詩篇絶世才

中に有りうち 詩篇絶世の才

渤海歸人將集去

渤海の歸人 集を將て去り

梨園弟子請詞來

梨園の弟子 詞を請ひて來る

王建の詩題「楊十二秘書に寄す」とその詩句「新詩 写さんと欲して中朝に満ち、旧卷 常に抄されて外国に將く」から、遅くとも楊巨源が秘書郎を務めていた元和九年（八一四）には、彼の作品がもてはやされて、「旧卷」も含め転写されて外国に伝えられたことが分かる。また劉禹錫の詩題「楊司業巨源の寄せらるるに酬ゆ」とその詩句「渤海の歸人 集を將て去り、梨園の弟子 詞を請ひ來る」によれば、楊巨源の別集を渤海人が持ち帰ったのは、彼が国子司業の職に就いていた頃、即ち穆宗の長慶四年（八二四）以前である。⁽³⁶⁾

さらに以下、この王建及び劉禹錫の二人が述べた内容が、楊巨源詩の日本伝播とも関係があるのかどうか、当時のアジア漢字文化圏における漢籍の流通状況と合わせて探ってみたい。

留学僧空海が帰国した元和元年、即ち平城天皇の大同元年（八〇六）から文宗の開成三年即ち仁明天皇の承和五年（八三八）までの二十二年間、日本から遣唐使は全く派遣されていない。しかしこの頃の朝廷、特に嵯峨天皇（八〇九〜八二三在位）と淳和天皇（八二三〜八三三在位）は、唐の文化に深く傾倒しており、渤海使節も従前より頻繁に日本を訪れている。⁽³⁷⁾ そのため日本に伝来した唐の書籍は、日本の遣唐使が直接持ち帰ったものよりも、渤海使らによってもたらされたものが多かったはずである。平安時代の朝廷は、渤海人がもたらした漢籍を熟読し活用していた。例えば『類聚三代格』に拠れば、文徳天皇天安二年（八五八）に來日した渤海使の烏孝慎は『宣明曆』を献

上し、その二年後、朝廷は以前遣唐使らが持ち帰った『大衍曆』と『五紀曆』を廃し、新たにこの『宣明曆』を施行している。さらに別の例を挙げると、弘仁三年（八一二）二月、平安京の神泉苑で初めて行われた花の宴において、嵯峨天皇と小野岑守は、白居易が元和四年（八〇九）に作った「新樂府」をもとに「落花篇」を作っている。白居易の「新樂府」がこれほど早い時期に日本へ伝来したことに關しては、「この頃、遣唐使の派遣はないので、八〇九年の第一五次か八一〇年の第一六次渤海使、八一一年の日本から派遣した渤海使のいずれかによりもたらされた可能性がある」との指摘がある⁽³⁸⁾。また平安時代には、渤海商人らが持ち込んだ唐の文物も大いに歓迎された。当時の日本人は先を争って商人からこれらを買ひ、その熱狂ぶりは太政官がこれを禁制する通達を出すほどであった⁽³⁹⁾。このように当時の渤海は、唐の書物や文物の日本伝来の仲介として重要な役割を担っていたのである。そして、楊巨源が文壇で名声を博し、「渤海の婦人集を將て去り」とあるように、彼の作品が国外に伝播していったのは、まさにこの時期と見事に合致する。以上の根拠から、楊巨源の作品或いは別集は、渤海を経由して日本に伝わったと推測されるが、確たる証拠を欠くため、ここでは一つの仮説として提示しておくこととする。

（二）楊巨源の「集」の流传についての問題

以上、「渤海の婦人集を將て去る」という問題を考察してきた。またこの句の「集」から、楊巨源の在世当時からすでに彼の別集は存在していたと考えられる。しかし、この楊巨源の「集」の問題については、更に検討すべき点がある。

楊巨源の「集」については、『新唐書』『芸文志』、『崇文總目』、『遂初堂書目』、『宋史』、『芸文志』、『郡齋讀書志』、『直齋書錄解題』に記載があり、以下の表のようにまとめられる。

楊巨源集		引語	出典
一卷本	「楊巨源詩一卷」	『新唐書』卷六〇「芸文志」	
	「楊巨源詩一卷」	(北宋)李昉等『崇文總目』卷一二	
	「楊巨濟詩一卷」(晁氏注・袁本「源」訛作「濟」)	(南宋)晁公武『郡齋讀書志』卷一七	
	「楊巨源詩一卷」	(南宋)鄭樵『通志』卷七〇	
	「楊巨源詩一卷」	(元)馬端臨『文獻通考』卷二四二「經籍考」	
	「楊巨源詩一卷」	(元)脱脱『宋史』卷二〇八「芸文志」	
	「楊少尹集五卷…第三卷末二十餘篇、有目無詩」	(南宋)陳振孫『直齋書錄解題』卷一九	
卷数不詳	「楊巨源集」	(南宋)尤袤『遂初堂書目』「別集類」	

ここから、楊巨源の別集には一卷本と五巻本の二つの説があることが分かる。『直齋書録解題』は「楊少尹集五巻」とし、『遂初堂書目』は巻数の記載がなくただ「楊巨源集」とする。その他は全て「楊巨源詩一卷」である。

まずは、「楊巨源詩一卷」について考えたい。この一卷本「楊巨源詩」は、恐らく楊巨源の詩集の本来の書名ではなく、散逸した後の残巻を指すものと思われる。即ち「楊巨源詩一卷」とは、楊巨源の残存する詩が当時計一卷あったことを意味する。『全唐詩』卷三三三の楊巨源の小伝の注に「集五巻、今編詩一卷」とあるのがこの傍証となろう。つまり上述の資料のうち、楊巨源の詩が「集」であったことを示すのは、『直齋書録解題』と『遂初堂書目』のみで

ある。尤も『遂初堂書目』は別集の巻数を記載していないため、ここでは『直齋書録解題』の記述が最も重要な資料となる。さて、『直齋書録解題』の記述から、少なくとも南宋期には五巻本の楊巨源集が存在していたことが分かる。また『直齋書録解題』は続けて「第三巻末二十餘篇、有目無詩（第三巻末二十餘篇、目有るも詩なし）」と注を付しており、編者の陳振孫がこの五巻本『楊少尹集』を実際に目にしていたことは間違いないであろう。朱熹『晦庵集』「跋溪上翁集」に「楊少尹集」という書名が見え、さらに清の席啓寓編『唐詩百名家全集』（覆宋刊本）に『楊少尹詩集』とあることも、『楊少尹集』という書の存在を裏付ける。

ところで、これらは『千載佳句』所収楊巨源詩の来源とどのような関係があるのか。

本章のこれまでの考証により、『千載佳句』の楊巨源詩と中国で通行する一卷本「楊巨源詩」との間には多くの異同が確認される。従って、大江維時が参考した底本は、一卷本「楊巨源詩」の系統ではないと断言できる。また五巻本『楊少尹集』の場合について楊巨源作品が甚だしく散逸した状況は、『千載佳句』に楊氏の逸詩を多く含むのと極めて似ているが、中国で早くに散逸し、陳振孫以降は言及されていない。確かに、『千載佳句』に残存する楊巨源の詩句と、散逸した五巻本『楊少尹集』との関係については未解明な点が多い。それでもなお、『千載佳句』所収の楊巨源詩は彼を研究する上での極めて貴重な資料と言えるのである。

四 大江家と楊巨源の作品との関係

楊巨源の作品の日本における流传を検証するにあたり、大江維時の子孫大江匡房が撰した『江談抄』は注目に値する。『江談抄』には、維時の従兄である大江朝綱の「送残春」詩の「落花狼藉風狂後、啼鳥竜鐘雨打時（落花狼藉

風狂の後、啼鳥 竜鍾雨打つの時」を収録するが、合わせて「楊巨源詩、有狼藉龍鐘爲對之詩云々（楊巨源の詩に、狼藉龍鐘 對と爲すの詩有りて云々）」と注が付される⁽⁴⁰⁾。この注は大江朝綱の「送残春」詩が楊巨源の詩の影響を受けていることを示すものである。大江匡房が大江朝綱の詩句に注解を加えていることから、匡房が「狼藉」と「龍鍾」を對句とする楊巨源の律詩を確かに読んだことがあると考えられる。しかし、現存する楊巨源作品には、大江匡房が言及したような詩は見えない。唯一、「辭魏博田尚書出境後、感恩恋得、因登藁臺（魏博の田尚書を辭して境を出でた後、恩を感じ得を恋ふ、因りて藁臺に登る⁽⁴¹⁾）」詩に「龍鍾」という語彙があるのみである。この「龍鍾」は、首聯「薦書及龍鍾、此事鏤心骨（薦書 竜鍾に及び、此事 心骨を鏤す）」において「狼藉」と對句をなさないので、匡房が示したものではない。ここから、匡房が参照した楊詩の底本が、中国に残存する書籍とは異なり、少なくとも一巻本「楊巨源詩」ではなかったと判断できる。匡房が参照した文献が、五巻本「楊少尹集」或いは楊巨源の作品を含む唐詩選集であるか否かについては、判別し難い。しかし大江維時が多くの詩句を採録し、大江朝綱の詩作に影響を与え、更には大江匡房が注釈に引用していることから、大江家が楊巨源の作品に親しんでいたと思われる。

ところで、『日本国見在書目録』には楊巨源の別集に関する記述がない。このことから、楊巨源の別集も散詩も、遅くとも冷泉院の失火時期には、天皇家の御文庫には収蔵されていなかったことが分かる。一方『日本国見在書目録』より遅れて成立した『千載佳句』と『江談抄』には楊巨源の詩が見えることから、楊巨源の別集或いは楊詩を収める選集が大江家には伝わっていた可能性が指摘できる。

大江家は、平安時代において学問で名を成した一族で、その多くが漢学を以て天皇の侍読となつた⁽⁴²⁾。ここから、大江家は漢籍の蒐蔵や宣講等と密接に関わっていたと思われる。白河天皇の承暦二年（一〇七八）に、江家文庫が設立され、貴重な内外典籍万巻余を蒐集したが、近衛天皇の仁平三年（一一五三）四月十五日に火災に遭い、蔵書の

ほとんどは焼失してしまった。このことについて、『本朝世紀』「近衛天皇」には「未刻五條坊門南烏丸東有火災……又江家十代之書倉同遭此殃（未刻五條坊門南烏丸東 火災有り……）又た 江家の十代の書倉 同く此の殃に遭ふ」とあり、『兵範記』仁平三年四月にも「東方有火……五條坊門以南、六條以北、東洞院以西、西洞院以東、皆以焼亡……就中樋口町尻江家文庫、不能開闔、萬巻都書、片時爲灰了。是朝之遺恨、人之愁悶也。（東方に火有り……五條坊門より以南、六條より以北、東洞院より以西、西洞院より以東、皆以て焼亡す……就中 樋口町尻の江家文庫、開闔する能はず、万巻の都書、片時に灰と爲る。是朝の遺恨、人の愁悶なり）」とあり、また『百練抄』「近衛天皇」にも「四月十五日。焼亡。其中因幡堂、祇園大政所、法家千草文倉爲灰燼。數万巻書一時滅。（四月十五日。焼亡。其中の因幡堂、祇園大政所、法家千草文倉 灰燼と爲る。数万の巻の書 一時に滅す）」とある。なお、この火災以降に成立した日本の文献には、中国では見えない楊巨源の詩作についての言及は全くない。おそらく楊巨源の作品は江家文庫の消滅とともに失われてしまったのであろう。

まとめ

以上、遅くとも平安初期には日本に伝来していた楊巨源の作品について、『千載佳句』所収の十八聯の詩句を手懸りに考察してきた。これらの楊巨源詩は、中国で通行していた一卷本の「楊巨源詩」とは全く異なるものである。また日本に伝来した経緯には、渤海人が仲介者となって関与していた可能性が指摘できる。大江維時が参照した文献は、この原本或いは伝鈔本と考えられる。楊巨源の詩は大江維時が『千載佳句』に引用して以降、平安後期の大江匡房の頃まで、確実に日本で読まれていたのである。

- (1) それぞれ張籍の「題楊秘書新居」(徐礼節、余恕誠校注『張籍集繫年校注』卷六、中華書局、二〇一一年、六八二頁)、「送楊少尹赴鳳翔」(『張籍集繫年校注』卷四、四八三頁)に拠る。
- (2) 『新唐書』卷六〇「芸文志」、『崇文總目』卷一二。
- (3) 王建「寄楊十二秘書」(尹占華校注『王建詩集校注』卷八、巴蜀書社、二〇〇六年、三一九頁)。
- (4) 劉禹錫「酬楊司業巨源見寄」に「壁雍流水近靈台、中有詩篇絕世才。渤海婦人將集去、梨園弟子請詞來。」とある(瞿蛻園箋證『劉禹錫集箋證』外集卷五、上海古籍出版社、一九八九年、一三三〇頁)。
- (5) 藤原基俊『新撰朗詠集』卷上「秋」(松田武夫解説『新撰朗詠集「梅沢本複製」』、古典文庫、一九六三年、一頁)。
- (6) 楊巨源の詩歌の中には一部自注があり、さらにこの聯は宮省部の秘書省類に属すことから、大江維時がこれらの注を参照した可能性が高い。
- (7) 傅璇琮『唐才子伝校箋』第二冊(中華書局、一九八九年、四〇七頁)参照。
- (8) 『張籍集繫年校注』卷六(六八二頁)参照。また賈島「楊秘書新居」にも「城角新居鄰静寺、時従新閣上経楼。南山泉入宮中去、先向詩人門外流」(『全唐詩』卷五七四、中華書局、一九六〇年、六六八八頁)とある。
- (9) 計有功撰、王仲鏞校箋『唐詩紀事校箋』卷七二(中華書局、二〇〇七年、二三九三頁)参照。
- (10) 『全唐詩』卷二八三(中華書局、一九六〇年、三二三〇頁)参照。
- (11) 白居易が元和十年(八一五)に創作した「広宣上人以応制詩見示因以贈之詔許上人居安国寺红楼院以詩供奉」

- (朱金城『白居易集箋校』卷一五、上海古籍出版社、一九八八年、八八九頁)参照。
- (12) 張籍「贈広宣師」に「自到王城得幾年、巴童蜀馬共隨緣。兩朝侍從當時貴、五字声名遠處傳。旧住紅樓通内院、新承墨詔賜齋錢。閑房暫喜居相近、還得陪師坐竹邊。」とある。(『張籍集繫年校注』卷四、四四七頁)。
- (13) 吳汝煜『唐五代人交往詩索引』(上海古籍出版社、一九九三年、一一七四頁)。
- (14) 吳汝煜、胡可先『全唐詩人名考』(江蘇教育出版社、一九九〇年、三〇二頁)と胡可先、魏娜「唐代詩人事跡新證」(『浙江大學學報』(人文社会科学版)、二〇一〇年)参照。
- (15) 本章が参考とするのは静嘉堂文庫所蔵で非公開の影印本『王荊公唐百家詩選』である。
- (16) 『唐會要』卷七六「貢举中・童子」(中華書局、一九五五年、一三九九頁)。
- (17) 『全唐詩人名考』(三〇五頁)参照。
- (18) 梅沢本『新撰朗詠集』には、詩題無し(八六頁)。慈円筆写本『新撰朗詠集』には、詩題を「贈李伝」と作る(下冊、廿四頁)。「伝」は「傳」の誤り。
- (19) 陳貽焮『增訂注釈全唐詩』卷一四〇(文化文芸出版社、二〇〇一年、一一七〇頁)。
- (20) 『劉随州集』卷九(明銅活字本『唐五十家詩集』第六冊、上海古籍出版社、一九八一年、三三二七頁)。
- (21) 『旧唐書』卷四〇「地理志」(一六〇八頁)。
- (22) 劉乾「劉長卿詩雜考」(『文獻』第一期、一九八九年)。
- (23) 『增訂注釈全唐詩』卷一三六(一一〇六頁)と卷一四〇(一一六七頁)。
- (24) 儲仲君『劉長卿詩編年箋注』(中華書局、一九九六年、四〇八頁)。
- (25) 『劉随州集』卷九(『唐五十家詩集』第六冊、三三四四頁)。

- (26) 『劉長卿詩編年箋注』(四八八頁)。
- (27) 宋の王懋『野客叢書』に「唐人一詩見兩處刊者甚多。如……「賃宅得花饒、初開恐是妖」。此一詩既見楊巨源集、又見王建集」(王文錦点校『野客叢書』卷二八、中華書局、一九八七年、三二二頁)とある。
- (28) 佟培基『全唐詩重出誤収考』(陝西人民教育出版社、一九九六年、二九七〜二九九頁)、佐宏「楊巨源誤重詩考弁」(『求索』第八期、二〇〇五年)など。
- (29) 市河寛斎は第一八一聯と第九〇七聯の劉長卿の詩句のみを楊巨源の逸詩句として『詩逸』に収録し、同じ劉長卿の詩作である第二〇四聯については採録していない。
- (30) 『文苑英華』卷四〇六(中華書局、一九六六年、二〇六二頁)。
- (31) 傅璇琮『唐人選唐詩新編』(陝西教育出版社、一九九六年、二五〇〜二五二頁)。
- (32) 周紹良『唐代墓誌彙編』下冊(上海古籍出版社、一九九二年、二〇三一頁)。
- (33) 胡応麟『詩藪』外編卷二(中華書局、一九五八年、一四三頁)参照。
- (34) 『玉臺新詠』卷四(吳兆宜注、中州古籍出版社、一九九一年、八〇頁)。
- (35) (日)空海著『遍照發揮性靈集』卷五「与越州節度使求内外経書啓」(渡辺照宏等校注『三教指帰 性靈集』、『日本古典文学大系七一』、岩波書店、一九六五年、二七七頁)。
- (36) 韓愈の「送楊巨源少尹序」に「國子司業楊君巨源方以能詩訓後進。一旦以年滿七十、亦白丞相去歸其郷」と記される。この序文は長慶四年には作られた(劉真倫、岳珍校注『韓愈文集彙校箋注』卷一一、中華書局、二〇一〇年、一一七四頁)。このことから、楊巨源が國子司業の任を終えた時期が推断できる。
- (37) 例えば、嵯峨天皇大同四年(八〇九)と弘仁元年(八一〇)に渤海使高南容らは二度来日し、弘仁五年(八一四)

に渤海国使らが出雲国に到達した。また弘仁九年(八一八)には渤海使慕感徳らが、弘仁十年(八一九)には渤海大使李承英らが、弘仁十二年(八二二)には渤海国使王文矩らがそれぞれ来日している。

(38) 山口博「宇多・醍醐朝の宮廷文学と東アジア」(仁平道明編『王朝文学と東アジアの宮廷文学』、竹林舎、二〇〇八年、一九九頁)。

(39) 『類聚三代格』卷一八「応禁交関事」に「蕃客売物私交関者、法有恒科、而此間之人、心愛遠物、争以貿易、宜嚴加禁制、莫令更然。若違之者百姓決杖一百、王臣家遣人員、禁使者言上、国司阿容及自買、殊処重科、不得違犯」とある。

(40) 大江匡房著『江談抄』卷四(川口久雄、奈良正一『江談証注』、勉誠社、一九八四年、六三四頁)。

(41) 『文苑英華』卷三二三「詩・居処三・台」(一六一二頁)。

(42) 例えば、『江吏部集』卷中には「夫江家之為江家、白樂天之恩也。故何者。延喜聖代、千古、維時父子共為文集之侍読。天曆聖代、維時、齊光父子共為文集之侍読。天祿御官齊光、定基父子共為文集之侍読」とある。

第五章 『千載佳句』所収の中晩唐詩人について

『千載佳句』に収録される詩人は、初盛唐時期の詩人十数名を除いて、残りは全て中晩唐の詩人である。彼らの作品は、宋代以降に刊本として流伝したものが多く、ところが『千載佳句』は、刊本以前、すなわち鈔本を底本としており、収録作品の中にはすでに中国では逸詩となつてゐる作品も多く、また仮に中国に残つてゐる作品であっても、現在の通行本とは大きく文字の異同がある場合があり、『千載佳句』の写本としての文献的価値は極めて高い。この書を用いることにより、従来考証が難しかった詩人について、その経歴の情報を明らかにすることができるのであろう。また『千載佳句』の収録作品を検証することで、当時の唐詩の伝播状況について考察することも可能となる。唐詩の流伝に関してはわずかながら先行研究があるが、史料の散佚が激しく、これまで大きな進展が見られなかった。本章では、新たに出土した墓誌の資料等を用い、『千載佳句』の生平未詳の数名の詩人について検討し、その上でこの書に収められる中晩唐詩人の作品の特徴について分析する。『千載佳句』収録作品のおよそ半数が白居易の詩であるが、白居易についてはすでに十分な先行研究があり、本章では詳述しない。⁽¹⁾

一 賀蘭遂について

賀蘭遂に関しては、中国の文献には全く記録が無い。しかし『日本国見在書目録』に「賀蘭遂集二（巻）」とあり、また『千載佳句』に彼の詩が十二聯収録されており、これは同書に収録される詩人の中で十一番目に多い収録数である。なお、『千載佳句』所収の十二聯と重複して、『和漢朗詠集』に二聯、『新撰和漢朗詠集』にも三聯が収

録される。日本の古文献に収録されることから、賀蘭遂は少なくともある程度文名のあった詩人と考えられる。しかし彼の生涯や官途などは中国側の文献には何も記録が無く、このような資料的限界のため、従来は生平未詳とされてきた。例えば、『唐詩大辞典』⁽²⁾に「賀蘭遂、一作賀蘭暹、誤。生平不詳。『見在書目録』著録其集二卷、已佚。『全唐詩逸』収其詩一一聯、皆録自日本大江維時編『千載佳句』と、また『中国文学家大辞典・唐五代卷』に「(世次不詳)「遂」一作「暹」。曾北遊遼陽、餘不詳。『日本見在書目録』著録其集二卷、當爲晚唐以前人。日人大江維時編『千載佳句』、録其詩多達十一聯、『全唐詩逸』卷中皆據以收入」と簡単な説明があるのみである。しかし、近年新たに出土した考古文献の増加に伴い、この説明は修正すべきと考えられる。

洛陽新安県の千唐誌齋に收藏される碑刻のうち、賀蘭遂を墓主とした「唐故河南賀蘭府君(遂)墓誌銘并序」がある。⁽⁴⁾これに『千載佳句』の詩句を加えると、彼の生涯を解明する手がかりを得られると思われる。まずこの墓誌銘を分析する。

公諱遂、字德仁、其先河南郡人也。自甲族分派、因家於河南、至今爲河南之盛族。公之曾祖、祖、從宦他邑、後因羯胡擾亂中原、離異鄉、官諱茲文不載。公之德行、今略而言焉。公自弱冠、稟受嚴訓、長於義方、恂恂閭里、孝悌不虧、瑰資璨然、爲當代之所稱。至於中壽、篤信好學、不以浮名構身、不以小利爲動。或尋道侶、或訪德朋、優於是、樂於是。公之行、直而不可屈。公之德、清而不可汚。其餘時機風俗、實可謂剛柔相濟。公之事親、孝行著於九族。公之友朋、德義布於四海。然諾必行、車服共弊。奈何旻蒼不祐、神理時然、積善何徵、降禍於哲人。至元和三年九月六日、寢疾終於河陽別業、享年五十有三。夫人廣平程氏、執君巾櫛卅餘春。事姑不虧於婦禮、爲姑每訓以母儀。自孀孤撫幼、節比恭姜、育視諸孤、恩威備矣。至寶曆元年七月十六日、終於河

陽別業、享年六十二。剋用其年十一月十五日、合拊於河陽縣豐平郷徐村南原公之舊塋、禮也。有子四人。長子同十將、試太子通事舍人邴、次子操、幼子諷等。居哀禮備焉。號哭相託、將用敘撰、以虞陵谷之有遷而已矣。乃爲銘曰…天生異人兮鯁概不群、崇德行兮迴出人倫。不侑浮名兮自邀自逸、與朋友兮信義必聞。逸翮翔雲兮鱗躍波、川竭雲委兮將奈何？滔滔逝水兮無返期、月照孤墳兮空峨峨。日黯原隰兮天將暮、悲風慘均兮壠頭樹。適是丘封兮保千秋、勒茲金石兮永爲固。

公諱は遂、字は徳仁、其の先河南郡の人なり。甲族より分派し、因りて河南に家し、今に至りて河南の盛族と爲れり。公の曾祖、祖、他邑に従宦し、後に羯胡の中原を擾乱するに因り、異郷を離れ、官諱茲文に載せず。公の徳行、今略して焉に言ふ。公は弱冠より、嚴訓を稟受し、義方に長じ、閭里に恂恂とし、孝悌虧けず、瑰資は璨然として、当代の称する所と爲る。中寿に至り、信に篤く学を好み、浮名を以て身を構へず、小利を以て動を爲さず。或は道侶を尋ね、或は徳朋を訪れ、是に優たわむれ、是に樂しむ。公の行、直くして屈すべからず。公の徳、清くして汚すべからず。其の余の時機風俗、實に剛柔相濟たすくと謂ふべし。公の親に事ふるや、孝行九族に著あらはる。公の朋に友たるや、徳義四海に布あまねし。然して諾れば必ず行き、車服共に弊つかる。奈何ぞ 旻蒼 祐けず、神理時に然らざる、善を積むも何の徴あらん、禍を哲人に降す。元和三年九月六日に至り、寢疾にして河陽別業に終はる、享年五十有三。夫人広平の程氏、君の巾櫛を執ること四十余春。姑に事へ婦の礼に虧かかさず、姑と爲り毎に訓ゆるに母儀を以てす。孀孤となりてより幼を撫し、節は恭姜に比び、諸孤を育視し、恩威備はれり。宝曆元年七月十六日に至り、河陽別業に終り、享年六十二。剋とぎに其の年の十一月十五日を用て、河陽縣豐平郷徐村南原の公の旧塋に合拊す、礼なり。子四人有り。長子同十將、試太子通事舍人の邴、次子操、幼子諷等。哀に居りて礼備はる。号哭して相託し、將に敘撰を用て、以て陵

谷の遷有るを虞ふるのみ。乃ち銘を為りて曰く「天生の異人、鯁概として群れず、徳行を崇むるに廻かに人倫を出ず。浮名にしたが侷はず、自邀自逸たり、朋友に与し信義必ず聞こゆ。逸翮雲を翔け、鱗波に躍り、川竭き雲委なえ、將に奈何せんす。滔滔たる逝水、返る期無く、月孤墳を照らして空しく峨峨たり。日原隰に黯く、天將に暮れんとし、悲風慘均たり、壠頭の樹。適たま是れ丘封、千秋を保ち、茲の金石に勒して永へに固と為さん」と。

撰者である「許豊」については記録が残っておらず、墓誌銘に「文散官試太常寺主簿」と署名があるのみである。「宣徳郎」は正七品の文散官で、「太常寺主簿」は「勾檢稽失、省署抄目」という職務を掌る従七品上の官職である⁽⁵⁾から、彼が都で職に就いていたことがわかる。また賀蘭遂の長子賀蘭邠は、かつて太子通事舍人（正七品）⁽⁷⁾の任にあった。これは「掌導引東宮諸臣辞見之禮、及承令勞問之事（東宮の諸臣、辞見の礼、及び承令勞問の事を導引するをつかさどる）」⁽⁸⁾官職なので、賀蘭邠も都での仕官経験があることがわかる。許豊がこの墓誌銘を撰したのは、賀蘭邠の委託によるものであろう。

この銘文から以下の点が明らかとなる。まず、賀蘭遂の本籍地が河南であること。彼は肅宗の至徳元年（七五六）に生まれ、元和三年（八〇八）に死去した。そして敬宗の宝暦元年（八二五）に賀蘭遂の妻程氏が亡くなり合葬され、この銘文はその時に製作されたものである。だがここで一つの疑問が生じる。銘文では賀蘭遂の官職や作品に関する評価がほとんど言及されておらず、「義」や「孝」を重んじる人柄を強調して讃えている。これは、賀蘭遂が仕官経歴の無い処士であったことを示しているのであろうか。或いはこの墓誌銘が書かれた時、賀蘭遂の死から既に十七年が経過しており、撰者が賀蘭遂についての情報をよく把握していなかったためであろうか。一方、『千

載佳句』の賀蘭遂の作品は、以上の問題点を解明するのに役立つものである。今、これらの作品を以下の表にまとめる。

千載佳句							校語
作品番号	類部	詩題	詩句				
一七〇	四時部秋興	嘉到界	秋迎曉月鴻聲早、 日映深山水氣寒。	『詩逸』の題は「喜到家」と作る。			
三二八	地理部山水	望大寶山	千峯黛色回(因)晴出、 百谷泉聲欲暮寒。	『新漢朗詠集』卷下「雜部・山付山水」にも収録される。			
三二九	地理部山水	百丈山	黛色迴臨滄海上、 泉聲遙落白雲中。	『和漢朗詠集』卷下「山」にも収められる。			
四一四	人事部朋友	贈朱功曹	喜遇近臣楊得意、 慙非詞客馬相如。	『詩逸』には異文無し。			
四四四	人事部美人	贈所思妓女	玉兒(貌)自宜雙黛翠、 桃花獨咲一枝春。	『新漢朗詠集』卷下「雜部・妓女」にも採録される。			
四四八	人事部艷情	寄所思佳人	秋水未鳴遊女佩、 寒雲空滿望夫山。	『和漢朗詠集』卷下「遊女」にも収められる。			

五五六	宮省部禁中	北京内宴	鐘鳴桂殿千山曉、 花發梨園百卉新。	『詩逸』に見られない。内閣甲本、国会本、 『全補』は題を「北京内宴」に作る。また国 会本は「鐘」を誤って「鏡」に作る。
五六五	宮省部古宮	觀北城宮殿	黃閣暮虫羅戶牖、 紫庭春草遍階墀。	『詩逸』は作者を「賀蘭暹」とする。内閣 乙本、国会本、『詩逸』は「閣」を「閣」に 作る。
六八八	禽獸部馬	文馬	綠耳半蔓艾イ湘浦竹、 驪文乱點武陵花。	内閣甲本、内閣乙本、国会本、『詩逸』、「蔓 艾イ」を「蔓」に作る。
九五二	別離部行旅	宿羽嶺仰奉贈 朱功曹イ恋闕庭 イ无	遼陽客路千峯引、 薊北郷心片月知。	『新撰朗詠集』「雑部・行旅」にも収められ る。『詩逸』は詩題を「宿羽宿仰恋闕庭」に 作る。
九五三	別離部行旅	長嶺驛奉贈朱 功曹	山雲眇眇川程遠、 木葉蕭蕭鴈過初。	内閣甲本、国会本、『詩逸』は題を「客懷」 に作る。
九五四	別離部行旅	泡於イ水驛客 懷	迴鴈不傳郷信去、 秋風偏向客衣寒。	内閣甲本、国会本、『詩逸』は題を「贈朱功 曹」に作る。

この表から、賀蘭遂の十二聯の内容が、時節、地理、人事、別離、宮省など多方面に渡っているが、特に山水と行旅の作が多く、そのため賀蘭遂が自然山水の遊びを好んでいたことがわかる。詩中に詠まれる地名には、「大宝

山、「百丈山」、「羽嶺」、「長嶺駅」などがあり、これは賀蘭遂が旅先で目にした風景であろう。「百丈山」以外の地名については詳細不明である。「百丈山」については二つの説があり、一つは劍南道雅州（現在の四川省雅安市）の山で、もう一つは江南西道洪州の大智禅寺の百丈山を指し、唐の宣宗もここで詩を詠んでいる⁽⁹⁾。

また、賀蘭遂の詩中に登場する人物は、「朱功曹」、「所思妓女」、「所思佳人」などで、特に「朱功曹」は『千載佳句』所収の十二聯の中で四回言及されている。ここから彼が賀蘭遂と非常に親しく交際していたことがわかるが、この人物についても記録がなく詳細は不明である。ただ、第四一四聯の上句に「喜遇近臣楊得意」とあることから、この「朱功曹」なる人物はそれほど高い官職にあつたわけではないにも関わらず、君主に寵愛された臣下であつたことがわかる。句中の「喜」字は、賀蘭遂が君主の近臣と面会し、仕官の望みを果たした喜びを表す。下句の「慙非詞客馬相如」は、作者が自分の無能さにより職を失うかも知れない不安を詠んでいる。賀蘭遂の官途への執着は、別離部の行旅第九五二聯においてさらに顕著に表現されている。この聯の詩題は「宿羽嶺仰奉贈朱功曹イ恋闕庭イ无」となっており、詩句は「遼陽客路千峯引、薊北郷心片月知（遼陽の客路 千峯を引き、薊北の郷心 片月に知らる）」である。異郷を旅する詩人は、宿羽嶺に寄寓し、「朱功曹」に対して自分の故郷を偲ぶ痛切な思いを詠んでいる。友人に胸中を打ち明けることは、とりたてて特別なことではない。しかし、作者は詩題の中でわざわざ自己の「仰恋闕庭」という強い心情を述べている。そして賀蘭遂は「朱功曹」の「近臣」なのである。彼がこの詩を贈った真意は明らかとなろう。

さらに、宮省部禁中第五五六聯にも注目したい。この聯の詩題は「北京内宴」で、詩句は「鐘鳴桂殿千山曉、花發梨園百卉新（鐘は桂殿に鳴りて千山 曉^あけ、花は梨園に発きて百卉 新たなり）」とある。「内宴」は、君主が臣下を招待する宴会である。「北京」は、「北京太原府」、すなわち隋代の太原郡を指し、「龍朔二年、進爲大都督府。天

授元年、置北都兼都督府。開元十一年、又置北都、改并州爲太原府。天寶元年、改北都爲北京（龍朔二年、進めて大都督府と爲す。天授元年、北都を置き都督府を兼ね。開元十一年、又北都を置き、并州を改めて太原府と爲す。天寶元年、北都を改めて北京と爲す⁽¹¹⁾）、また「上元二年九月二十一日」には「停北京之號。尋卻復爲北京（北京の号を停^やむ。尋^っいで却^つて復^た北京と爲^す）」と記される⁽¹²⁾。これらのことから、「北京内宴」は北都の西の晋陽宮で行われたのではないかと考えられる⁽¹³⁾。君主が晋陽宮に趣くことは、玄宗の泰山封禅の際にもあ^つた⁽¹⁴⁾が、これは必ずしも賀蘭遂の「内宴」と関係するわけではあるまい。とはいえ、この聯の詩題と内容から、賀蘭遂が君主となり近い立場にあ^つた可能性が見い出されるのである。

以上、『千載佳句』所収詩句の分析から、賀蘭遂が仕官の望みを抱き、かつ各地を遊歴した人物であることがわかった。これは「唐故河南賀蘭府君（遂）墓誌銘并序」において、賀蘭遂が仕官に対して無欲であ^つたかのような記述と矛盾する。この原因については、二つの可能性が考えられる。一つは、賀蘭遂の仕官が結局は上手くいかず、墓誌銘では名利に無頓着な人物として記されたのではないかということ。そしてもう一つは、「唐故河南賀蘭府君（遂）墓誌銘并序」の墓主「賀蘭遂」と、『千載佳句』の「賀蘭遂」が別人ではないかということである。墓誌銘に、賀蘭遂の文才について「中寿に至^つて「信に篤く学を好む」と描写され、『日本国見在書目録』に彼の別集が記載され、また『千載佳句』に作品が収められるが、一方で『詩逸』は「賀蘭遂」を「賀蘭暹」としていることを考え合わせると、後者の可能性も検討の余地があると思われる。

二 李伯良について

李伯良は、中国の文献に記録がなく、『千載佳句』が佚詩一聯を収録するために、辛うじてその名が残っている。この聯は後に『全唐詩逸』に補録された。この詩は『千載佳句』天象部の風月に収められ、詩題は「静女怨」、詩句は「風向銀燈花燼落、月臨珠箔玉鈎垂（風 銀燈に向ひて花燼 落ち、月 珠箔に臨みて玉鈎 垂る）」である。ここでは、詩題や内容、部類など得られる情報が少ない。「静女怨」の詩題は曲調の名らしいと考えられるが、関連する楽書の資料に見られないため、李伯良の個人の状況を理解するには十分に役立つとは言えず、『唐詩大辞典』でも彼は「生平無考」とされたのは理解される。⁽¹⁵⁾

だが、近年新たに出土した墓誌銘の中に、李伯良撰「唐故開府儀同三司使持節隴州諸軍事行隴州刺史上柱国南陽県開国伯張府君墓誌銘并序」が発見された。⁽¹⁶⁾ この銘文には、撰者「文林郎前守媯州司倉参軍」と署名がある。「文林郎」は、唐代では従九品の文散官である。⁽¹⁷⁾ 「媯州司倉参軍」は、主に媯州の「倉廩、庖廚、財物、塵市之事」を掌る。⁽¹⁸⁾ 媯州は河北道に属し、⁽¹⁹⁾ 上州である。⁽²⁰⁾ 上州の司倉参軍は従七品下であるため、⁽²¹⁾ 「媯州司倉参軍」は従七品下と推定される。ところで、「媯州司倉参軍」の前に「前守」ということばを加えるのは、李伯良がこの官職の実質的には授かっておらず、また旧来の職務であることを指している。墓主である張道昇が埋葬されたのは「貞元年冬十一月廿五日庚寅」なので、彼が「文林郎前守媯州司倉参軍」であったのはこれより以前ということになる。墓主の張道昇について、墓誌銘の序文に以下のように記される。

公諱道昇、字道昇、幽州范陽人也。其先皇帝軒轅氏、大聖之後、弓裘不墜。故留侯子房相漢、司空華匡晉。洪

勳茂績、譜牒詳焉、故不書。公則司空十七代孫也。曾王父朝議郎守檀州司馬徹、祖王父朝散大夫行媯州長史克明、王父驃騎大將軍持節亳州刺史令暉。公則亳州府君之元子。少有奇節、素多方略、知文可經邦、乃伏膺閱史。武以戡難、則彎弓習射。至若龍韜豹略之術、縱火沉沙之策、莫不研精覃思、窮理盡性。釋褐充節度副將、轉左金吾衛大將軍、旋充左廂步軍大將兼節度押衙。……積功勞遷特進開府儀同三司、持節隴州諸軍事隴州刺史、上柱國南陽縣開國伯。

公諱は道昇、字も道昇、幽州范陽の人なり。其の先 皇帝の軒轅氏、大聖の後、弓裘 墜ちず。故に留侯の子房 漢に相たり、司空の華 晋を匡す。洪勳 茂績、譜牒詳らかなり、故に書かず。公 則ち司空の十七代の孫なり。曾王父は朝議郎守檀州司馬の徹、祖王父は朝散大夫行媯州長史の克明、王父は驃騎大將軍持節亳州刺史令の暉。公は則ち亳州の府君の元子なり。少くして奇節有り、素より方略多く、文の経邦すべきを知り、乃ち伏膺して史を閲す。武を以て難を戡し、則ち弓を彎し射を習ふ。龍韜豹略の術、縱火沈沙の策のごときに至りては、研精し覃思し、理を窮し性を尽くさざる莫し。釈褐して節度副將に充てられ、左金吾衛大將軍に轉じ、旋いで左廂步軍大將兼節度押衙に充てらる。……功勞を積むに特進開府儀同三司、持節隴州諸軍事隴州刺史、上柱國南陽縣開國伯に遷さる。

この資料によれば、張道昇は漢の張良、晋の張華に続く名族の家系に生まれている。またその一族は代々幽燕の辺地における守将である。張道昇も節度副將や左金吾衛大將軍、左廂莊步軍大將兼節度押衙等の武官を歴任し、後に特進開府儀同三司、持節隴州諸軍事隴州刺史、上柱國南陽縣開國伯へと順調に官位を進めていった。彼の赴任先の一つである隴州は、⁽²²⁾ 関内道の上州である。このように、張道昇は常に高位高官の職にあつたわけではないが、

当時の上州牧守となったことがわかる。誌文の作者である李伯良より、彼の職位の方がかなり高い。言うまでもなく、張道昇の墓誌の撰作は、頗る丁重である。官職では張道昇とおよそ釣り合わない李伯良が彼の墓誌銘を製作することになったのには、張氏一族との浅からぬ関係があった⁽²³⁾のではないか。また李伯良の文学の才能を見込まれたためでもあった。

以上のように、李伯良は中唐の徳宗期の詩人で、官位は高くなかったが、優れた文学の才能を有していた。彼は河北や関内周辺での任官歴があり、幽州の張氏一族と親密な関係があったのである。

三 王魯復について

王魯復については、唐宋の文献には記録が無いものの、明の黄仲昭編纂『(弘治)八閩通志』「人物・文苑」に關連記事が見え、『全唐詩』に彼の詩歌四首「弔韓侍郎」、「詣李侍郎」、「弔靈均」、「故白巖禪師院」が収録される⁽²⁴⁾。さて、『千載佳句』に収録される王魯復の作品は七言詩句三聯であるが、全て中国の文献には残っていない(後に詩歌一首、断句一句が『全唐詩逸』に収録されている⁽²⁵⁾)。『中国文学家大辞典』及び『唐詩大辞典』に見える情報は、これらの資料に拠ったものである⁽²⁶⁾。例えば『唐詩大辞典』に「王魯復、生卒年不詳。字夢周、福州連江人。穆宗長慶四年(八二四)有詩吊韓愈。文宗大和中爲宰相王涯、李固言所知、獻詩於朝、授邕管從事。事蹟散見其『吊韓侍郎』詩及『八閩通志』卷六二。工詩、長於諷刺。『全唐詩』存其詩四首、『全唐詩逸』補詩一首、又断句二句。『全唐詩』又誤以王夢周另立目、所收詩一首重出」とある。しかし、この『全唐詩逸』補詩一首、又断句二句の説は編著者の誤りであり、且つ王魯復についての古文献資料を十分に解読していないことがわかる。

ところで、王魯復が撰した「唐故吉州司法參軍黃府君墓誌銘並序」が近年に新たに出土した。この墓誌銘を収録する『全唐文補遺』にも作者を「生平不詳」とする。⁽²⁷⁾本章では、王魯復の生平に関してこれらの説を正し、加えて、王魯復についての幾つかのことを補充したい。

まず『(弘治)八閩通志』の記載を見ていく。

(王魯復) 字夢周、連江人。文史足用、尤長於詩詞、多諷刺。貞元、大曆間、嘗獻所爲詩於朝、得從事邕府。魯復意氣高邁、嘗謁郎中皇甫湜、久未獲見、移書責之曰「韓文公接賢樂善、孳孳不倦。公師文公之文、安可後文公之道。自此當携酒吊公之墓、不及門矣。」湜大慚、復書謝之。又嘗草衣騎牛。相國王涯、李固言俱賞識焉。在京師、聞臺省有疑獄、久不決、白時相請鞫之。不數日得其情。

(王魯復) 字は夢周、連江の人なり。文史用ふるに足り、尤も詩詞に長^たけ、多く諷刺す。貞元、大曆の間、嘗て爲る所の詩を朝に献じ、邕府に従事するを得たり。魯復意氣高邁にして、嘗て郎中の皇甫湜に謁さんとするも、久しく未だ見ゆるを獲ず、書を移して之を責めて曰く「韓文公は賢に接し善を楽しみ、孳孳に倦らず。公は文公の文を師とするに、安んぞ文公の道を後とすべけんや。此より当に酒を携へて公の墓を弔い、門に及ばず。」と。湜大いに慚ぢ、復た書して之に謝す。又嘗て草衣にして牛に騎る。相国の王涯、李固言俱に賞識す。京師に在り、台省に疑獄有りて久しく決せざるを聞き、時の相に白して之を鞫^{ただ}さんことを請ふ。数日ならずして、其の情を得たり。

この資料から、王魯復が諷諫等の文才だけでなく、事件を裁く能力もあつたことがわかる。また「干謁」の風潮

にしたがって、朝廷に自己の詩作を献上した。韓愈と交際があり、王涯と李固言に認められたが、韓愈の後学である皇甫湜に軽んじられた。ここでは王魯復の文章の優劣には言及せず、彼が王涯などに認められ、また王涯や韓愈とも文章に優れた人物であるという点から、彼も文章に関して優れた才能があつたと考えられる。「唐故吉州司法参軍黄府君墓誌銘並序」の内容もこれを証明する。

また、王魯復の現存する詩歌から、彼に関する情報をまとめておこう。「弔韓侍郎」の「星落少微宮、高人入古風。幾年才子淚、併寫五言中（星少微宮に落ち、高人古風に入る。幾年か才子の淚、併せて五言の中に写す）」によれば、王魯復と韓愈の交往は、韓愈が逝世した穆宗長慶四年（八二四）十二月まで続いていたことがわかる。「詣李侍郎」の「文字元無底、功夫轉到難。苦心三百首、暫請侍郎看（文字元より底無し、功夫うたた轉難たに到る。苦心の三百首、暫く請ふ侍郎の看るを）」によれば、彼は李固言に干謁した経歴もあるとわかる。「故白巖禪師院」の「能師還世名還在、空閉禪堂滿院苔。花樹不隨人寂寞、數枝猶自出牆來（能師世に還りて名還在り、空閉の禪堂滿院の苔。花樹人の寂寞たるに随はず、數枝猶ほ自ら牆を出で来る）」によれば、彼は「白巖禪師」を追念して詩を創作したことが分かる。残念ながら「白巖禪師」については未詳である。

『千載佳句』所収三聯の詩作は、以下の通りである。

第五七六聯 「水楼」（居処部、水楼）

山銜落日溪光動

山は落日を銜みて溪光 動き

岸轉迴風檻影浮

岸は迴風を転らして檻影 浮かぶ

第五七七聯「同上」（居処部、水楼）

座内數聲來遠鶴 座内 數声 遠鶴來り

煙中一派辨孤舟 煙中 一派 孤舟を弁ず

第一〇六〇聯「贈僧惟勳」（釈氏部、贈僧）

清泉遶屋澄心遠 清泉 屋を遶り澄心 遠く

曙月銜山出定遲 曙月 山を銜み、出づること定めて遅し

このうち、第五七六聯と第五七七聯は『全唐詩逸』に「水楼」という絶句として結合して収録される。この二聯の末字「浮」と「舟」は、『校正宋本広韻』によれば、ともに下平声の「尤」韻に属する。ところで、第一〇六〇聯は『新撰朗詠集』巻下「贈僧」にも収められている。この聯の詩題は、法号「惟勳」と称される僧侶に言及している。しかし、この僧惟勳についての詳細は不明である。

最後に、王魯復の「唐故吉州司法参军黄府君墓誌銘並序」を検討する。此の銘文を撰した時、王魯復は「将仕郎前守河南府新安県尉」と署している。⁽³⁰⁾「将仕郎」は、従九品下の文散官である。「新安県尉」は、新安が畿県である⁽³¹⁾ため、その秩品が従九品上である⁽³²⁾とわかる。墓主の黄弘遠についての敘述は以下の通りである。

吉州前司法黄弘遠、諱季長、大中元年二月廿九日終京務本里。會郷人前隰州録事林賡告小生誌於墓、敬承教□。弘遠其先江夏太守祖之後、曾泉州長史惠、因家閩也。祖岳、奉化令。生外廷評事少璵。妻吳夫人、生弘遠、即

廷評事三子也。郷里之庠、芳塵不滅。元和中舉明經、由太學、薰風沛然。穆宗二年、擢第、光煥庭闈。大和元年、選福唐主簿。檢轄聲振、養及膝下。又授吉州司法、有孝意之節。

吉州の前司法の黄弘遠、諱は季長、大中元年二月廿九日に京の務本里に終はる。会ときに郷人の前隰州録事の林賡、小生に告げて墓に誌さしめんとし、敬んで教を承る。弘遠は其の先江夏太守の祖の後なり、曾は泉州長史の恵、因りて閩に家するなり。祖の岳は、奉化令たり。外廷評事の少璵を生む。妻は吳夫人、弘遠を生む、即ち廷評事の三子なり。郷里の庠、芳塵滅せず。元和中明經に挙げられ、太学に由り、薰風沛然たり。穆宗二年、第に擢ばれ、庭闈を光煥す。大和元年、福唐主簿に選ばる。檢轄(33)声振ひ、養ふに膝下に及ぶ。又吉州司法を授かり、孝意の節有り。

黄弘遠が「大中元年二月二十九日終京務本里」ということから、王魯復が「将仕郎前守河南府新安県尉」となったのは、この以前であるとわかる。さらに、「其の先江夏太守の祖の後なり、曾（祖）は泉州長史の恵、因りて閩に家す」とあることから、黄弘遠はもとに三国時代の江夏太守の黄祖の後裔であり、後に福建に遷居したとわかる。このことから、王魯復と同郷人となる。この墓誌銘を撰することを依頼した林賡も、隰州録事を担任した福建籍人である。黄、林二人とも史料には他に記録がなく、未詳である。

以上のように、王魯復は下級官僚として、地方県尉などの職位を歴任した。彼は事件を審理する才能のみではなく、詩文にも才能を発揮し、韓愈や王涯などと親交があった。幸いにもその詩作が日本に伝えられ、平安時代の古文獻に収録されたのである。

四 『千載佳句』所収の中晩唐詩人と唐詩の流伝との関係について

(一) 『千載佳句』における白居易と元稹と、本論文の第三章に考証した劉長卿との三人の詩句の底本は作者の別集である可能性は極めて高いものの、それ以外の詩人の作品は個々の別集であるのか、また複数の詩人の作品を集めた選集であるのか、その出処を推定できない。

奈良・平安時代において、唐人の別集が日本に伝えられて保存される状況は、『千載佳句』の詩人について研究において示唆するところが多く、注目に値する。これらの唐人別集の存目について、そのもととなる参考文献は主に空海と円仁が携えた書籍についての目録文献、及び『日本国見在書目録』や『通憲入道藏書目録』などである。以下は、これらの文献に記録される『千載佳句』の詩人の別集を整理しておきたい。

まず空海が携えた唐人の作品である。空海が撰した『遍照發揮性靈集』巻四には「劉希夷集四卷副本」、⁽³⁴⁾「王昌齡詩格一卷」、⁽³⁴⁾「王昌齡集一卷」、⁽³⁴⁾「朱晝詩一卷」、⁽³⁴⁾「朱千乗詩一卷」、⁽³⁴⁾「王智章詩一卷」、⁽³⁴⁾「劉庭芝集四卷」が収められる。そのうち朱千乗の詩作のみが『千載佳句』に採録されている。

次は、円仁の「日本国承和五年（開成四年）入唐求法目録」に「祝元膺詩集一卷」とあり、⁽³⁵⁾彼の「慈覚大師在唐送進録」には白居易の「任氏怨歌行一帖」、⁽³⁶⁾「祝元膺詩一帖」、⁽³⁶⁾「前進士弛（施）肩吾詩一卷」とあり、⁽³⁶⁾その「入唐新求聖教目録」に「王建集一卷」、⁽³⁷⁾「進士章嶰解頰集一卷」、⁽³⁷⁾「莊翱集一卷」、⁽³⁷⁾「白家詩集六卷」とある。⁽³⁷⁾

さらに、『日本国見在書目録』の存目を分析すれば、ここに収録される中晩唐人の別集は、初盛唐人より少ないとわかる。例えば、初盛唐では、『駱賓王集』十卷、⁽³⁸⁾『宋之問集』十卷、⁽³⁸⁾『惠文太子集』十卷、⁽³⁸⁾『張文成集』九卷、⁽³⁸⁾『張諤集』一卷、⁽³⁸⁾『李嶠百什詠』一卷、⁽³⁸⁾『李白歌行集』三卷、⁽³⁸⁾『王維集』二十卷、⁽³⁸⁾『遊仙窟』一卷という記録があるが、中

晩唐の別集は、『張野人集』十卷、『賀蘭遂集』二卷、『李益集』一卷、『令狐楚表奏集』十卷、『白氏文集』七十卷、『元氏長慶集』二十五卷、『白氏長慶集』二十九卷のみである。これらの中晩唐の別集は、書名と巻数より、その一部分が早い時期に中国で散佚したものである。例えば、『惠文太子集』、『張文成集』、『張諤集』、『李嶠百什詠』、『李白歌行集』、『遊仙窟』、『張野人集』、『賀蘭遂集』等である。また史志の目録に収める詩人の正集と異なるものもある。例えば二十卷本『王維集』、一卷本『李益集』、二十五卷本『元氏長慶集』、二十九卷本『白氏長慶集』等である。ここから、中国で通行する詩人の別集と異なる別集は、多く中晩唐の時期の書籍であることがわかる。この現象は、中晩唐に書肆が発達し、そこで域外の人々が書物を買求めたことなどが関係していると思われる。

以上のことから、別集が奈良・平安時代の目録文献に保存される『千載佳句』所収の詩人は、およそ二十人となり、それぞれは駱賓王、宋之問、張諤、李範、王維、李白、杜甫（『江談抄』参照）、賀蘭遂、令狐楚、王建、白居易、元稹、朱千乘、弛（施）肩吾、祝元膺、章嶸、莊翱などである。これらの別集が『千載佳句』の詩句の出典であることは確定できないものの、今では見られない唐集の情報を反映している点で注目に値する。これらの目録資料と『千載佳句』の詩歌とをあわせて考察すれば、八〜九世紀において唐詩の流伝した状況の一部分を解明できるであろう。例えば、先に考証した賀蘭遂は、中国に現存する文献の中には記録されないが、『千載佳句』と『日本国見在書目録』にはそれぞれ詩句十二聯と詩集両巻とある。この現象は、鈔本時代における詩集の流伝には一定の偶然性があることをあらわしている。

(二) 以下に陳尚君の「唐詩人估籍考」⁽³⁸⁾を参考資料とし、また『新唐書』「地理志」に記される開元年間の十五道州県の順により、『千載佳句』所収の詩人の出身・活動区域（考える順番は出身地、家居地、郡望）をまとめておく。

河北道	汾州	太原府	蒲州	河東道	汴州	豫州	許州	滑州	河南道	鄭州	河南府	都畿道	岐州	華州	京兆府	京畿道
	宋之問	温庭筠	耿緯		崔顥	許渾	王建	李昂 <small>(陳尚君注·『茫洛冢墓遺文』卷中「李昊墓誌」)</small>		韋副 <small>(韋嗣立)</small>	豆虞 <small>(盧)峯</small>		李播	楊師道	寶鞏	
			盧綸								劉禹錫		楊衡	白居易	令狐楚	
			王維								元稹					
			楊巨源								杜甫					
											韓愈					

湖州	蘇州	常州	潤州	江南東道	舒州	楚州	淮南道	安西都護府	隴右道	鄧州	山南東道	幽州	定州	德州	趙州	貝州
積皎然	陸翬	喻梟	馬懷素		曹松	趙嘏		李白		張祐		賈島	郎士元	高適	李端	崔膺
錢起	陳羽		丁仙芝									盧拱			李昂	
陸暢	殷堯藩		皇甫冉												李昂 （陳尚君注に「端從父、開元詩人李昂有別」とある）	
	顧況		戴叔倫													
	陳潤		殷遙													
	張籍		周元範													
	張蕭遠		祝元膺													
	楊収															

益州	劍南道	洪州	池州	宣州	江南西道	泉州	福州	台州	婺州	越州	睦州	杭州
楊郇伯		熊傳(孺)登	杜荀鶴	劉長卿		黃滔	王魯復	羅虬	駱賓王	嚴維	方干	羅鄴
									馮宿	朱慶余	章孝標	羅隱
											徐凝	
												施肩吾

このように、『千載佳句』に所収される中晩唐詩人では、江南東道出身者が最も多く、次に河北道が多い。特に江南東道の潤州と蘇州に密集している。これは、中晩唐期の江南一帯が、文化的に栄えており、書籍の流通と拡散の中心であったこと、そして多くの入唐日本人がこの地で書籍を購入したことと深い関連がある。例えば「入唐新求聖教目録」には、江南詩壇において詠まれた作品をまとめた選集『私杭イ越唱和詩』一卷、「杭越寄和詩集』

一卷」という存目がある⁽³⁹⁾。また『日本国見在書目録』には、『杭越寄詩』二十二(巻)、『丹陽集』一(巻)、『荊楊挺秀集』二(巻)』という地域色の強い詩集の記録がある。これらの選集の存在は、『千載佳句』が江南の詩人を多く採録していることと無関係ではないだろう。例えば、平安時代に流行した『白氏文集』も、慧萼が蘇州の南禅寺で抄録し日本に持ち帰ったものである。

(三)『千載佳句』に収録される唐代詩人を総合的に分析すると、収録作品の傾向として、一定の集団性が見出される。例えば盛唐詩人のうち、王維、張諤、杜甫、崔顥、丁仙芝は共に惠文太子李範と交際があった。また大暦時期の李嘉祐、錢起、劉長卿、李端、盧綸等、或いは元白時期の白居易、元稹、劉禹錫、楊巨源、張籍等、彼らは互いに唱和詩を詠んでいる。さらに血縁関係や師弟関係も注目に値する。例えば、張籍と張蕭遠は兄弟であり、嚴維と章孝標の父である章八元、徐凝と方干は、師と弟子の関係である。朱慶餘、陳標、章孝標などは張籍の律詩を学んだことがある。『千載佳句』所収の唐人の交遊状況を反映した詩歌については、本論文の末尾において、附録【『千載佳句』所収詩人間の交遊を示す詩の数の一覧表】を参照)。現存の平安時代の抄巻と敦煌の抄巻から、こうした詩人の作品は連巻に抄録される可能性があると知られる。つまり、これらの交遊のある詩人同士が自分たちの文集を贈り合い、作品を唱和し合う中で、文集と作品とは体系的に流伝することもある。『旧唐書』「白居易伝」に「當此之時、足下興有餘力、且欲與僕悉索還往中詩、取其尤長者、如張十八古樂府、李二十新歌行、盧、楊二祕書律詩、竇七、元八絕句、博搜精掇、編而次之、號爲『元白往還集』。眾君子得擬議於此者、莫不踴躍欣喜、以爲盛事。(此の時に当たり、足下興に余力有りて、且に僕と悉く還往の中の詩を求め、其の尤も長ずる者、張十八の古樂府、李二十の新歌行、盧、楊の二祕書の律詩、竇七、元八の絶句のときを取りて、博く搜し精しく掇ひ、編して之を次し、号して「元白往還集」と為さんとす。衆君子の擬議を此に得し者、踴躍欣喜し、以て盛事と為さざ

るは莫し。」とあり、唱和詩をまとめて編集したことがわかる。このように、『千載佳句』をはじめとする平安時代の古文獻は、唐代文学が日本に伝播した過程をも保存しており、我々に貴重な歴史的情報を提供してくれているのである。

ところで、『千載佳句』に収められる唐代詩人のうち、九人が日本に地縁のある人物との交遊を示す詩を残しており、その題目を示せば、李白「哭晁卿衡」、王維「送秘書晁監還日本(并序)」、錢起「送僧歸日本重送陸侍御使日本」、劉長卿「同崔載華贈日本聘使」、張籍「贈東海僧」、劉禹錫「贈日本僧智藏」、賈島「送褚山人歸日本」、朱千乘「送日本国三藏空海上人朝宗我唐兼貢方物而歸海東詩序」、徐凝「送日本使還」、方干「送人之日本」と「送僧歸日本」、曹松「送王中丞使日東」である。これらの詩歌は、詩題が示すように唐代詩人と日本に地縁を持つ人物との間に交往があったために、あえて日本に舶来され『千載佳句』に収められたとも考えられるかもしれない。

注

- (1) 関連研究として、嚴紹璽「日本『千載佳句』白居易詩佚句輯稿」(『文史』第二三輯、中華書局、一九八四年)、太田次男「『千載佳句』から『和漢朗詠集』へ——白詩を中心として」(『和漢比較文学叢書』卷四『中古文学と漢文学Ⅱ』、汲古書院、一九八七年)、植木久行「『千載佳句』所収白居易詩逸詩句考(上、下)」(『白居易研究年報』第二、四号、勉誠出版、二〇〇一、二〇〇三年)、謝思煒「『千載佳句』所載の白居易佚詩に関する考察——中唐時代の歌伝協同体創作論を兼ねて——」(高松寿夫、雋雪艶編『日本古代文学と白居易王朝文学の生成と東アジア文化交流』、勉誠出版、二〇一〇年)等がある。

- (2) 周勛初『唐詩大辭典』(修訂本、鳳凰出版社、二〇〇三年、三二一頁)。
- (3) 周祖謨『中国文学家大辞典・唐五代卷』(中華書局、一九九二年、六〇七頁)。
- (4) 吳鋼『全唐文補遺』千唐誌齋新藏專輯(三秦出版社、二〇〇六年、三四一〜三四二頁)。
- (5) 『旧唐書』卷四二「職官志」(二七八四頁)。
- (6) 『唐六典』卷一四(陳仲夫点校、中華書局、一九九二年、三九五〜三九六頁)。
- (7) 『通典』卷四〇「職官二二」(一〇九八頁)。
- (8) 『唐六典』卷二六「太子通事舍人」(六七二頁)。
- (9) 『旧唐書』卷四一「地理志四」(二六八三頁)。
- (10) (宋)趙与虤『娛書堂詩話』卷上(王雲五『叢書集成初編』、商務印書館、一九三六年、五頁)。
- (11) 『旧唐書』卷三九「地理志・河東道」(一四八〇〜一四八一頁)。
- (12) 『唐會要』卷六八「諸府尹」(一一九〇頁)。
- (13) 『新唐書』卷三九「地理志・河東道」(一〇〇三頁)。
- (14) 『全唐詩』卷三に玄宗の「過晋陽宮」がある(二六頁)。
- (15) 『唐詩大辭典』(一七六頁)。
- (16) 『唐代墓誌彙編』下冊(上海古籍出版社、一九九二年、一九四五〜一九四六頁)。また『全唐文補遺』第六輯(三秦出版社、一九九九年、一二七〜一二八頁)にも見られる。この墓誌銘を刻した誌石は北京市の房山区良郷で出土した。この墓誌銘については先行研究がある(韓理洲『新增千家唐文作者考』、三秦出版社、一九九五年)が、本章では更に詳しく考察している。

- (17) 『通典』卷四〇「職官二二」(一一〇二頁)。
- (18) 『通典』卷三三「職官一五・総論郡佐」(九一三頁)。
- (19) 『旧唐書』卷三九「地理志」(一五一九頁)。
- (20) 『新唐書』卷三九「地理志」(一〇二一頁)。
- (21) 『新唐書』卷四九「百官志」(一三一七頁)。
- (22) 『旧唐書』卷三八「地理志」(一四〇五頁)。
- (23) 張氏は河北の有力貴族で、李伯良は嬀州の司倉參軍を勤めている。よって李伯良は張家の旧属であろう。
- (24) 『全唐詩』卷四七〇(五三四六〜五三四七頁) 参照。「故白巖禪師院」詩は、『全唐詩』卷七七〇にも収録され、作者を「王夢周」とする(八七四八頁)。
- (25) 『全唐詩逸』卷上(一〇一八二頁)。
- (26) 前掲注(3)(五二頁)、前掲注(2)(三三頁)。
- (27) 『全唐文補遺』第三輯(一九九六年、二一九頁)。
- (28) 『旧唐書』卷一六〇「韓愈伝」(四一九五頁)、『新唐書』卷一七九「王涯伝」(五三一七頁) 参照。
- (29) 『旧唐書』卷一七「敬宗本紀」(五一三頁)。
- (30) 『通典』卷四〇「職官志二二・秩品五」(一一〇二頁)。
- (31) 『新唐書』卷三八「地理志二」(九八三頁)。
- (32) 『通典』卷四〇「職官志」によると、「諸州上県中県尉」は「従九品上」、「諸州中下県尉」は「従九品下」である(一一〇二頁)。

(33) この墓誌銘は、『全唐文補遺』第三輯（三秦出版社、一九九六年、二一九～二二〇頁）にも収録されるが、本章では、周紹良主編『唐代墓誌彙編続集』（上海古籍出版社、二〇〇一年、九七一頁）を参照した。

(34) 空海『遍照發揮性靈集』巻四（渡辺照宏、宮坂宥勝校注『三教指歸 性靈集』、『日本古典文学大系七一』、岩波書店、一九六五年、二二八～二三七頁）。

(35) 仏書刊行会編纂『大日本仏教全書』「仏教書籍目録第二」（仏書刊行会、一九一四年、五〇頁）。

(36) 前掲注（35）、五六頁参照。

(37) 前掲注（35）、七一頁参照。

(38) 陳尚君「唐詩人估籍考」（『唐代文学叢考』、中国社会科学出版社、一九九七年、一四〇～一六五頁）。

(39) 前掲注（35）、七一、七七頁参照。また「入唐新求聖教目録」に『私杭イ越唱和詩』一卷とあるが、「慈覚大師在唐送進録」は『杭日寄和詩並序』一帖」に作る（前掲注（35）、五六頁）参照。

結論 『千載佳句』所収作品より見えて来る唐代文学研究の新しい地平

一 七～十世紀の東アジアにおける『千載佳句』の文化史的意義

七～十世紀にかけて繁栄した唐王朝は、実に国際色豊かな一大帝国であった。政治や文化はもとより、文学もまた例外ではなく、大きな影響力をもって周辺の東アジア諸国に広く伝播していったのである。そのため唐代文学の研究にあたっては、中国の文献だけでなく、日本や韓国などの東アジア諸国にも視野を広げるべきであり、また中国側の視点に拘らず、域外文化という角度から唐代文学の流伝とその影響について客観的に捉える必要がある。特に奈良平安時代の日本では唐詩が広く受容され、現在でも豊富な資料を我々に残してくれている。『千載佳句』は、その中でもとりわけ筆者が重要視する書物である。

さて、『千載佳句』に採録される作品を丹念に見ていくと、鈔本時代の唐詩の特徴や流伝状況、奈良平安時代における唐代の文化や文学の受容状況、即ち大江維時をはじめとする日本の文化人が唐詩をどのように読み、取り入れていたかが浮き彫りとなる。

『千載佳句』に収録される唐詩は、中国で当時流行していた詩歌だけではない。また有名な詩人のみが多く採用されているわけでもない。例えば李白は、言わずと知れた大詩人であるが、『千載佳句』では彼の詩歌はたった二首しか収録されていない。また応制詩や酬唱詩を得意とした張説と張諤の例を挙げると、張説は盛唐の政界と文壇両方面で活躍した人物で、玄宗の信頼も厚く、多くの応制詩を残しているにも関わらず、それらは『千載佳句』に全く収録されていない。反対に張諤は、官吏としても詩人としても不遇の生涯であったが、彼の作品は『千載佳句』

に二聯採録されているのである。ここからも、当時の平安文人が独自の審美眼に基づき詩歌を選び取っていたことが窺える。つまり『千載佳句』に収録される唐詩作品は、言語的な美しさや芸術性を重視し、かつ詩作を学ぶのにより適した詩句を採録していたのであり、日本のその当時の詩人の評価は中国の評価と一致しない。しかし、その当時（唐代）の同時代人がどのような唐詩評価をしていたかが『千載佳句』によって窺うことが可能である。『千載佳句』では、白居易と杜荀鶴の作品が特に多く採録されるが、これも大江維時ら平安文人が模範的な詩歌として彼らの作品を評価したためであろう。このように、唐代文学が国外における在りかたの特殊性を考える上でも、『千載佳句』は非常に興味深い資料なのである。

また『千載佳句』の収録作品は白居易の詩歌が実にその半数を占めるが、中国において当時彼と文名を同じくしていたはずの元稹と劉禹錫の二人の詩作品はそれほど多いわけではない。これには大江維時の個人的な評価のほか、当時の文化的背景と密接な関連があると思われる。今後、平安文人による中国文学の受容過程の解明及び唐代文学研究における空白の補足のための重要な大きな手懸かりとなるはずである。

二 唐代文学における『千載佳句』の研究意義

『千載佳句』には、多くの逸詩、佚句が保存されている。江戸時代の天明年間（一七八一〜一七八八）、市河寛齋はこの書を元に百二十余名の詩人の作品を加え、『全唐詩逸』三巻を編纂した。また現代の嚴紹盪は「日本『千載佳句』白居易詩佚句輯稿」の中で、『千載佳句』と『全唐詩』の白居易巻及び通行本『白居易集』を校勘し、その結果『千載佳句』中の白居易の詩句二十五聯が後者二集のどちらにも所収されていないことを指摘した。さらに

陳尚君輯校『全唐詩補編』は、『千載佳句』から佚句として五十余聯を新たに補っている⁽¹⁾。

だが『千載佳句』の研究価値はこれだけにとどまらない。まず、既に述べたように、『千載佳句』は、今日からみると知名度の低い詩人の作品をかなり多く採録している。例えば何玄、賀蘭遂などは伝記資料が全く残っていないにも関わらず、ともに十二聯が採録される。一方で、詩壇において当時絶大な影響力を持っていたはずの李商隱、杜牧等の作品は、一聯も収められていない。これはなぜか。筆者が調査したところ、当時あまり名声の高くなかった詩人たちは、今日残存している作品こそ多くはないが、彼らの間には地域的なつながりや互いに唱和していた形跡がある（第五章の第四節を参照）。『千載佳句』に残される彼らの作品に、唐代の地域的な文学現象に対する補足的側面を認めてよいように思われる。

また、この書が収める逸詩、逸句を詳細に分析することで、中国側の文献に残らない詩人について多くの情報を得ることが可能となるのである。『全唐詩逸』によれば、『千載佳句』中、経歴未詳の詩人は六十八名にのぼる。筆者はこれらの詩人を、該書に収録される詩句数（奥書の記録の順番を参照）により以下のように整理した。

『千載佳句』に収録される詩句数：該当詩人数（名）

一二聯：二名 何玄（奥書は「十二聯」とする、実際は十一聯）、賀蘭遂。

六聯：二名 莊翱、傅温（奥書は「六聯」とする、実際は五聯）。

五聯：二名 路半千、陸翬。

四聯：四名 陳素風、裴公衍、道彦、曹戩（奥書は「四聯」とする、実際は五聯）。

三聯：一名 唐樞。

二聯：十名

蘇替、崔行檢（儉）、沙門靈業、僧直玄（奥書は「僧真玄」とする）、温達、陳上卿、張殷衡、盧條、殷穆、李侍御。

一聯：四七名

韋振、王幹、解叔禄、鄭師冉、張野人、沙門奉絆（一作「蚌」）、季方、郢展、崔懂、沙門大閑、衛填、虞構、楊郇伯、李伯良、漢皓、長孫諡、冀金、林逢、章嶸、陸侍御、虞秀才、張牙、周存儒、李鉅（一作「淮」）、沙門宋休、金雲卿、鄭明、王有初、沙門良文、僧貞幹、僧去奢、顧効古、虞邕、李淬、沈寧、沙門久則、紹伯、僧清閑、戴寥（奥書は「載寥」に作る）、楚寔、石嚴、子泰、豆虞（盧）峯、崔建、李許、朴昂、郁迴。

本論文では、賀蘭遂、李伯良、僧貞幹等について、『千載佳句』所収の逸詩や新出土資料を用いてその経歴や事績の一端を明らかにした。また崔行檢（儉）、張殷衡、豆虞（盧）峯等についても、筆者は彼らに関連する詩文を発見し（『全唐詩逸』未収作品）、彼らの情報を新たに補うのである。例えば、駱賓王は「詠懷古意上裴侍郎」があり、白居易は「遊悟貞寺迴山下別張殷衡」、「村居寄張殷衡」があり、杜甫は「同豆盧峰知字韻（一本作同盧豆峰貽主客李員外子裴知字韻）」がある。その他の詩人については、今後も新資料の発掘と分析に努め、引き続き研究を進めていきたい。

さらに『千載佳句』は、唐代の様々な文化や文学の実態を解明する上でも貴重な資料となり得る。『千載佳句』の部立ては全部で二百五十八部あるが、うち音楽文化に関連する部類の細目は全て宴喜部に収められており、そこからさらに宴樂、妓樂、歌妓、蹈歌、舞妓、歌、歌舞、琴、琴酒、琴書、琴茶、箏、琵琶、笙、簫、笛、管弦、樂曲と細かく分かれている。宴喜部の詩句は計七十聯で、これほど細分化されるのは、奈良平安時代の古文献におい

ても極めて珍しい⁽²⁾。以下に詳細を述べよう。

まず、『千載佳句』における佚詩の中には、唐代の楽曲や曲調が見えるものがある。①中国の文献に残存しない楽曲曲調。例えば章孝標の句中にある「梨園調」、周存孺の句中にある「星未曙」など。これらは唐代或いは唐以前の音楽を研究する重要な手懸かりとなるはずである。②唐宋の音楽に関する文献に見られる楽曲曲調。例えば張牙「柘枝歌」の「柘枝」、李侍御「浪淘（淘）沙詩」の「浪淘（淘）沙」、李侍郎「楊柳枝詞」の「楊柳枝」など。これらは、盛唐の燕楽の曲目を記録する「教坊記」と『樂府詩集』に収録される。また張牙等の佚詩は、言うまでもなく唐代の歌詩を補充する上で重要な資料である。③平安文人が好んで用いた楽曲曲調。例えば「竹枝」、「水調」、「楊柳枝」、「霓裳」、「梅花落」、「王昭君⁽³⁾」などである。

次に、『千載佳句』の音楽に関する部類であるが、筆者はこの部類の立て方について些か疑念を抱いている。例えば、「歌妓」部と「舞妓」部の間に「蹈歌」部が挿入され、「蹈歌」部と「歌」部の間に「舞妓」部が挿入されるが、本来ならば「歌妓」部と「舞妓」部は対として連続して立てられるべきではないだろうか。また「蹈歌」「歌」「歌舞」部も、やはりまとめて部立てするのが一般的であり、このようにちぐはぐに収録されるのは不自然さを禁じ得ない。これは、大江維時が故意に操作したものなのだろうか。或は当時の中国の類書の部立てから何らかの影響があるのだろうか。この音楽の部立てを巡る問題は、唐代の音楽の実態の解明に重要な手掛かりを与えてくれるかもしれない。今後更なる調査が必要である。

三 『千載佳句』と唐代の文学に関する今後の展望と課題

従来の学术界において、『千載佳句』所収詩歌を中心に据えた研究は、本論文が初めてであり、該書についてこれほど詳細な分析を行った研究は他に無い。それでは、これまでの学界における『千載佳句』に対する注目度や研究の進展状況と、『千載佳句』そのものが持つ学術的価値との間に、なぜこれほどに差が生じているのであろうか。その一つの原因として、中国の研究者の『千載佳句』に対する認知度自体が低かったことが挙げられる。また、書物の存在自体を認識していたとしても、『千載佳句』を研究するには、一般的な中国人研究者にとっては、該書以外の日本の他の古文書の知識や漢文訓読の素養が必要であり、また日本に残存する関連文献の広範な蒐集が困難であり、それゆえ『千載佳句』に関する研究が容易に進められない状況にあった。また日本においては、『千載佳句』は確かに一定の注目を得てはいるものの、本文の校勘に終始する研究が大半であり、その背後にある文学の様々な動向や、当時の日本と中国の文化交流のダイナミズムにまで踏み込んだ研究はほとんど皆無と言ってよい。だが、唐詩をはじめとする唐代文学は、当時の東アジア文明における共有の言語であり、東アジア文明の共同体の形成に多大な促進作用を生み出しているのである。だからこそ、当時の文化や背景を含めて『千載佳句』の持つ文化史的意義を捉え直すことには重要な意義があるのである。

また墓誌銘などの新たに発掘された出土資料に着目し利用していく必要がある。近年はこういった資料が積極的に研究に取り入れられ、従来は未詳とされてきた唐代の詩人に関する情報も明らかになってきている。『千載佳句』は経歴未詳の詩人を多く収録するため、これらの出土文献は特に不可欠な資料である。本論文では、これらの墓誌文献を用いることで、唐僧貞幹をはじめとする経歴未詳の詩人数名について検証した。だが、『千載佳句』の幾十

数名の詩人に対して、今回筆者が考察した詩人の数はまだその一部分である。この分析方法を今後も継続した上で考察を行わねばなるまい。

さらに、写本時代の文献に関する伝播状況の特徴から、唐詩の本文について分析する必要もある。例えば本論文の第二章では、日本に初めて伝えられた王維の別集は、彼が死去した後に編集された十卷本ではなく、彼の生前に既に流行していた作品の小集である可能性が極めて高いことがわかった。また第五章では、中国では記載が全くない賀蘭遂の作品が日本に伝えられたのは、多くの偶然によるものと考えられることがわかった。これからの研究において、『千載佳句』の本文については、その異同の独特さを強調する必要がある。ここで強調する内容は、これらの異同を校勘資料として利用して他の版本と比較するだけではなく、その基本的な校勘の上で、これら異同の背後にある歴史や文化を結合し考慮し、なぜ、こういった経緯でこのような異同が生まれたのか、その影響がどのようなものであるかについても検討する必要がある。例えば『千載佳句』の杜荀鶴の詩句「漁舟火影寒焼浪（漁舟火影寒く浪を焼す）」中の「寒焼浪」について、中国の文献では、「帰寒浦」と「寒帰浦」の二つの説があるが、『千載佳句』の「寒焼浪」という異同は全く存在しない。だが驚くべきことに、日本ではこの「寒焼浪」という表現が、そのまま『和漢朗詠集』をはじめとする日本漢詩選集の中で改められることなく連綿と採用され続けたのである。さらにこの「寒焼浪」という詩句は、大江維時やその他の平安文人に大きな影響を与え、彼らの漢詩の中で詠み込まれている。『和漢兼作集』卷三春部には大江維時の「明珠有潤涯間照、降焰無煙浪上焼（明珠潤有りて涯間に照り、降焰煙無く浪上に焼ゆ）」という詩句があり、また同書卷九冬部には源順の「潭色変來秋月後、浪文焼盡暮煙中（潭色変じ來たる秋月の後、浪文焼き尽く暮煙の中）」という詩句がある。この「降焰無煙浪上焼」、「浪文焼盡暮煙中」という詩句は、無論この「漁舟火影寒焼浪」の影響を受けたものである。⁽⁴⁾このことから、『千載佳句』

の異同は、明らかに意識して伝え継がれたものであり、決して単なる書き誤りとして片づけられるものではないことがわかる。つまり『千載佳句』の異同は、東アジア漢字文化圏における唐詩の流伝と受容、そして変容の過程を理解するのに重要な手がかりを提供しているのである。

また『千載佳句』所収の詩人の一部は、その作品が朝鮮の文献においても見られる。例えば、『千載佳句』中の白居易、許渾、章孝標、杜荀鶴、劉禹錫、方干、温庭筠、趙嘏、羅隱、賈島、張籍等の十一人は、その詩作が朝鮮高麗朝前期（一〇〇〇年頃）に成書した『十抄詩』にも収録される⁽⁵⁾。『十抄詩』に収録される唐代の詩人は計二十人であるが、これは『千載佳句』の収録詩人の約半数と重複している。ここから、『千載佳句』には平安文人独自の採録基準が存在したのではなく、当時の東アジア漢字文化圏に共通した唐詩評価の潮流に沿うものであったことがわかる。

最後に、『千載佳句』所収の杜荀鶴詩について再び例を挙げよう。杜荀鶴は少なくとも景福元年（八九二）夏には、別集『唐風集』三巻を自編した⁽⁶⁾。この自編集は鈔本の形で流行したが、早くに散佚している。現存する最古の杜荀鶴の別集は、北宋の蜀刻本『杜荀鶴文集』と南宋の陳解元の書棚本としての『唐風集』二種の刊本である。ここで『千載佳句』の杜荀鶴の詩句を、この二つの宋刊本と校勘すると、異同が非常に多いことに気付く。今後、大江維時が参照した底本（先述の自編集鈔本の系統か）について検証する価値があるだろう。またその底本が杜荀鶴自編の鈔本を祖本としていたとして、杜荀鶴の自編集成立から『千載佳句』が成立するまでの期間はわずか数十年ほどしかない。しかも当時、日本は長らく遣唐使の派遣を停止していた⁽⁷⁾。日中両国間に正式な交流が無かった時代、杜荀鶴の詩はいかにしてこれほど短期間のうちに日本に伝わったのか。これは『千載佳句』における杜荀鶴の詩句の異同と関係があるのか。これらの問題については今後も引き続き研究の必要がある。

以上、本論文の結論に基づく今後の展望と課題について述べた。本論文が新たな唐代文学研究のきっかけとなってくればこの上ない幸せである。

注

- (1) 宋紅校訂『千載佳句』（上海古籍出版社、二〇〇三年）参照。
- (2) 例えば、音楽に合わせ朗詠する『和漢朗詠集』の雑部には「管弦付舞妓」があるのみである。また『文華秀麗集』及び『経国集』には「楽府」の部立て、『江吏部集』は音楽部に琴酒の項目があるのみである。
- (3) 「王昭君」について、『倭名類聚抄』巻四、『龍鳴抄』巻上、『教訓鈔』巻六にこの曲名が見える。また『文華秀麗集』巻中「楽府」には嵯峨天皇御製の「王昭君」及びこれに唱和した良岑安世、菅原清公、朝野鹿取、藤原是雄などの「奉和王昭君」詩が収められる。
- (4) 小野泰央『平安朝天歴期の文壇』（風間書房、二〇〇八年、第二二四頁）に「杜荀鶴の句の「焼浪」は実際に漁火によって波を焼く風景を示し、源順と大江維時の句は紅葉や花の色によって「焼く」と表現しているが、「波が焼ける」という表現自体は影響関係にあると考えられる」とある。
- (5) 查屏球「新補『全唐詩』一〇二首―高麗本『十抄詩』中所存唐人佚詩考」（『唐代文学研究』第〇〇期、二〇〇四年）、及び三木雅博『『十抄詩』『夾注名賢十抄詩』の編撰』における「解題篇」（汲古書院、二〇一一年）を参照。
- (6) 景福元年（八九二）夏、杜荀鶴の友人顧雲が編集した『唐風集』序文に「杜荀鶴平生所著五、七言凡三百篇、

分爲上、中、下三卷、目曰『唐風集』とある（『杜荀鶴文集』、宋蜀刻本、上海古籍出版社、一九九四年）。

(7) 日本から最後の遣唐使が派遣されたのは、仁明天皇承和五年すなわち唐文宗開成三年（八三八）である。その後、宇多天皇寛平六年即ち唐昭宗乾寧元年（八九四）、菅原道真の建議により遣唐使が廃止された。

附録 『千載佳句』所収詩人間における交遊を示す詩の数の一覧表

【凡例】

『千載佳句』所収詩人たちの間の交遊状況を詳しく理解し、さらに『千載佳句』において唐詩を収録する特徴をもっと全面的に探察するため、以下の交遊表を作り、四つに分類した。

表一 『千載佳句』所収の初盛唐詩人

表二 『千載佳句』所収の中唐詩人（大暦時期を中心として）

表三 『千載佳句』所収の中唐詩人（元白時期を中心として）

表四 『千載佳句』所収の中晩唐詩人（晩唐時期を中心として）

これらの表は、呉汝煜主編『唐五代人交往詩索引』（上海古籍出版社、一九九三年）を参考として、横列が詩を贈った詩人で（表中では「贈」を表示）、縦列が詩を贈られた詩人（表中では「受」を表示）である。但し『唐五代人交往詩索引』に誤って判された詩作（例えば、晩唐の方干の詩歌である「新秋独夜寄戴叔論」など）は、採用しない。

また、本表に挙げた詩人の順番は、周祖譔主編『中国文学家大辞典』（唐五代卷）（中華書局、一九九二年）、周勛初主編『唐詩大辞典』（修訂本）（鳳凰出版社、二〇〇三年）などに考証される文人の生年順に拠った。また生年

が確定できない詩人については、科挙及第の年により配列した。

なお、詩の中には、全文ではなく断片のみが残るものもあるが、贈答という事実を示す上では、データとしての価値は全文が残るものと同等であるため、一首と数える。

皎然	耿 漳	皇甫 冉	劉長 卿	錢 起	豆 虞 (盧 峯)	杜 甫	丁 仙 芝	崔 顥	李 白	王 維	高 適	李 頎	李 範	張 諤	宋之 問	韋 嗣 (嗣 立)	駱 賁 王	裴 行 儉	贈 受
																	1		裴行儉
															1				駱賁王
															1				韋嗣(嗣立)
						2							1				3		宋之問
														1					張諤
						1	1	1		3				4					李範
										1	1								李頎
		1	1			20				1		2							高適
1	1	1		5		3													王維
			1			14					2								李白
											1	1							崔顥
																			丁仙芝
								3		3									杜甫
						1													豆虞(盧)峯
									3										錢起
		2		1															劉長卿
																			皇甫冉
																			耿漳
																			皎然

表一 『千載佳句』所収初盛唐詩人間の交遊を示す詩教一覽表

劉禹錫	張籍	令狐楚	楊巨源	陳羽	楊衡	唐德宗	于鵠	盧綸	李端	皎然	耿湣	戴叔倫	嚴維	郎士元	皇甫冉	劉長卿	錢起	李嘉祐	贈受
										2		1		1	1	3	1		李嘉祐
								4	3		1	1		2				1	錢起
											1		7		2		1	1	劉長卿
									1			1		1			1	4	皇甫冉
									1			1				1	7	1	郎士元
											1				3	6	6	3	嚴維
				1		1			1										戴叔倫
								10	4			2	1			1			耿湣
									2										皎然
								8			4		1					1	李端
			1						5		1								盧綸
	2																		于鵠
2																			唐德宗
																			楊衡
					1							1							陳羽
																			楊巨源
								1											令狐楚
																1			張籍
												1							劉禹錫

表二 『千載佳句』所収中唐詩人間の交遊を示す詩数一覧表

(大暦時期を中心として)

熊孺登	周元範	張殷衡	盧拱	李播	殷堯藩	張蕭遠	鮑溶	陸暢	賈島	元稹	白居易	劉禹錫	竇羣	王建	張籍	韓愈	馮宿	令狐楚	楊巨源	唐德宗	贈受
									1	4	2										唐德宗
									2	10	5	3		2	4						楊巨源
									5		19	65		1	5				7		令狐楚
										4	3					3					馮宿
							1		6	2	6	3		1	7						韓愈
									8	3	15	2		6		19					張籍
									6			1			14	1			1		王建
								1		10	2							1			竇羣
					2					2	123		1		3		1	4	2		劉禹錫
					1					126		138			14	2	1	3	2		白居易
											227	38	3		2				1		元稹
														1	4	2					賈島
												1			1	1					陸暢
																					鮑溶
															2						張蕭遠
						1			1		9										殷堯藩
											3	1									李播
										1	3			1							盧拱
											2										張殷衡
									1		15				1						周元範
											1	1									熊孺登

表三 『千載佳句』所収中唐詩人間の交遊を示す詩数一覧表

(元白時期を中心として)

杜 荀 鶴	黃 滔	羅 隱	曹 松	羅 虬	喻 鳧	方 干	溫 庭 筠	張 祜	許 渾	朱 慶 餘	陳 標	祝 元 膺	趙 嘏	徐 凝	施 肩 吾	章 孝 標	殷 堯 藩	鮑 溶	賈 島	元 稹	白 居 易	劉 禹 錫	王 建	張 籍	韓 愈	令 狐 楚	楊 巨 源	贈 受	
									1																			楊巨源	
								3		1																		令狐楚	
								2																				韓愈	
										3																		張籍	
										1																		王建	
							2	1																				劉禹錫	
									2	1				13														白居易	
				1						1			4	5	1	1												元稹	
					1	1				3																		賈島	
									1																			鮑溶	
																												殷堯藩	
										1																		章孝標	
														2														施肩吾	
						1																						徐凝	
							1																					趙嘏	
											1																	祝元膺	
																												陳標	
									1							2												朱慶餘	
						1		1																				許渾	
										1																		張祜	
											1																	溫庭筠	
1		1	5																									方干	
						7							1															喻鳧	
																												羅虬	
																												曹松	
2	1																											羅隱	
																													黃滔
						1																							杜荀鶴

表四 『千載佳句』所収中晩唐詩人間の交遊を示す詩数一覧表
(晩唐時期を中心として)

引用及び参考文献一覧

この一覧は本論文執筆にあたって参考とした研究文献の目録である。研究文献は日中両国の古文献と研究論著に分類し、それぞれ成立年代順と発表年代順に配別した。

【古文献】

- 徐陵 『玉臺新詠』（中州古籍出版社、一九九一年）
- 魏徵等 『隋書』（中華書局、一九七三年）
- 李林甫等 『唐六典』（中華書局、一九九二年）
- 王維著、米山寅太郎等解題『王右丞文集』（静嘉堂文庫本）（『古典研究会叢書・漢籍之部三二』、汲古書院、二〇〇五年）
- 杜佑 『通典』（中華書局、一九八八年）
- 空海 『遍照發揮性靈集』（渡辺照宏等校注『三教指帰 性靈集』、『日本古典文学大系七一』、岩波書店、一九六五年）
- 菅野真道等 『続日本紀』（黑板勝美、国史大系編修会編『続日本紀新訂増補』、吉川弘文館、一九五二年）
- 藤原佐世 『日本国見在書目録』（宮内庁書陵部所蔵室生寺本）（名著刊行会、一九九六年）
- 劉昫等撰 『旧唐書』（中華書局、一九五五年）

- 大江 維時 『千載佳句』（歷博本）（国立歴史民俗博物館館蔵史料編集会編『漢詩文』第二一卷、臨川書店、二〇〇一年）
- 王 溥 『唐会要』（中華書局、一九五五年）
- 李 昉等 『文苑英華』（中華書局、一九六六年）
- 王 欽若等 『冊府元龜』（中華書局、一九六〇年）
- 陳 彭年等重修 『校正宋本広韻附索引』（芸文印書館、一九六七年）
- 紫 式部 『源氏物語』（『日本古典文学全集』、小学館、一九七〇年）
- 藤原 公任撰、伝藤原行成筆 『倭漢朗詠集』（御物粘叶本）（雄山閣出版株式会社、一九六八年）
- 歐 陽修等 『新唐書』（中華書局、一九七五年）
- 王 安石 『王荊公唐百家詩選』（静嘉堂文庫所蔵で非公開の影印本）
- 宋 敏求 『唐大詔令集』（商務印書館、一九五九年）
- 司 馬光 『資治通鑑』（中華書局、一九五六年）
- 郭 茂倩 『樂府詩集』（中華書局、一九七九年）
- 心覚 阿闍梨 『入唐記』（平安末期鈔本『阪本龍門文庫覆制叢刊之三』、奈良県吉野町龍門文庫、一九六〇年）
- 陳 應行 『吟窗雜録』（中華書局、一九九七年）
- 藤原 基俊 『新撰朗詠集』（二玄社、一九八四年）
- 未 明 『日本紀略』（黒板勝美、国史大系編修会編『増補新訂国史大系』十卷、吉川弘文館、一九六五年）
- 王 懋撰、王文錦点校『野客叢書』（中華書局、一九八七年）

- 金沢文庫本 『白氏文集』（現大東急記念文庫蔵、勉誠社、一九八三年）
- 宗 性 『白氏文集要文抄』（東大寺図書館蔵）
- 内閣文庫本 『管見抄』（国立公文書館内閣文庫蔵）
- 正宗敦夫文庫本 『長恨歌伝・長恨歌序・長恨歌』（福武書店、一九八一年）
- 虎関 師鍊 『元亨積書』（黑板勝美、国史大系編修会編『新訂増補国史大系』卷三一、吉川弘文館、一九六五年）
- 胡 応麟 『詩藪』（中華書局、一九五八年）
- 明銅活字本 『唐五十家詩集』（上海古籍出版社、一九八一年）
- 毛 晉 『唐人選唐詩』（台湾大通書局、一九七三年）
- 仇 兆鰲 『杜詩詳註』（中華書局、一九七九年）
- 彭 定求等 『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）
- 董 誥等 『全唐文』（中華書局、一九八三年）
- 徐 松撰、趙守儼点校 『登科記考』（中華書局、一九八四年）
- 徐 松撰、張穆校補、方巖点校 『唐兩京城坊考』（中華書局、一九八五年）
- 徐 松輯、高敏点校 『河南志』（中華書局、一九九四年）
- 汪 師韓 『詩学纂聞』（楊復古輯『昭代叢書広編』卷四一、沈氏世楷堂、一九一九年）

【研究論著】

- 仏書刊行会編纂『大日本仏教全書』（仏書刊行会、一九一四年）
- 王 雲五 『叢書集成』（商務印書館、一九三六年）。
- 金子 彦二郎 『平安時代文学と白氏文集』（増補版、培風館、一九四三年）
- 小林 太市郎 『王維の生涯と芸術』（全国書房、一九四四年）
- 平岡 武夫 『唐代の長安と洛陽・地図篇』（『唐代研究のしおり第七』、京都大学人文科学研究所、一九五六年）
- 川口 久雄 『平安朝日本漢文学史の研究』（明治書院、一九五九年）
- 小川 環樹 「新撰類林抄校読記」（『中国文学報』第一冊、一九五九年）
- 任 半塘 『教坊記箋訂』（中華書局、一九六二年）
- 金原 理 「肥前島原松平文庫本『千載佳句』について」（『語文研究』一七号、九州大学国語国文学会、一九六四年）
- 清田 伸一 「古今六帖と千載佳句」（『語文研究』二二号、九州大学国語国文学会、一九六六年）
- 入谷 仙介 『王維研究』（創文社、一九七六年）
- 伏見 冲敬 『書道字典』（角川学芸出版、一九七七年）
- 瞿 蜕園、朱金城 『李白集校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）
- 謝 海平 『唐代詩人与在華外国人之文字交』（文史哲出版社、一九八一年）
- 巖 紹盪 「日本『千載佳句』白居易詩佚句輯稿」（『文史』第二三輯、中華書局、一九八四年）

- 金原 理 『千載佳句』（辞典解説…『日本古典文学大辞典』卷三、岩波書店、一九八四年）
- 川口 久雄、奈良正一 『江談證注』（勉誠社、一九八四年）
- 丁 如明 『開元天宝遺事十種』（上海古籍出版社、一九八五年）
- 趙 康民 「臨潼唐慶山寺舍利塔基精室清理記」（『文博』第五期、一九八五年）
- 顧 承甫 「唐代慶山寺小考」（『史林』第一期、一九八六年）
- 太田 次男 『千載佳句』から『和漢朗詠集』へ——白詩を中心として（『和漢比較文学叢書』卷四『中古文学と漢文学Ⅱ』、汲古書院、一九八七年）
- 贊 寧撰、范祥雍点校『宋高僧伝』（中華書局、一九八七年）
- 黄 永武 『敦煌的唐詩』（洪範書店、一九八七年）
- 朱 金城 『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）
- 瞿 蛻園 『劉禹錫集箋證』（上海古籍出版社、一九八九年）。
- 傅 璇琮 『唐才子伝校箋』（中華書局、一九八九年）
- 劉 乾 「劉長卿詩雜考」（『文献』第一期、一九八九年）
- 吳 汝煜、胡可先 『全唐詩人名考』（江蘇教育出版社、一九九〇年）
- 妹尾 昌典 『千載佳句』の校勘（『成城国文学』七号、成城国文学会、一九九一年）
- 陳 尚君 『全唐詩補編』（中華書局、一九九二年）
- 周 紹良 『唐代墓誌彙編』（上海古籍出版社、一九九二年）
- 周 祖譔 『中国文学家大辞典』（唐五代卷）（中華書局、一九九二年）

- 妹尾 昌典 「『千載佳句』出典攷正」(『成城国文学』九号、成城国文学会、一九九三年)
- 吳 汝煜 『唐五代人交往詩索引』(上海古籍出版社、一九九三年)
- 宋蜀刻本唐人集叢刊『杜荀鶴文集』(上海古籍出版社、一九九四年)
- 吳 鋼 『全唐文補遺』(三秦出版社、一九九四～二〇〇六年)
- 韓 理洲 『新增千家唐文作者考』(三秦出版社、一九九五年)
- 傅 璇琮 『唐人選唐詩新編』(陝西人民教育出版社、一九九六年)
- 儲 仲君 『劉長卿詩編年箋注』(中華書局、一九九六年)
- 佟 培基 『全唐詩重出誤収考』(陝西人民教育出版社、一九九六年)
- 妹尾 昌典 「『千載佳句』の資料的価値について」(成城大学『成城国文学』一三号、一九九七年)
- 陳 尚君 『唐代文学従考』(中国社会科学出版社、一九九七年)
- 陳 鉄民 『王維集校注』(中華書局、一九九七年)
- 陳 應行 『吟窗雜録』(中華書局、一九九七年)
- 張 固也 「論「新唐書・芸文志」的史料来源」(『吉林大学社会科学学報』第二期、一九九八年)
- 森岡 ゆかり 「『千載佳句』・『和漢朗詠集』所収許渾詩本文をめぐって」(古典研究会編『汲古』三七号、汲古書院、二〇〇〇年)
- 森岡 ゆかり 「伝小野道風筆許渾詩本文について」(『和漢比較文学』二六号、和漢比較文学会、二〇〇一年)
- 植木 久行 「『千載佳句』所収白居易詩逸詩句考(上・下)」(『白居易研究年報』第二・四号、勉誠出版、二〇〇一・二〇〇三年)

- 陳 貽焮 『増訂注釈全唐詩』（文化文芸出版社、二〇〇一年）
- 周 紹良 『唐代墓誌彙編続集』（上海古籍出版社、二〇〇一年）
- 宋 紅 『千載佳句』（上海古籍出版社、二〇〇三年）
- 周 勛初 『唐詩大辭典』（修訂本、鳳凰出版社、二〇〇三年）
- 查 屏球 「新補『全唐詩』一〇二首—高麗本『十抄詩』中所存唐人佚詩考」（『唐代文學研究』〇〇期、広西師範大学出版社、二〇〇四年）
- 三木 雅博 「中国晚唐期の唐代詩受容と平安中期の佳句選—顧陶撰『唐詩類選』と『千載佳句』『和漢朗詠集』—」（『国語と国文学』八二号、東京大学国語国文学会、二〇〇五年）
- 佐 宏 「楊巨源誤重詩考弁」（『求索』第八期、二〇〇五年）
- 後藤 昭雄 「研究ノート…国立歴史民俗博物館本『千載佳句』について」（『日本漢文學研究』一号、二松学舎大学二十一世紀COEプログラム、二〇〇六年）
- 静 永健 「『千載佳句』所引耿漳詩異文考」（『中唐文学会報』一三号、中唐文学会、二〇〇六年）
- 遍照 金剛撰、盧盛江校考 『文鏡秘府論彙校考』（中華書局、二〇〇六年）
- 謝 思煒 『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）
- 尹 占華 『王建詩集校注』（巴蜀書社、二〇〇六年）
- 吳 鋼 『全唐文補遺』（千唐誌齋新藏專輯）（三秦出版社、二〇〇六年）
- 計 有功撰、王仲鏞校箋 『唐詩紀事校箋』卷一五（中華書局、二〇〇七年）
- 丁 放、袁行霈 「姚崇、宋璟与盛唐詩壇」（『文学遺產』第三期、二〇〇七年）

- 芳村 弘道 「唐詩の新資料・朝鮮本『夾注名賢十抄本』をめぐって―『千載佳句』との関連性―」(『和漢比較文学』四〇号、二〇〇八年)
- 仁平 道明 『王朝文学と東アジアの宮廷文学』(竹林舎、二〇〇八年)
- 小野 泰央 『平安朝天曆期の文壇』(風間書房、二〇〇八年)
- 趙 華偉 「述書賦」成書及版本源流考」(『古籍整理研究学刊』第二期、古籍整理研究学刊雜誌社、二〇〇九年)
- 程 章燦 「唐代墓誌叢考」(『古刻新詮』、中華書局、二〇〇九年)
- 謝 思煒 「千載佳句」所載の白居易佚詩に関する考察―中唐時代の歌伝協同体創作論を兼ねて―」(高松寿夫・雋雪艶編『日本古代文学と白居易・王朝文学の生成と東アジア文化交流』、勉誠出版、二〇一〇年)
- 陶 敏 『全唐詩作者小伝補正』(遼海出版社、二〇一〇年)
- 胡 可先、魏娜 「唐代詩人事蹟新證」(『浙江大学学报』(人文社会科学版)第五期、浙江大学出版社、二〇一〇年)
- 劉 真倫、岳珍校注 『韓愈文集彙校箋注』(中華書局、二〇一〇年)
- 神鷹 徳治、静永健主編 『旧鈔本の世界 漢籍受容のタイムカプセル』(『アジア遊学』一四〇、勉誠出版、二〇一一年)
- 陳 翀 「王朝公権的威嚴象徴…略談日本漢籍的一個重要特徴」(『中文學術前沿』第一輯、浙江大学出版社、二〇一一年)
- 徐 礼節、余恕誠校注 『張籍集繫年校注』(中華書局、二〇一一年)

三木 雅博 『『十抄詩』『夾注名賢十抄詩』の編撰』（汲古書院、二〇一一年）

静永 健 『『千載佳句』所収崔致遠逸詩句初探』（『唐詩推敲 唐詩研究のための四つの視点』、研文出版、二〇一二年）

陶 敏 『全唐五代筆記』（三秦出版社、二〇一二年）

胡 可先 『出土文献与唐代詩学研究』（中華書局、二〇一二年）

張 說著、熊飛校注 『張說集校注』（中華書局、二〇一三年）

霍 志軍、安濤 『盛唐士人求仕活動与文学 以關隴地区為中心』（中国社会科学出版社、二〇一三年）

劉 玉才、潘建国主編 『日本古鈔本与五山版漢籍研究論叢』（北京大学出版社、二〇一五年）

【初出一覽】

各章の初出は、以下の通りである。

序論 書き下ろし

上篇 奈良・平安朝に伝来した盛唐の詩歌

第一章 「王維集廿卷」考

書き下ろし

第二章 唐岐王李範の中国逸詩考

初出…「唐皇族詩人李範新探―『千載佳句』所收李範五聯詩句考論」

(『日本古抄本与五山版漢籍研究論叢』、北京大学出版社、二〇一五年、九八―一四頁)

第三章 『千載佳句』所收盛唐詩人及び詩歌補考

初出…「『千載佳句』所收盛唐詩人僧貞幹・張諤・丁仙芝考」

(九州大学中国文学会『中国文学論集』第四四号〔二〇一五年十二月刊行予定〕に掲載決定)

下篇 奈良・平安朝に伝来した中晩唐の詩歌

第四章 「旧卷常に抄されて外国に将く」―『千載佳句』所収の楊巨源詩を中心として―
書き下ろし

第五章 『千載佳句』所収の中晩唐詩人について
書き下ろし

結論 書き下ろし

